

大 町 遺 跡

西日本鉄道株式会社太宰府駅駅舎改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1992年3月

古都大宰府を守る会

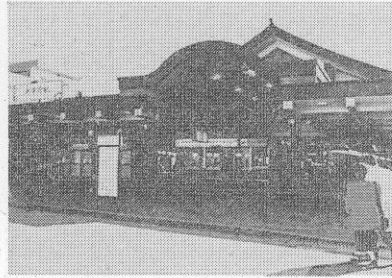
大 町 遺 跡

西日本鉄道株式会社太宰府駅駅舎改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1992年3月

太宰府市教育委員会

屋根は「権現流造り」 西鉄太宰府駅改築終わる



西鉄大牟田線太宰府駅の
全面改築工事が二十五日終
了し、太宰府天満宮のお社
を思わせる「権現流造り」
の屋根が出来上がった。写
真

新駅舎は鉄骨平屋建て
で、駅務室や太宰府市が運
営する観光案内所を含め面
積約一千平方メートル。ラッシュ
時の混雑緩和のため、コン
コースを旧駅の一・五倍に
広げた。工費は約三億円。
駅周辺では、市が景観整
備事業を八年から実施。
参道のカラー舗装を終え
ており、西鉄も老朽化した
り出す。

(1991年 1月26日 西日本新聞より)

序

太宰府市は周知のとおり、一大地方都市福岡の一角を占め、近年の好景気に伴い都市化の傾向をますます顕著なものへと致しております。

一方、開発にともなう埋蔵文化財の審査件数も年毎に増加し、発掘調査に至る物件も相変わらず多く、太宰府の古代、中世を中心とした時代の情報をつぎつぎに提供いたしております。

この度報告いたします大町遺跡は、現代の太宰府の玄関口とも申せます西日本鉄道太宰府駅の駅舎の改築工事に伴い太宰府市教育委員会が平成二年度に発掘調査を実施したもので、安楽寺太宰府天満宮の参道街の変遷を知るうえで欠くことのできない内容を持っております。本書が今後の太宰府の都市としての在り方を考える上で活用されることを願っております。

調査、報告に際して西日本鉄道株式会社の担当方々には有形無形のご協力、ご配慮をいただきました。また、調査報告に従事していただいた作業員の方々には並々ならぬご尽力をいただき、ここに記して感謝申し上げます。

平成4年3月31日
太宰府市教育委員会
教育長 長野治巳

例 言

1. 本書は西日本鉄道株式会社の委託を受けて太宰府市教育委員会が発掘調査を実施した太宰府市大字太宰府所在の大町遺跡の調査報告書である。

2. 本書に使用した図のうち遺構の実測図はアジア航測株式会社が空中写真測量によって図化した1/20の実測図を、遺物の実測図は太宰府市教育委員会が1/1のスケールで作成したものをベースとして使用している。

3. 中世土器の年代観は山本信夫を設定した期の設定に基づく。(「太宰府における古代末から中世の土器、陶磁器」山本信夫1988年 中世土器の研究Ⅳ 日本中世土器研究会ほか)

4. 本書で使用される中世土器の調整手法、特にナデについては、残された単位幅、断面形状などよりaとbに分けて記述している。即ち、単位幅が2から4ミリほどで断面形状が稜線が連続する波状を呈し、土器に含まれる砂粒がナデの方向に従って真線的に尾を引きながら移動しているものが「ナデa」である。ケズりに近いものもあり、工具を用いたナデと考えている。

それに対し、「ナデb」は単位幅が体部では1センチを越えナデの方向に細かい線状痕が走り、砂粒は表面に引き起こされるものより埋没するものが多い。広義のヨコナデがこれに相当する。指によるナデと考えられる。また、同じbでも口縁端部の再調整によってハッキリと残されたものをb'としている。(詳細後述)

また、本書で使用した中世土器特に土師器の図は、異なる調整間の境を実線で、同じ調整同志の境を破線で図示しており、視覚上の稜線は省かれている。

5. 本書の執筆は遺物の一部を中島恒次郎、森田レイ子、田中克子がその他を山村信榮が、編集は山村、田中、森田が協議の上おこなった。

6. 本遺跡に関する図面、写真、遺物等の保管、管理は太宰府市教育委員会が一括しておこなっている。

目 次

1. はじめに	3
歴史的環境	
太宰府支線小史	
2. 調査環境	7
調査経過	
調査体制	
調査方法	
整理方法	
3. 遺跡の調査	11
層序	
遺構と遺物	
土坑 (SD)	
井戸 (SE)	
溝 (SD)	
その他の遺構と遺物 (SX ほか)	
土器法量表	
遺構一覧表	
出土遺物台帳	
4. 小 結	44
5. 参考資料	
筑前野間焼について	48
「太宰府天満宮鍔華表鑄立日記」	75



第1図 太宰府市北東部遺跡分布図



第2図 参道地下基盤土層



第3図 大町周辺遺跡調査図

1. はじめに

歴史的環境

今回調査の大町遺跡は太宰府市の北東部、太宰府天満宮の西側に展開する門前町にあり、現在は太宰府への旅客口である西日本鉄道株式会社の太宰府駅が建っている。

本報告の大町遺跡周辺での考古学的な調査は近年の参道周辺の再開発の活発化に伴っておこなわれるようになった。馬場遺跡（1、2次）、新町遺跡（1から4次）、連歌屋遺跡、安楽寺太宰府天満宮（1から3次）などがそれで、試掘、立会調査によってさらにデーターを集積している。1989年から1990年にかけて太宰府市によって現在参道とよばれる西鉄太宰府駅から天満宮にかけての道路地下に上下水道、ガス、電機ケーブルなどを同時に通す共同溝を埋設する工事をおこなった。この際に一時撤去される2本の鳥居の解体工事と共同溝埋設に伴う掘削に立会調査をおこない、鳥居については寛永通宝や銅のクサビなど鳥居建築時に使用された遺物を回収し、地下地盤については地下約3メートル、長さ約300メートルの土層データを収集した。

遺跡周辺の地形や土壌は調査の所見によれば中生代に出現した花崗岩が風化し崩壊する堆積輪回到支配され、大町遺跡の乗る基盤層は現在の地表面下約4mに俗に「真砂土」と称される風化花崗岩とその上面に乗る第三紀に堆積したとされる厚さ約2mほどの人頭大の花崗岩礫が主体の礫層である。この礫層上での人類の活動は大町遺跡の隣地で調査した新町遺跡3次調査で縄文時代晩期中頃の包含層を最古のものとし、同時期の遺物が今回の調査でも出土している。その後、平安時代までは顕著な遺物や遺構は検出されていない。平安時代に入り特に10世紀になるとにわかに該期の遺物が増加し、11世紀後半から12世紀前半にかけて馬場遺跡二次調査、連歌屋遺跡に見られるような溝を用いた土地の区割り＝街区の発生が見られ、それに伴って在地産の土器を主体とする大量消費をおこなう生活空間が出現する。これら遺跡群に隣接する安楽寺（現太宰府天満宮）内でも同時期に寺域の拡張、建物建設のための地業などが盛んにおこなわれたことが発掘調査によって確認されている。また、大宰府での条坊の整備もこの時期であり、安楽寺の前面までがこの時期の条坊に含まれる可能性がある。いずれにしろ安楽寺の経済活動と大町遺跡を含む周辺遺跡の動向は密接な関係にあり、近世的な門前町が成立する以前の空間構造の解明が望まれる。

近世の町並みの形成史は現状では考古学側からの資料では十分な説明はできない。安楽寺天満宮本殿を含む中世の大町遺跡周辺は、中世末期の天正六年に当時大城山にあった岩屋城を攻めた秋月氏の兵火によって灰燼に帰したとされている。近世の町並みの復興は地元に残る「平井文書」などより在地の商、職人を中心に天満宮社家に、新たに大城山で被災した原山無量寺

の僧侶が加わり、これらの人々が中心となって行なわれたらしい。これによって成立した村落が「宰府村」である。「筑前国続風土記付録」、「筑前名所図絵」など近世の地誌掲載の挿絵などの絵画資料を見るかぎり、江戸中頃以降、明治から現代に至るまで街路などのレイアウトは変わっていないようである。江戸期の宰府村は社家、商職人、農家、旅宿の異なる四つの街区から構成され、藩より宿駅の指定を受け、現在の五条交差点から天満宮に至るまでの間短い直線道路と辻からなる通りに「ウナギの寝床」と呼ばれる短冊型の地割を持つ家々がひしめくように建ち並んでいた。江戸後半期の旅行ブーム、遊参的な「宰府参り」の流行で街が活況を呈したことは各種の旅行記に記されているところである。(最近の調査で発見される江戸期の遺構の大半がこの時期のものであることを付記しておく。)

現代の天満宮を中心とした街の存在もこの時期に規定されたもので、明治以降の交通手段や産業構造の変化など街をとりまく外界と時代の要求に伴って表面的な景観が変化して来たに過ぎない。

太宰府支線小史

現在、太宰府天満宮への主たる旅客はバスを利用する団体の遠距離旅行者と乗用車や鉄道を利用する個別的近距離旅行者の二者がある。バスや乗用車の利用は近年になって急に増えたもので、それまでは鉄道が主体であった。鉄道は現在、西日本鉄道株式会社の太宰府支線が本線の大牟田線と連絡し、県下から多くの旅客を短時間で太宰府まで輸送している。

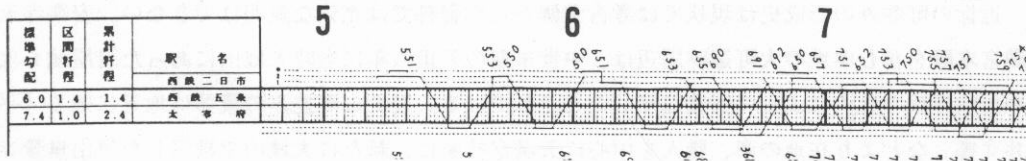


第 4 図 太宰府馬鉄(二日市中央通)



第 5 図 昭和27年の西鉄太宰府駅

表 1 西鉄太宰府線1991年ダイヤグラム



太宰府支線は明治35年に行なわれた天満宮の千年大祭に合わせて、太宰府馬車鉄道株式会社が資本金5万円をもって、現在のJR二日市駅前から迎田（現西鉄二日市駅付近）、五条を通る2.75km、軌間914mm、客車（16人乗り）、貨車2両で同年5月1日より営業を始めている。明治40年7月17日商号を太宰府軌道と改称し、大正2年1月20日には動力を馬から蒸気機関に切り替え、客車も32人乗りとなった。営業は機関車4両、客車8両でおこない、それまであった貨物は廃止された。現在の大牟田線本線は大正13年によく九州鉄道が福岡―久留米間を開通させている。昭和2年9月24日、太宰府線は資本金を50万円に増資し蒸気機関を電車に換え、軌間を1435mmにし、線路も現在の位置に変更した。昭和4年9月5日蒸気機関で改軌せぬまま営業を続けていた現JR二日市駅―迎田間0.8kmは廃止され、その後、昭和9年6月30日太宰府軌道は九州鉄道と合併、その九州鉄道も昭和17年9月22日、九州電気軌道などと共に現在の西日本鉄道株式会社となった。

太宰府駅の駅舎は昭和2年に整備されたものと思われ、天満宮の1050年の大祭に合わせ昭和25年10月より改良工事をおこない、駅舎を従来より50m後退させてロータリーを設けてホームも4両編成の車両が発着できるように延長し、同27年1月8日に竣工した。その駅舎も今回平成4年の天満宮の忌祭1090年、本殿改築400年の大祭に合わせて鉄骨樹脂鋼板葺きに建て替わり、平成3年10月25日に竣工した。

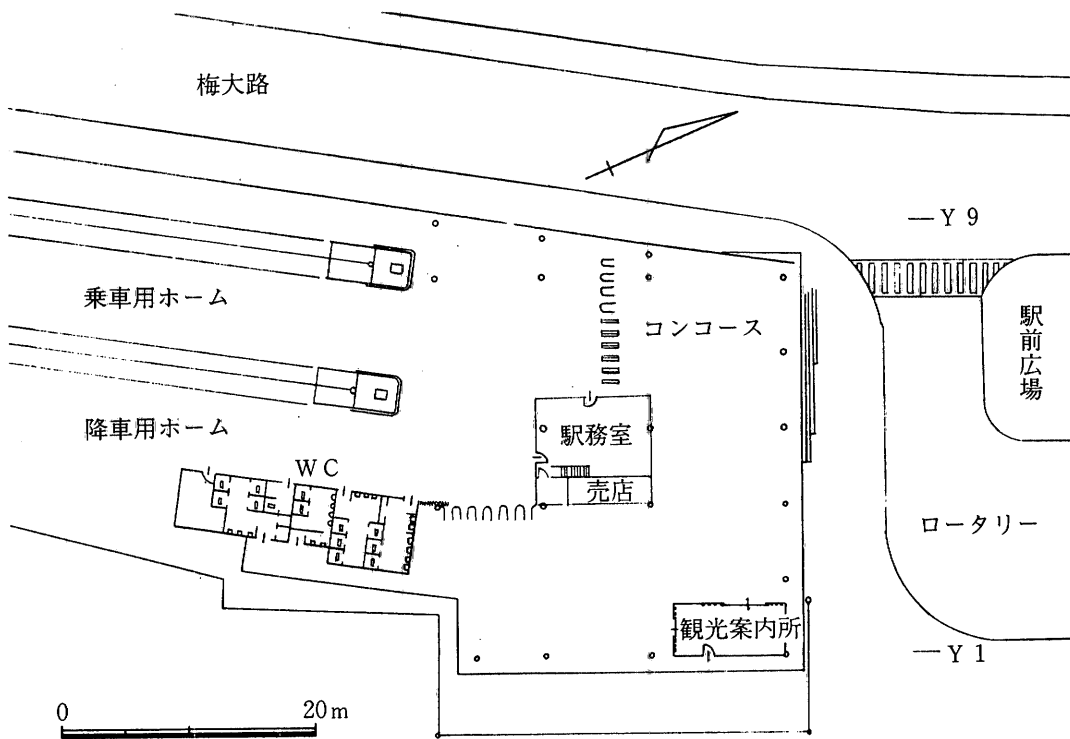
（参考文献）

「明日に翔ける」1988年 西鉄社史編纂委員会

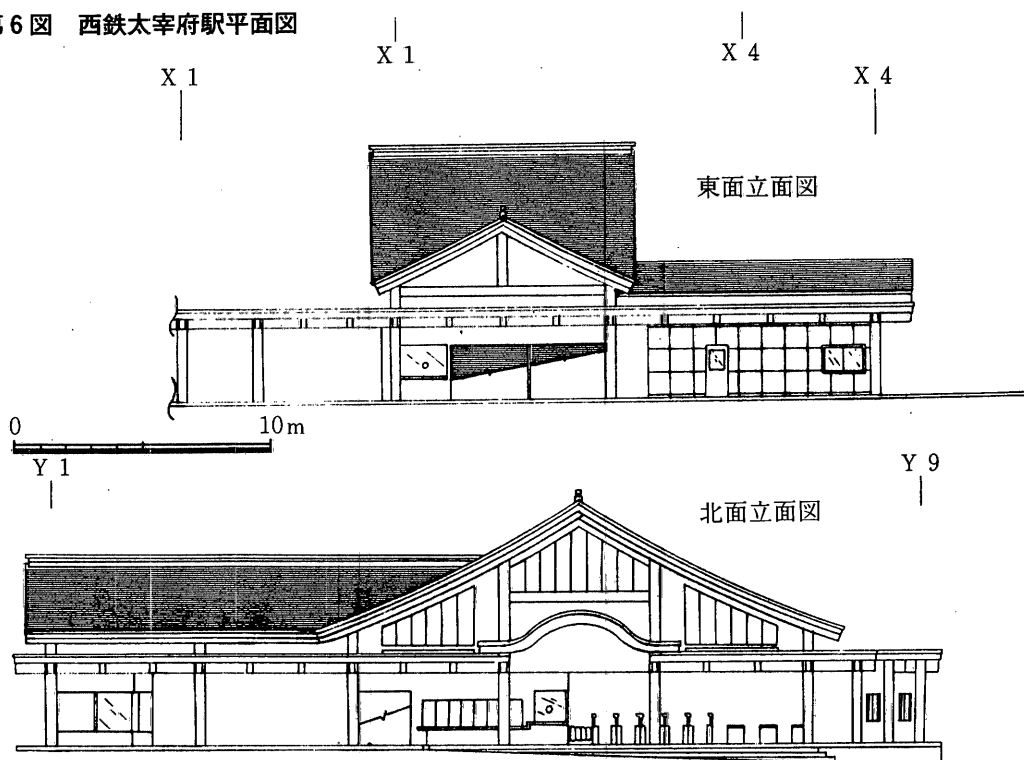
「西日本鉄道七十年史」S53=1978年 西日本鉄道株式会社

「西日本鉄道」1989年9月（「鉄道ピクトリアル」No517）鉄道図書刊行会

「西日本鉄道」1985年（「私鉄の車輛」9）保育社



第6図 西鉄太宰府駅平面図



第7図 西鉄太宰府駅南・北側立面図

2. 調査環境

調査経過

太宰府市大字太宰府字大町2281-1（現宰府二丁目5-1）における埋蔵文化財に係わる事前協議は1989年10月13日に西日本鉄道株式会社不動産事業局ビル事業部建築課より太宰府市教育委員会社会教育課文化財係（当時）に西鉄大牟田線太宰府支線太宰府駅の駅舎の改築に伴う埋蔵文化財の取り扱いについて照会があり、それを受けて太宰府市が同年11月と翌年の5月に試掘調査をおこなった。この結果同敷地内での遺構の存在と調査の必要性を認め、これに基づき両者間で委託契約を結び、1991年6月5日から6月22日の期間で本調査をおこなった。

調査体制

調査組織は以下のとおりである。

太宰府市教育委員会

総括	教育長 長野治巳	発掘調査	渡辺ひとみ 山下澤子 吉田正子 渡辺律子
庶務	教育部長 西山義則		花園美千子 関陽子 藤原重登 斉藤政利
	社会教育課長 関岡勉（当時）		桧垣みどり 古賀理恵子
	文化課長 佐藤恭宏	整理作業	原野正子 吉田勝子 久保喜代香 田中典子
	文化財係長 鬼木富士雄（当時）		横山美津子 森田レイ子（整理、報告担当）
	埋蔵文化財係長 富田譲		境一美 井上信正
主事	岡部大治	科学保存処理	山中幸子
	白水伸司（当時）	写真撮影	空中写真企画（代表壇陸夫）フォトハウスおか
	川谷豊		（代表 岡紀久夫）、狭川、山村
調査	技師 山本信夫（事前協議、試掘担当）	狭川真一	
	城戸康利（事前協議、試掘担当）	中島恒次郎	
	山村信榮（調査、報告担当）	緒方俊輔	
	田中克子（整理、報告担当）	塩地潤一	

なお、調査から整理、報告に至るまで様々な方にご教示ご指導いただいた。記して謝意を表したい。

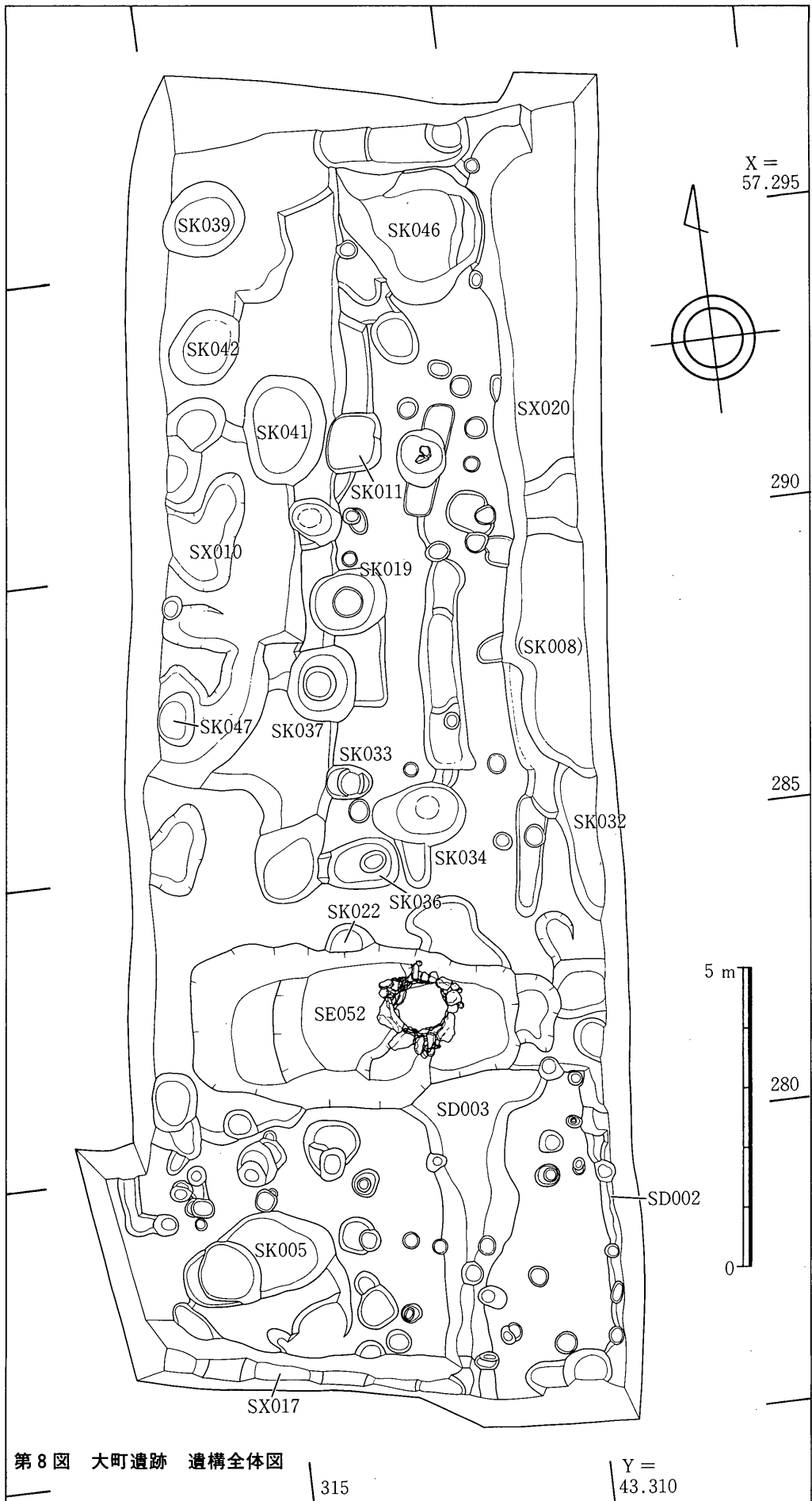
権藤正信（西日本鉄道株式会社電車局営業部営業運転課駅開発係）、城戸弘（同社不動産事業局ビル事業部）、小西信二（太宰府天満宮文化研究所）、岡本光山（陶芸家；野間焼）、高橋実（福岡市西花畑公民館）、近藤典二（古文書）、池畑祐樹（福岡県地方史研究所）、太宰府天満宮文化研究所、福岡市民図書館、太宰府市市史編纂室、（順不同。敬称略す。）

調査方法

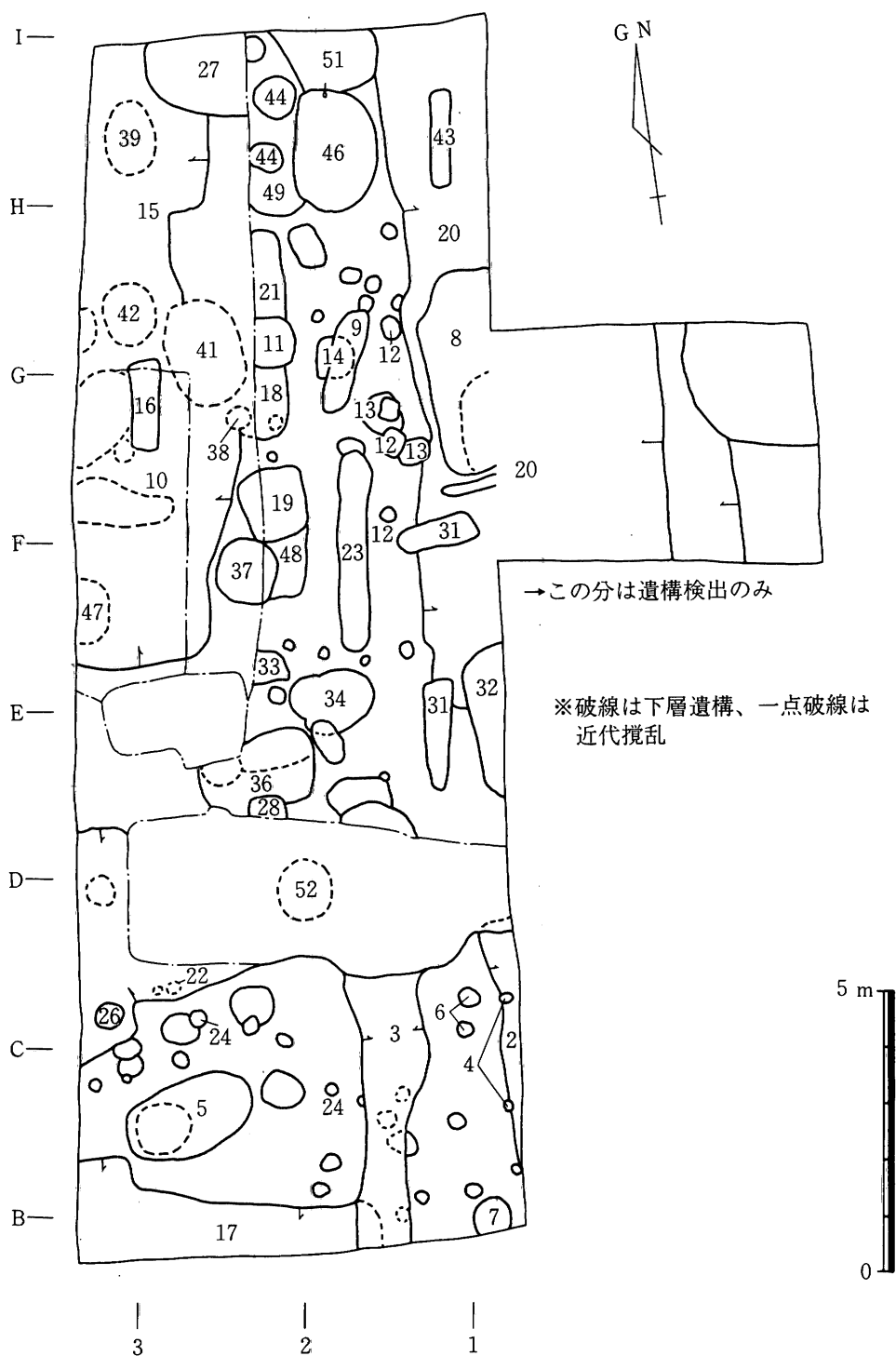
大町遺跡の発掘調査は太宰府市教育委員会が通常おこなっている調査のプロセスに乗っ取り進行させた。その概略は、表土から第3層までを重機（パワーショベル）を用いて除去し第4層上面から人力で清掃、遺構検出、掘り下げを繰り返す。遺構の記録は3メートルメッシュで設定した任意方向のグリットを用い、遺構検出時に切り合い関係を主眼とする略図を1/100スケールで作成し（第10図）、さらに掘り下げ後に検出される遺構を破線で記入ゆく。各遺構の掘り下げは視覚認識できる層位本位でおこなわれ、遺物もそれに基づいて取り上げて行く。土層は略図で記録され必要に応じて断面実測図を作成している。個別遺構も必要分が1/20スケールで実測され、全体図はすべての遺構が掘上がった時点で写真測量をおこない機械図化している。図化に当たっては国土座表系に基づく座標を与えている。なお、遺構番号は現場では遺構の性格に関係なく「S-1」のように通しのS番号を付与し、整理の時点で性格を限定できる遺構について「1SD001」に変換している。この際、遺構の統廃合がないかぎり数字の変更はおこなわない。変換後の冒頭に付く数字は調査次数である。

整理方法

遺物整理について概略を記す。現場から持ち帰った遺物は洗浄、注記し、選別をおこなう。選別に際し「出土遺物一覧表」にすべての遺物について種別、型式、点数などが記入され、必要と思われる遺物がここで抽出され、保存処理、実測、計測、復元、写真撮影をおこなう。実測された遺物には「R-001」などのR番号が、計測のみの遺物にはaやcといったあらかじめ設定した遺物の型式名を付けた3ケタの通し番号が付与される。



第 8 図 大町遺跡 遺構全体図



第9図 大町遺跡 遺構検出時略図

3. 遺跡の調査

層序

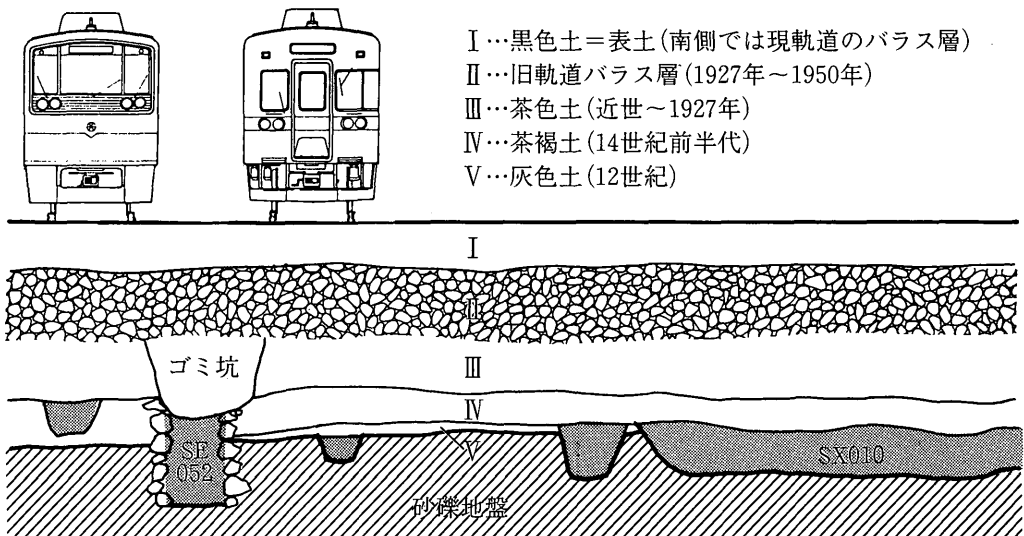
大町遺跡の現在使用している生活面下の土層は第8図に示す通りである。

第1層は現在の地表層で黒色化している。第2層は片岩系の角礫を用いた礫層で昭和25年まであった旧プラットフォームの軌道下に敷かれていたバラス層であろう。第3層は茶色土層である。この層の上面からレンガなどの建物廃材を入れた大きな廃棄土坑が多く切り込み、これら廃棄土坑が昭和2年に整備された駅舎建築に先だっておこなわれた整地に伴うものだとすれば、伴出する遺物からこの層は近世から近代にかけて形成されたものと考えられる。井戸 SE052はこの層位に伴うものと思われる。第4層は茶褐色を呈し14世紀前半代に形成されたもので多くの遺構を伴っている。第5層としている灰色土層は部分的にしか存在しない。おそらく12世紀代の形成層であろう。この層で地表下約180センチである。

これら文化層の基盤をなすのは第3紀に形成されたとされる長石、石英粒からなる礫と粗砂の層で、そのさらに2メートルほど下に花崗岩の風化岩盤がある。(第2図参照)

遺構と遺物

大町遺跡で検出した遺構は土坑 (SK)、井戸 (SE)、溝 (SD) とその他性格不明の遺構 (SX) である。以下この順に説明する。



第10図 大町遺跡土層概念図

(1) 土坑

検出プランが円、楕円形を呈するもので壁が急勾配で立ち上がり、人的な掘削によって形成されたと判断しうるもの。俗に言うピットとの区分はしていない。

遺構

1 SK005 (第11図、Pla 3 - 1)

調査区の南側にある遺構で上面が楕円形を呈し、下位は礫がつまった円筒形の坑へと移行している。覆土は灰色土、黒灰土の順で堆積している。

1 SK011 (第11図、Pla 4 - 1・2)

中世の堆積層を持つ S-18 を切る隅丸方形を呈す遺構で、灰茶色を呈す埋土などから近世のものと思われる。七輪の破片が出土している。

1 SK019 (第11図、Pla 3 - 2)

円筒状の2段の掘方を持つ。遺物はほとんどなく、灰色系の埋土を持つ。5層に伴うものか。

1 SK022 (第11図、Pla 3 - 1)

削平によってごくわずかに残った直径30センチほどの坑で、黒色系の埋土を持つ。土器は床面から浮いて傾いた状態で出土している。ほかに供伴する遺物は1点も無い。

1 SK033 (第11図、Pla 3 - 2)

2段掘りの坑で灰色系の埋土を持つ。第5層に伴うものか。

1 SK034 (第11図、Pla 3 - 2)

床面の中央が窪み直径が1メートルを越える大きめの坑。埋土は暗灰土、黄灰土の順で堆積。

1 SK036 (第12図、Pla 3 - 2)

浅い2段掘りを呈す。暗灰土が堆積する。

1 SK037 (第11図、Pla 3 - 2)

直径が1メートルほどで円筒形を呈す坑。埋土は黒灰色、淡灰色の順。1 SK019 に隣接する。

1 SK038 (第12図、Pla 3 - 2)

中央が窪み円筒形を呈す坑。

1 SK039 (第12図、Pla 4 - 1・2)

1 SK010 除去後に検出された楕円形を呈す坑。黒色土で埋没する。

1 SK041 (第12図、Pla 4 - 1・2)

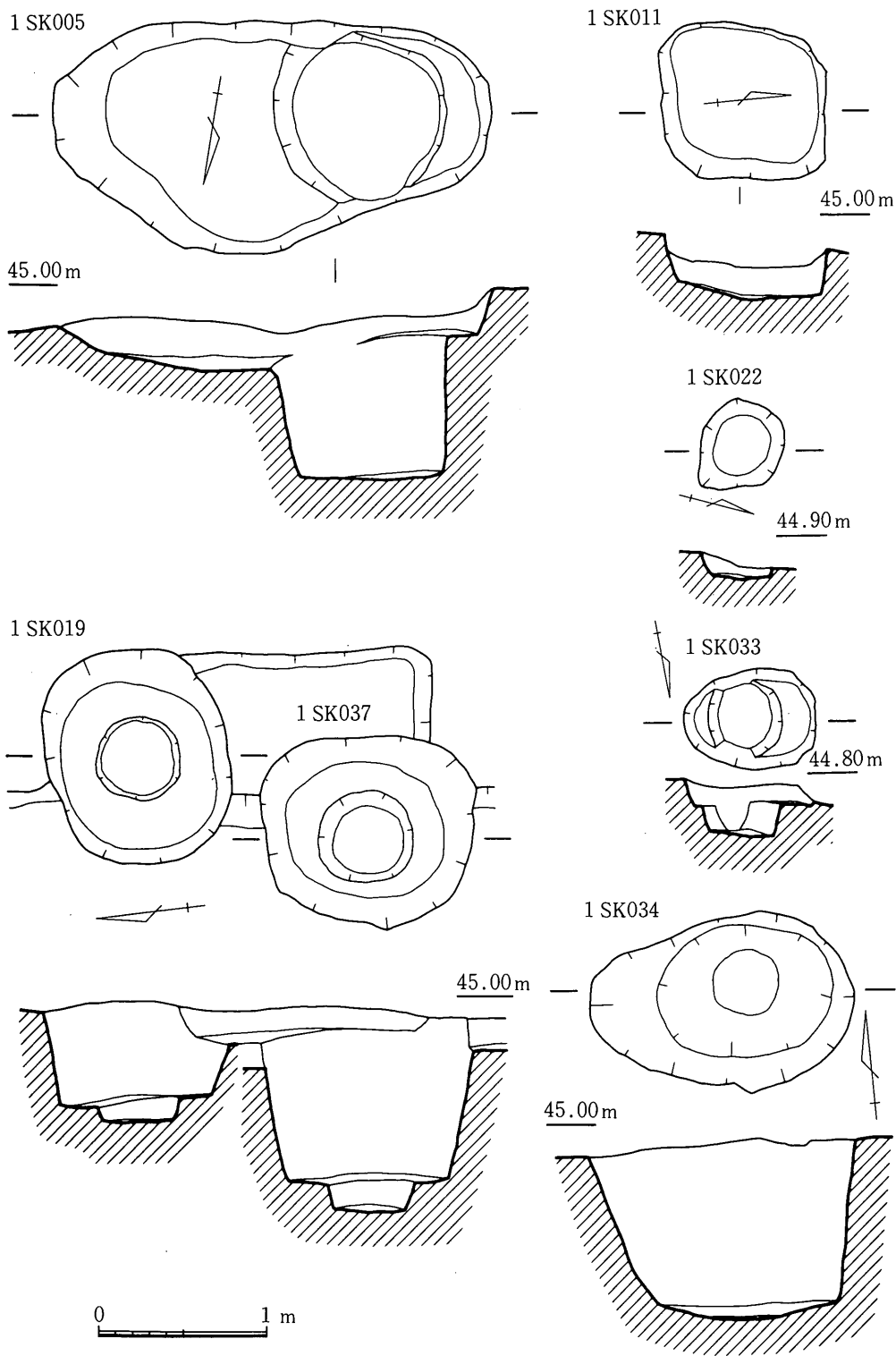
これも1 SK010 除去後に検出された楕円形を呈す坑。黒灰色土で埋没する。礫が多く入る。

1 SK042 (第12図、Pla 4 - 1・2)

これも1 SK010 除去後に検出された楕円形を呈す坑。黒灰色土で埋没する。

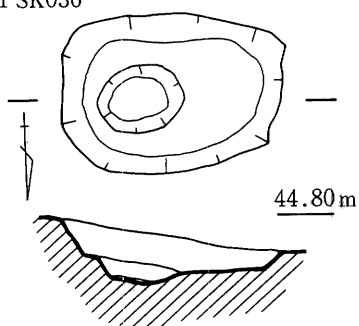
1 SK046 (第12図、Pla 4 - 1・2)

長辺が2メートルある楕円形を呈す坑。茶灰土で埋まり、近世の遺物を出す。

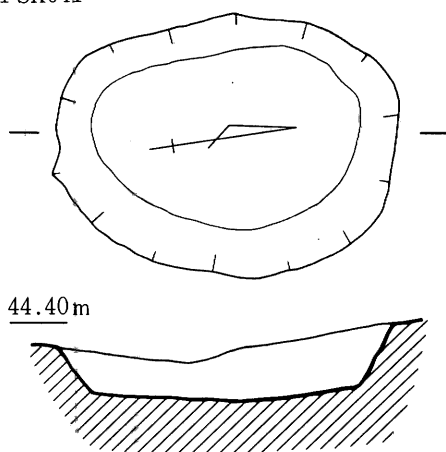


第11図 大町遺跡土坑実測図 1 (1/60)

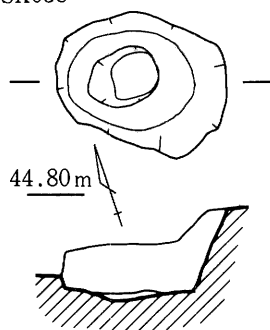
1 SK036



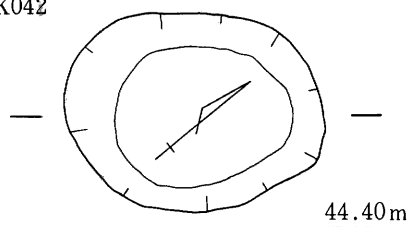
1 SK041



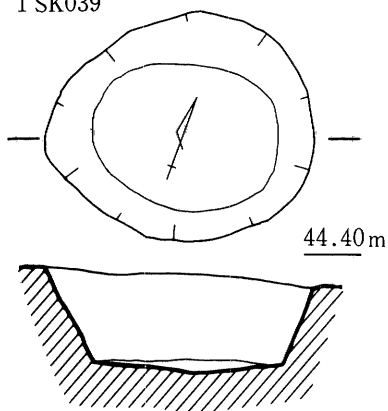
1 SK038



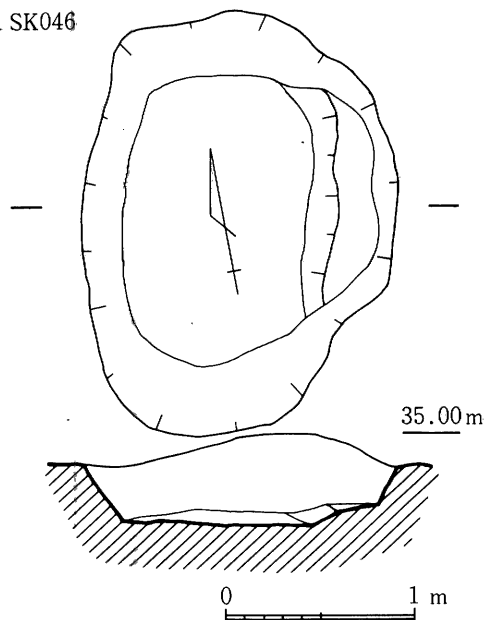
1 SK042



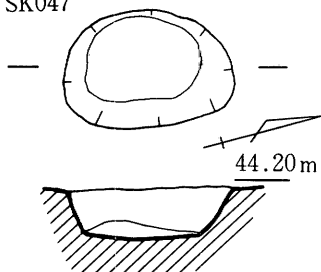
1 SK039



1 SK046

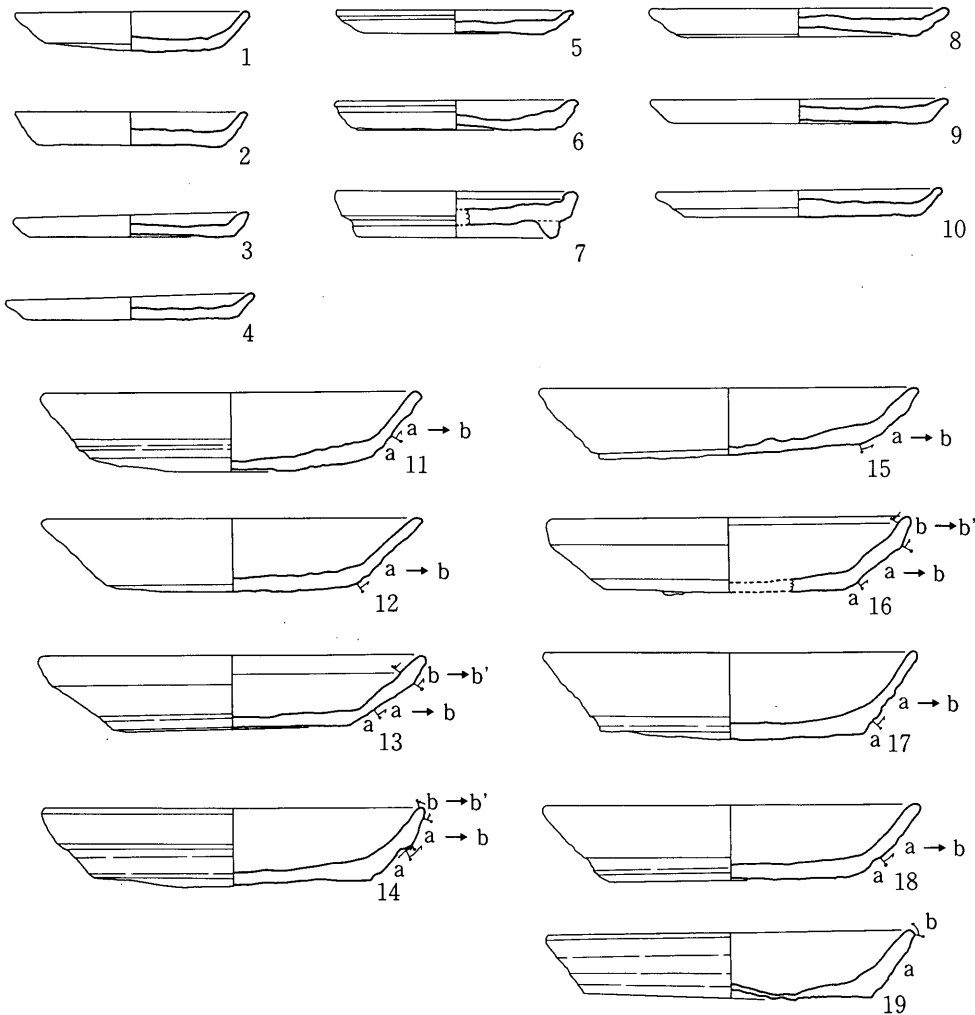


1 SK047

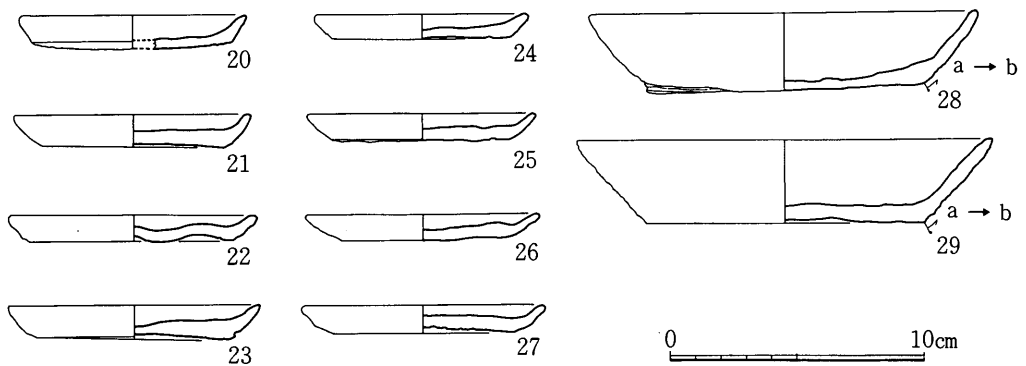


第12図 大町遺跡土坑実測図 2 (1/60)

1 SK005



1 SK019



第13図 大町遺跡土坑出土土器実測図 1 (1/3)

1 SK047 (第12図、Pla 3 - 2)

これも 1 SK010除去後に検出された楕円形を呈す坑。黒灰色土で埋没する。

遺物

1 SK005出土遺物 (第13図、Pla 5 - 1 ~ 6)

土師器

小皿 a (1 ~ 6・8 ~ 10) 1 はヘラ切り。口径9.3cm、器高1.5cm。2 ~ 6・8 ~ 10は糸切り。小型品と大型品の二種類があり、前者は口径8.4 ~ 10.4cm、器高0.6 ~ 1.6cm。後者は口径11.3 ~ 11.8cm、器高1.0 ~ 1.1cm。5 と 6 は外面口縁下に、先の細いヘラ状工具による沈線が 1 条めぐる。X IV ~ X V 期か。

小皿 c (7) 糸切り。口径9.5cm、器高1.8cm。小皿 a に高台が付いた形態である。

坏 a (11 ~ 19) 11・12はヘラ切り。口径15.0cm、器高2.9 ~ 3.1cm。13 ~ 19は糸切り。口径14.0 ~ 16.6cm、器高2.1 ~ 3.4cm。体部はほぼまっすぐに外上方に開く。体部外面にナデ a を施すものが多い。また、口縁部のみ再調整するものもある。X IV ~ X V 期か。

1 SK019出土遺物 (第13図)

土師器

小皿 a (20 ~ 27) 図示したものは糸切り。他にヘラ切りの小片が 2 点ある。口径8.4 ~ 10.2cm、器高0.8 ~ 1.3cm。X IV ~ X V 期か。

坏 a (28・29) 糸切り。口径15.4 ~ 16.8cm、器高2.5 ~ 3.2cm。体部外面は、ナデ a を施した後、再度底部との境からナデ b を加える。また、28には体部外面下位に、ロクロの回転方向と一致して、ラセン状にねじれたような跡が認められる (44頁 - 4)。X IV ~ X V 期か。

1 SK022出土遺物 (第14図、Pla 5 - 7)

黒色土器

碗 C 2 (30) B 類。口径15.6cm、器高5.4cm、底径6.75cm。体部は緩やかに内湾しながら開き、口縁部付近でわずかに外反する。底部には断面逆台形の短い高台が付く。内外面ともややていねいなミガキ c が施され、内面においては、こきざみに往復するミガキが施される。外底面にはミガキはない。また、見込み部分はジグザグにミガキを施し、交し状の暗文を形成する。口縁内面には、ミガキ後沈線を 1 条施す。内外面とも十分に黒化处理がなされる。形態的には畿内楠葉窯で焼かれた製品を踏襲しているが、内外面におけるミガキに省略化の傾向が顕著に認められ、広義の楠葉系黒色土器 B 類にあたる。

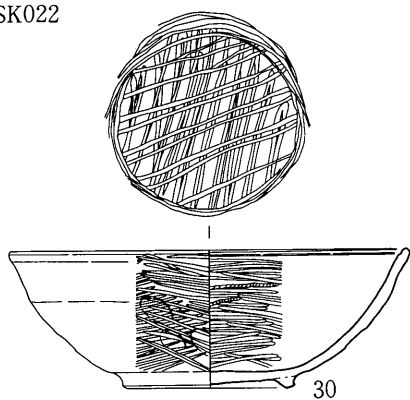
1 SK034暗灰色土層出土遺物 (第14図)

土師器

坏 a (31) 糸切り。口径13.2cm、器高2.7cm。

1 SK034出土遺物 (第14・15図、Pla 5 - 8)

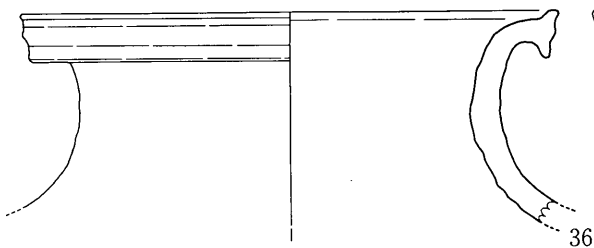
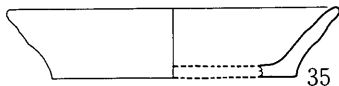
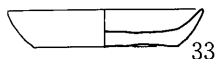
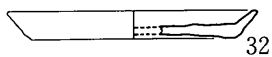
1 SK022



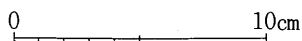
1 SK034暗灰色土層



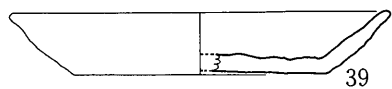
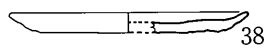
1 SK034



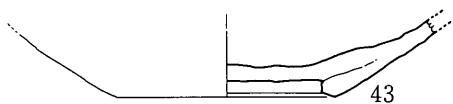
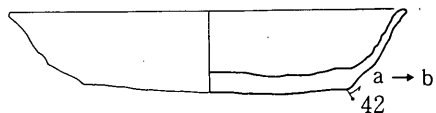
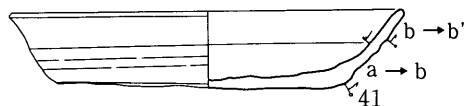
1 SK038



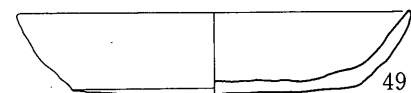
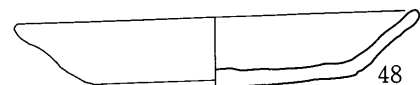
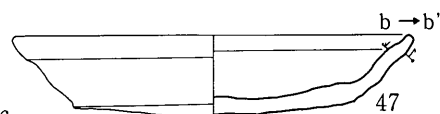
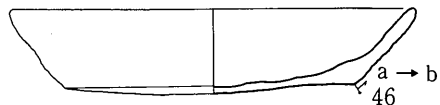
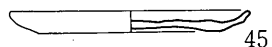
1 SK037



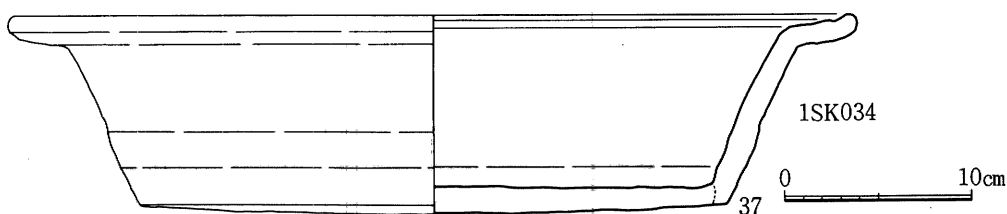
1 SK037淡灰色土層



1 SK037黒灰色土層



第14図 大町遺跡土坑出土土器実測図 2 (1/3)



第15図 大町遺跡土坑出土土器実測図 3 (1/4)

土師器

小皿 a (32) 糸切り。口径7.4~9.9cm、器高0.8~1.1cm。

小皿 b (33) 糸切り。口径7.7cm、器高1.4cm。口径に対し器高がやや低いと思われるが、一応小皿 b とした。

小坏 a (34) 糸切り。口径9.0cm、器高1.7cm。

坏 a (35) 糸切り。口径13.1cm、器高2.7cm。

鉢 (37) 口径45.5cm、器高10.5cm、底径31.4cm。口縁はL字形を呈し、端部がわずかに上方に屈折する。胎土中には粗砂を多量含む。内面には火を受けた痕跡は認められない。

陶器

甕 (36) 口径21.2cm。胎土は白色の粗砂を含み、器面は茶褐色を呈する。口縁内面には自然釉がかかる。常滑産。口縁端部の形状より、常滑編年の第Ⅲ期に相当するものである。

1 SK037出土遺物 (第14図)

土師器

小皿 a (38) 糸切り。口径9.4cm、器高0.8cm。

坏 a (39) 糸切り。口径15.0cm、器高2.5cm。

1 SK037淡灰色土層出土遺物 (第14図)

土師器

小皿 a (40) 糸切り。口径8.0cm、器高1.0cm。

坏 a (41・42) 糸切り。口径15.5~16.4cm、器高3.1~3.3cm。いずれも体部外面下位にナデ a が認められる。

陶器

鉢 (43) VI-1 類。底径8.4cm。胎土は灰白色で黒斑を含む。底部は碁笥底。釉調は淡灰緑色で、全面に施釉される。

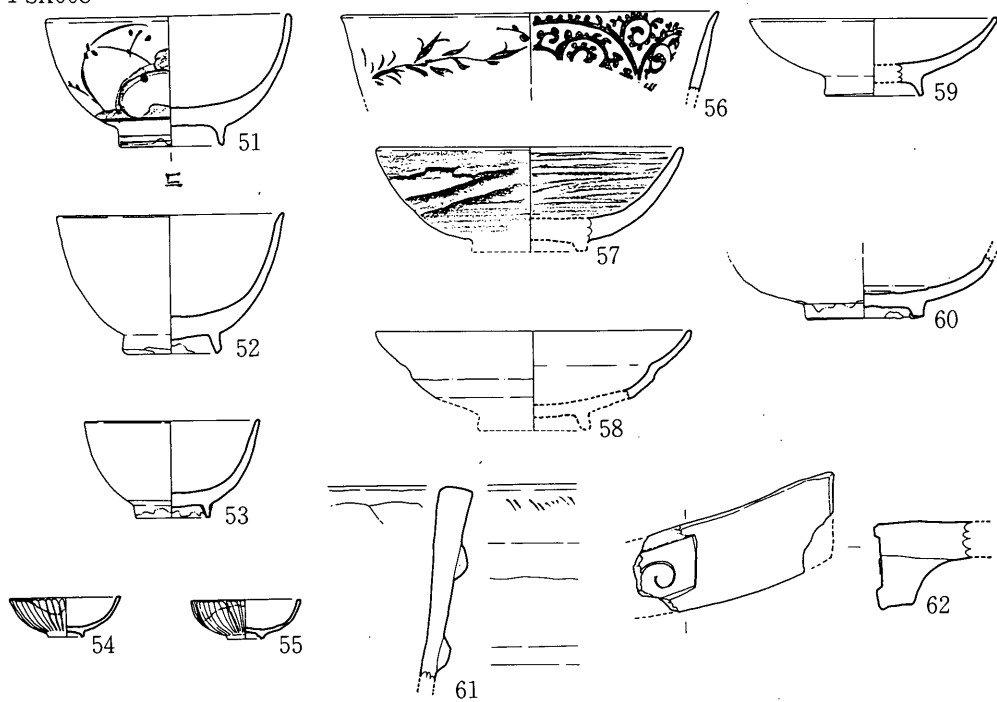
1 SK037黒灰色土層出土遺物 (第14図)

土師器

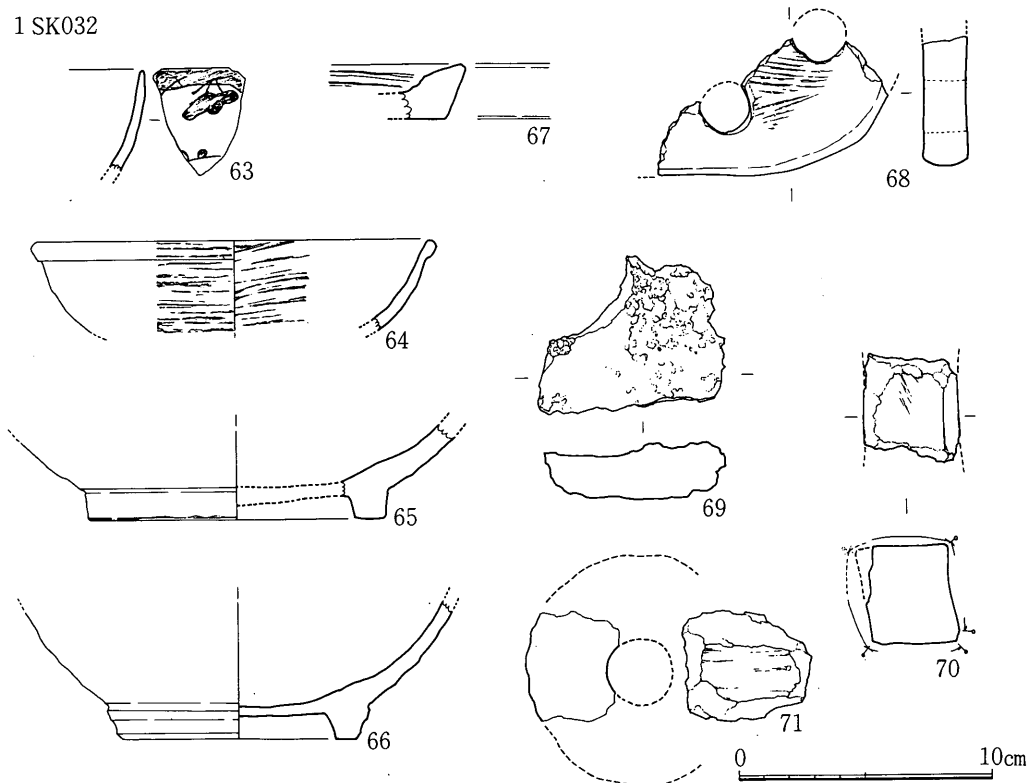
小皿 a (44・45) 糸切り。口径9.4~9.6cm、器高0.9~1.0cm。

坏 a (46~49) 糸切り。口径15.5~16.6cm、器高2.7~3.3cm。46には幅の0.3cmの細かな

1 SK008



1 SK032



第16図 大町遺跡土坑出土土器実測図 4 (1/3)

ナデ a が、体部外面上位まで施される。XIV～XV期か。

1 SK038出土遺物（第14図）

土師器

坏 a（50）糸切り。口径15.8cm、器高2.9cm。体部外面下半にナデ a と思われる痕跡が認められる。

1 SK008出土遺物（第16図、Pla 6－1・2）

肥前系磁器

碗（51・52・53）

51・52・53は丸碗である。51は胴部下半と高台に圈線が胴部には草様の文様が呉須で描かれ染め付けである。口径9.8cm、器高5.1cm、底径4.2cm。52は無文で口径に対し底径が小さい。口径9.0cm、器高5.4cm、底径3.9cm。53は全体の法量が小さいちよこ様のもので胴部下半に染め付けの圈線を持つ。口径6.8cm、器高3.8cm、底径3.1cm。

鉢（56）

56は口径が15cmほどで、外面に草様文、内面は蛸唐草文様を持つ。

紅皿（54・55）

54、55は合わせ型作りの紅皿である。外面は肉彫りで花卉状を表現している。全体にゆがみがある。法量は両者ともに口径4.4cm、器高1.6cm、底径1.5cm。

硬質陶器（57・58・59・60）

碗（57）

口径が12.2cmのやや浅い碗。白土を用いたヨコ方向の刷毛目で装飾する。

坏（58・59）

58は胴部で一度くびれる唐津の系譜を引くもので、口径12.4cmを測る。59は全体の法量が小さく、浅い作りで蓋であった可能性もある。口径9.8cm、器高3.0cm、底径4.0cm。60は底径4.7cmで砂目を残し、内底は釉を輪状にカキ取る。

瓦質土器（61）

深鉢型の火桶と思われ、2条の貼り付け突帯を持つ。イブシは全体にかかる。

瓦

軒平瓦（62）

瓦頭面部分の破片で瓦当面幅約3cm、本体の幅2cm。全体にイブシがかかる。

1 SK032出土遺物（第16図、Pla 6－3・4）

肥前系磁器

碗（63）

染め付け丸碗の口縁部片。

硬質陶器

鉢 (65・66)

ボウル状の深めの鉢で茶褐色の鉄釉を施す。両者とも高台はケズリだしによる。

素焼土器 (67・68)

67は内面をクシ状の工具で粗いナデを施すもので、盤もしくは蓋になるもの。68はカーブを持つ板状のもので円孔を穿つ。七輪の棧か。生産関連遺物 (69・70・71)

69は金属質の鉾滓である。70は天草産と思われる赤いラミナの入る砂岩製の棒状の砥石。71は外径9 cmほどのフィゴの羽口。あまり焼けていない。

(2) 井戸

遺構

1 SE052 (第17図、Pla 3-1)

旧軌道 (1950年まで) 直下のカクラン (建物廃棄物処理坑) を除去した時点で検出した遺構で、第3層に伴うものであろう。中小の花崗岩を組み合わせた石井で、基本的に左下から右上の斜方向に石を組んでいる。旧宰府村にはこのような石井が最近まで数多く残されていたが、近年の再開発等で次々と姿を消している。

遺物

1 SE052出土遺物 (第18図)

多量の瓦、レンガ等の瓦礫とともに多くの生活関連遺物が出土している。

陶磁器

碗 (72~77・79・80)、鉢 (78)

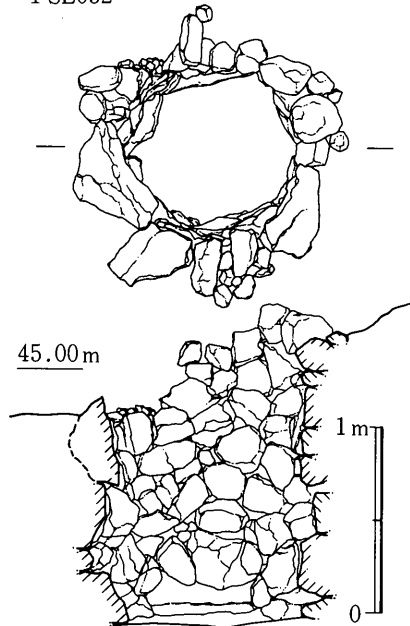
大半がプリントもので碗には飯茶碗と湯飲み茶碗がある。77は胴部外面に日本旧海軍の「サクラにイカリ」のロゴが入るもので、口縁は玉縁を呈し底は碁笥底状になる。表土層から出土したものを含めると4個体以上の同一規格のものが出土している。78は一般的な鉢であるがこのほかに変形平鉢や向付など多数出土している。

酒瓶 (81・82)

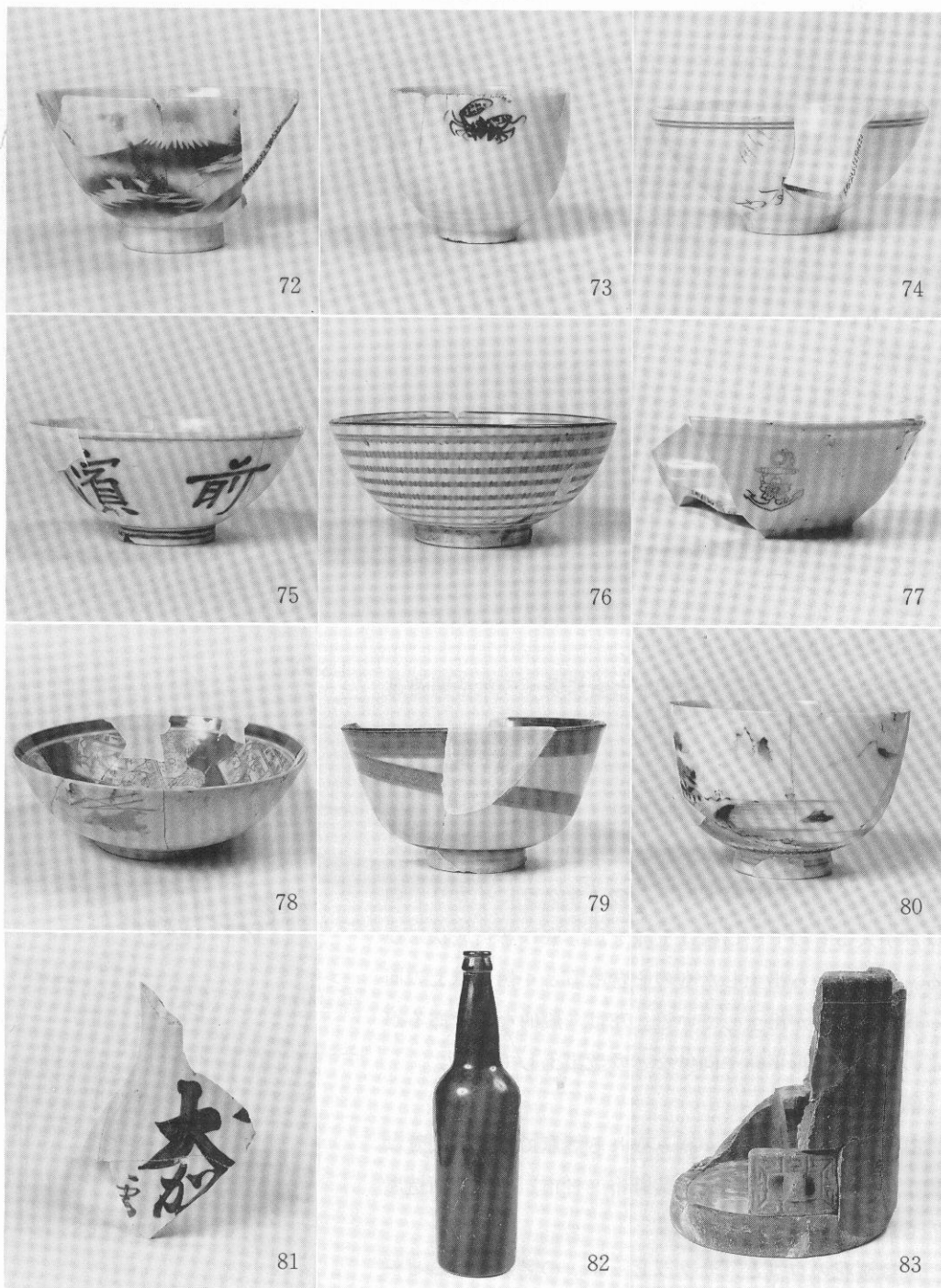
81は「大賀」の文字が読み取れる酒瓶である。大賀は隣宿場町内の二日市 (現筑紫野市二日市) にある酒造屋のものか。

82は桜花のロゴと「サクラビール」の名が見えるビール瓶で、形成に型を用いている。日本では明治維新以来、

1 SE052



第17図 大町遺跡井戸実測図 (1/40)



第18図 大町遺跡SE052(井戸)出土遺物写真

輸入商品とともに中小のイギリス系とドイツ系の2系統の国産メーカーのビールを消費してきたが、帝国覇権主義の台頭で大正時代から物資統制が進む中、ビールメーカーも大正3年に大枠で大日本麦酒、麒麟麦酒、加富登麦酒、帝国麦酒の4社に吸収統合された。さらに昭和18年には企業整備令の適用を受け大日本麦酒と麒麟麦酒の2社になっている。出土したサクラビールがどの時期のものであるのか興味があるが、遺構の土層関係より昭和2（1927）年以前のものであるといえる。ちなみに博多東中州を写した大正末期と昭和7年の写真にはサクラビールの広告塔が見えている（「ふるさとの思い出写真集 昭和大正明治 博多」1979年 国書刊行会 P119・136）。

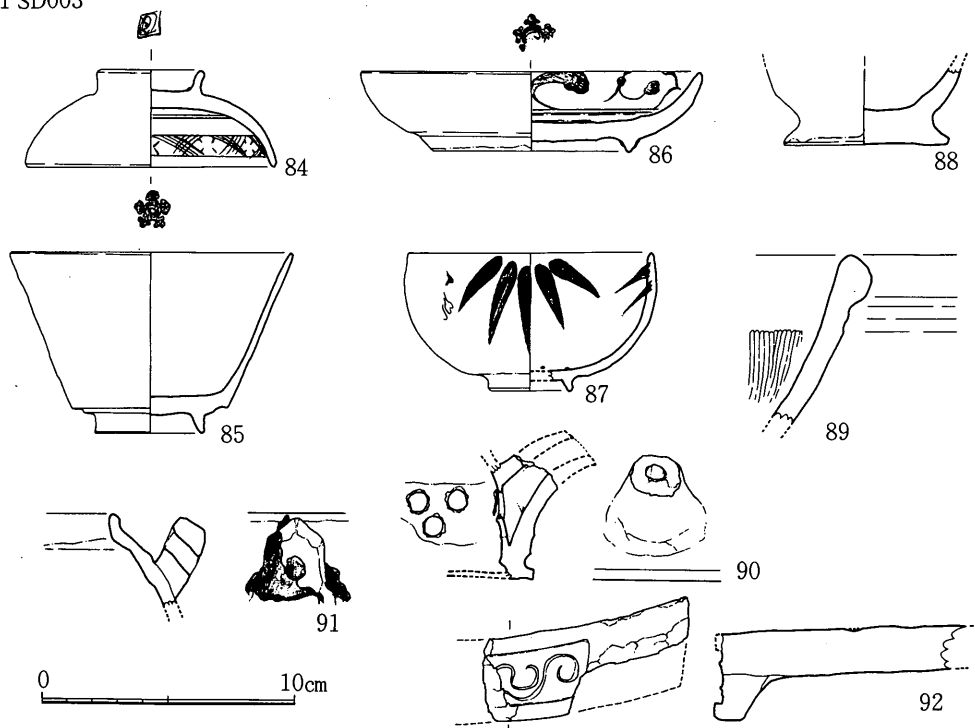
（3）溝

遺構

1 SD003 (Pla 3 - 1)

1 SD003は調査区を南北に走る溝状遺構でS-23や9も埋土の色などからこれに関連するものと見られる。重機で除去した第3層（茶色土層）にはこの溝の位置に石垣の跡と思われる石列が見られ、近世後半から近代にかけてこのラインが土地境であったと考えられる。埋土は茶色土である。

1 SD003



第19図 大町遺跡溝出土土器実測図(1/3)

遺物

1 SD003出土遺物（第19図、Pla 7 - 1・2・3・4）

磁器（84・85・86）

84は碗蓋で口径10.0cm、器高3.8cm、つまみ径4.2cmを測る。内底にコンニャク印を押す。85は体部が直線的に開く碗で、口径11.2cm、器高7.1cm、底径4.4cmを測る。畳み付けは釉ハギをおこなう。86は口径13.4cm、器高3.1cm、底径7.8cmを測る小皿である。内底は輪状に釉ハギをしコンニャク印を押す。

硬質陶器（87）

87は小さな高台に張りのある胴部を持つ湯飲茶碗で内底にハリの目跡が残る。彩色は緑で竹葉を赤、白で他の文様を描く。

軟質陶器（88・89・90・91）

88は胎土が素焼質で暗茶褐色の釉がかかる壺型のもので底径6.5cmを測る。89は口縁が玉縁で内面のスリ目が隙間なく施される擂鉢。胎土は赤褐色で茶褐色の鉄釉をかける。90は平底の油差しで素焼きの胎土に茶褐色の釉をかける。91は土瓶の口縁と把手の取付け部分で一部アメ釉を重ねがけする。

瓦（92）

92は軒平瓦である。規格は1 SK008のもの（第15図62）に同じ。瓦当面下半にはイブシがかかっていない。

（4）その他の遺構

調査区の四隅にそれぞれ溜まり状の遺構が検出された。本来は溝や土坑である可能性がある。

遺構

1 SX010（第20図、Pla 4 - 1）

調査区の北西で検出された遺構で当初は土色の違いで北側をS - 10、南側をS - 15と分けて掘ったが、後に同一の遺構と判断した。暗灰色土、黒灰色土、灰色土、茶褐色土、黒灰色土（旧S - 15）の順で堆積している。

1 SX002（第20図、Pla 3 - 1）

調査区の南東で検出した。遺物はほとんど出土していない。茶色土で埋没する。

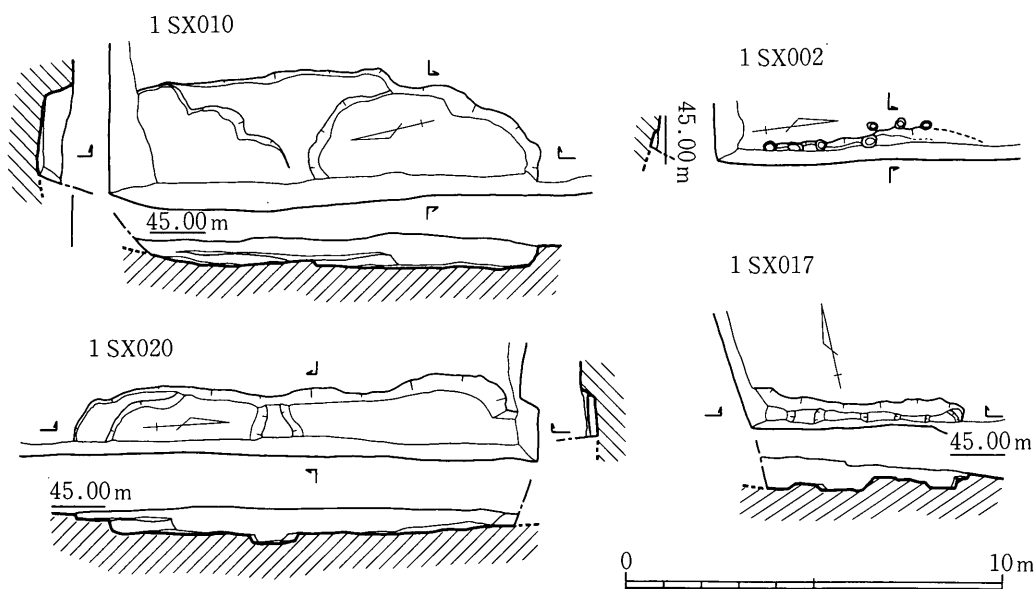
1 SX020（第20図、Pla 4 - 1）

調査区の北東で検出した遺構で灰色土、灰粘土、黄灰色土の順で堆積する。一部東側に拡張したところ、西側へりから約6 mのところでは立ち上がりを確認した。

1 SX017（第20図、Pla 3 - 1）

調査区の南西にある東西に長い遺構で、底盤のアップダウンが著しい。暗灰色土で埋没する。

遺物



第20図 大町遺跡その他の遺構実測図(1/200)

1 SX010 暗灰色土層出土遺物 (第21図)

土師器

小皿 a (93~95) 糸切り。口径7.6~8.6cm、器高1.0cm。

坏 a (96~98) 糸切り。口径12.2~13.0cm、器高2.5~2.7cm。

1 SX010 灰色土層出土遺物 (第21図)

土師器

坏 a (99) 糸切り。口径15.3cm、器高2.9cmであるが、小片のため不明確。

1 SX010 黒灰色土層出土遺物 (第21図)

土師器

小皿 a (100~102) 糸切り。口径8.4~9.6cm、器高0.8~1.5cm。101は内底に油煙が付着する。

坏 a (103) 糸切り。口径16.0cm、器高2.7cm。体部外面にナデ a を施す。

1 SX015 黒灰色土層出土遺物 (第21図)

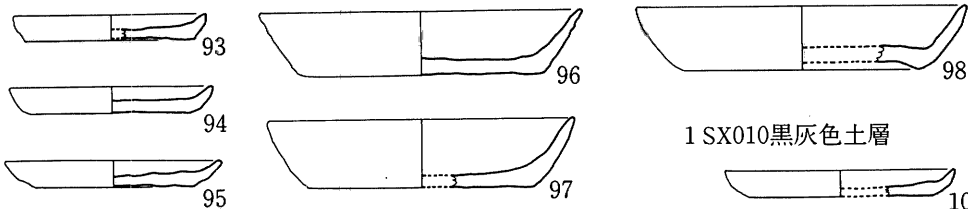
土師器

小皿 a (104~106) 糸切り。口径7.6~9.6cm、器高1.0~1.6cm。ⅩⅧ~ⅩⅨ期か。

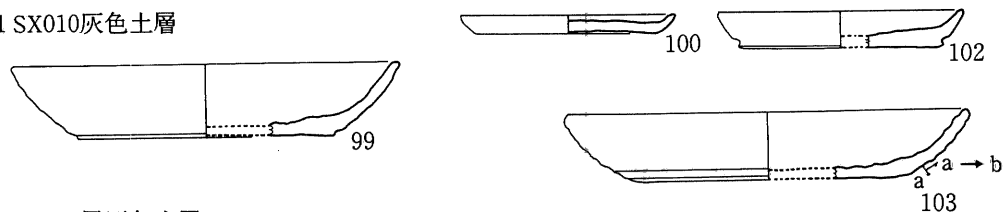
小皿 c (107・108) 底部の切り離しは不明。口径7.6~8.0cm、器高1.85cm。小皿 a に高台が付く形態である。高台は体部との境よりやや内側に付く。

坏 a (109~116) 糸切り。口径11.8~16.0cm、器高2.1~3.0cm。口径15cm以上の3点を除

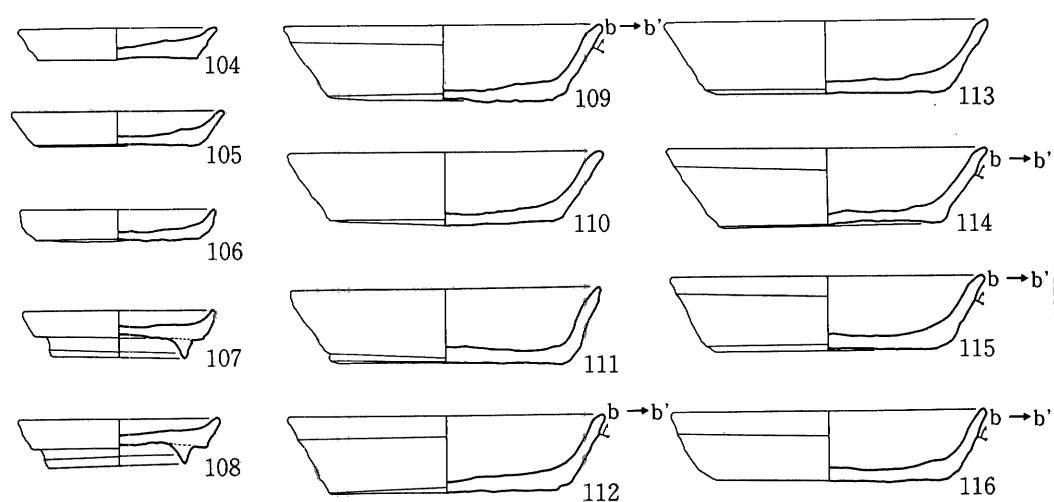
1 SX010暗灰色土層



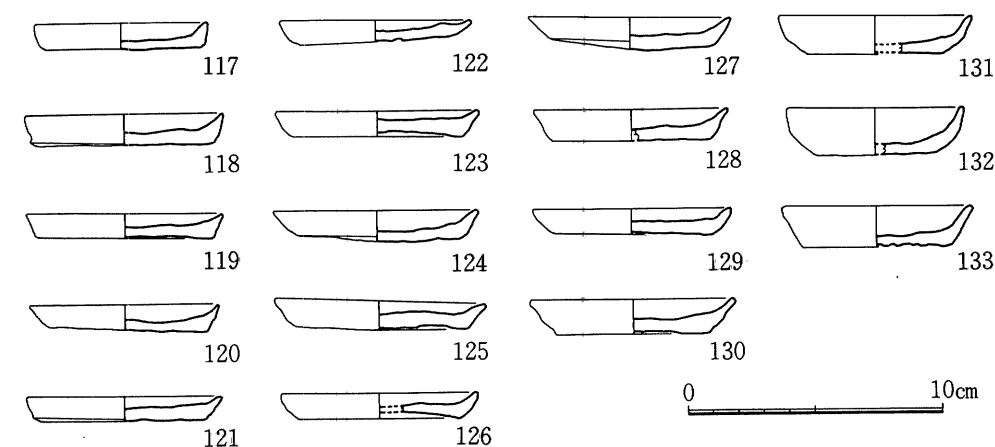
1 SX010灰色土層



1 SX015黑灰色土層

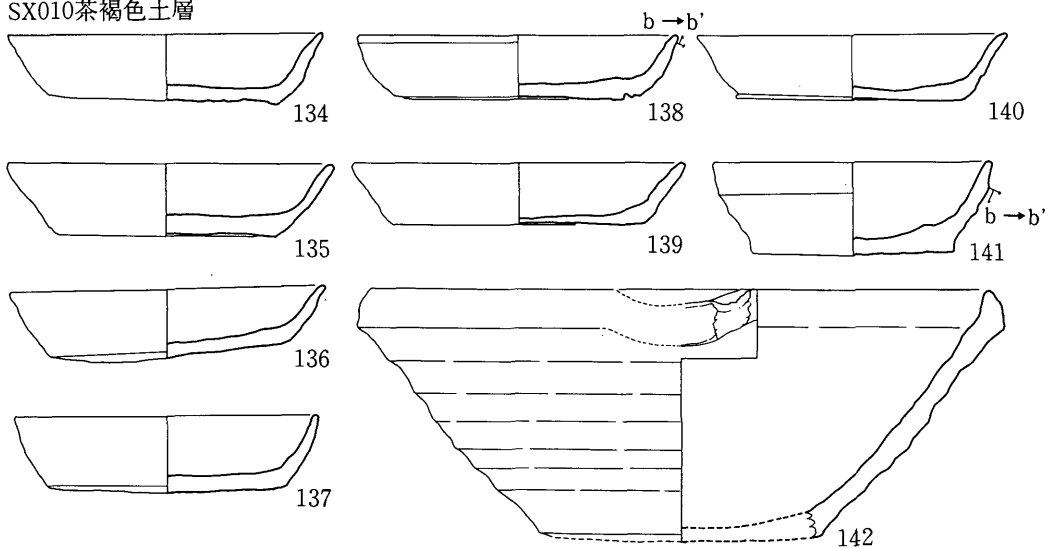


1 SX010茶褐色土層

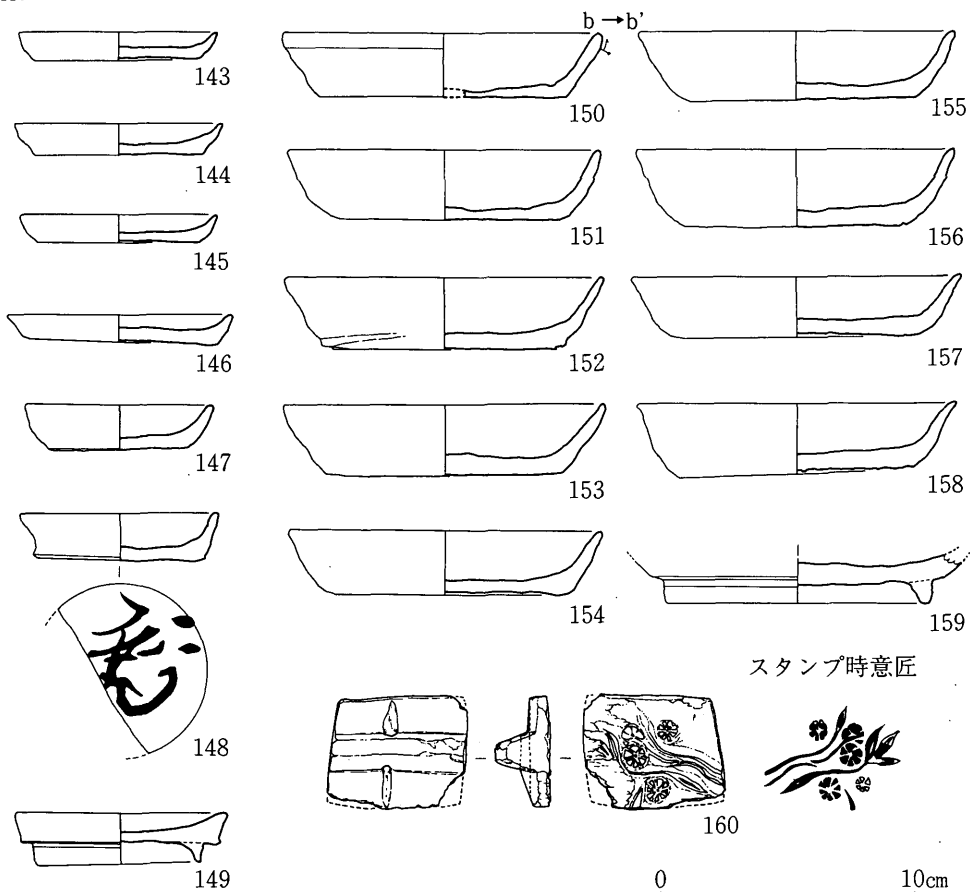


第21圖 大町遺跡SX出土土器実測図1 (1/3)

1 SX010茶褐色土層

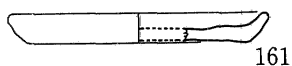


1 SX010

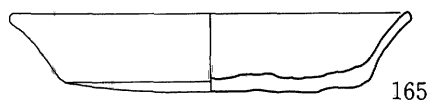


第22図 大町遺跡SX出土土器・石製品実測図 2 (1/3)

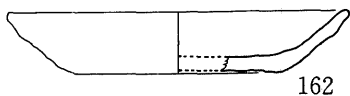
1 SX017



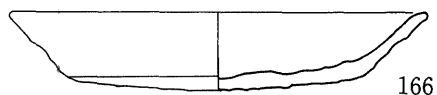
161



165

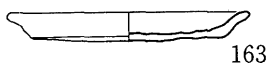


162

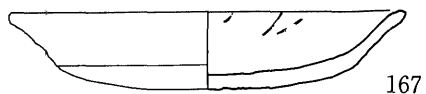


166

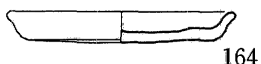
1 SX020



163



167

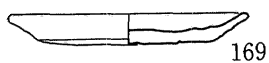


164

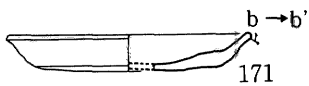


168

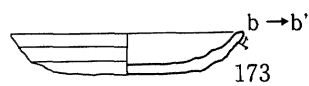
1 SX020 灰色粘質土層



169



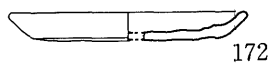
171



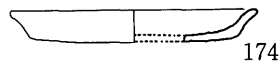
173



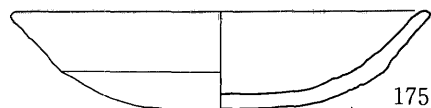
170



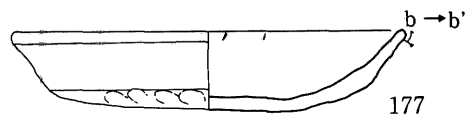
172



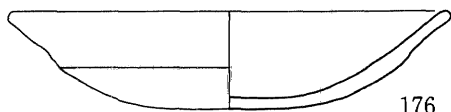
174



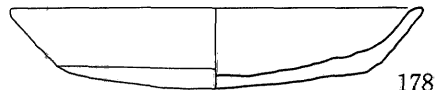
175



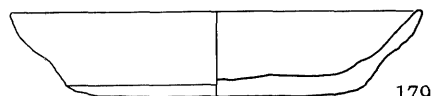
177



176



178



179

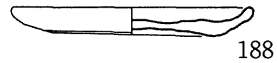
1 SX020 黄灰色土層



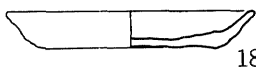
180



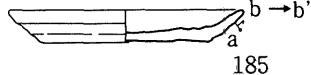
184



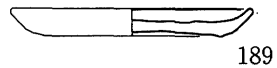
188



181



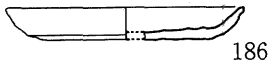
185



189



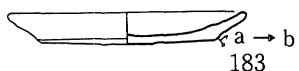
182



186



190



183

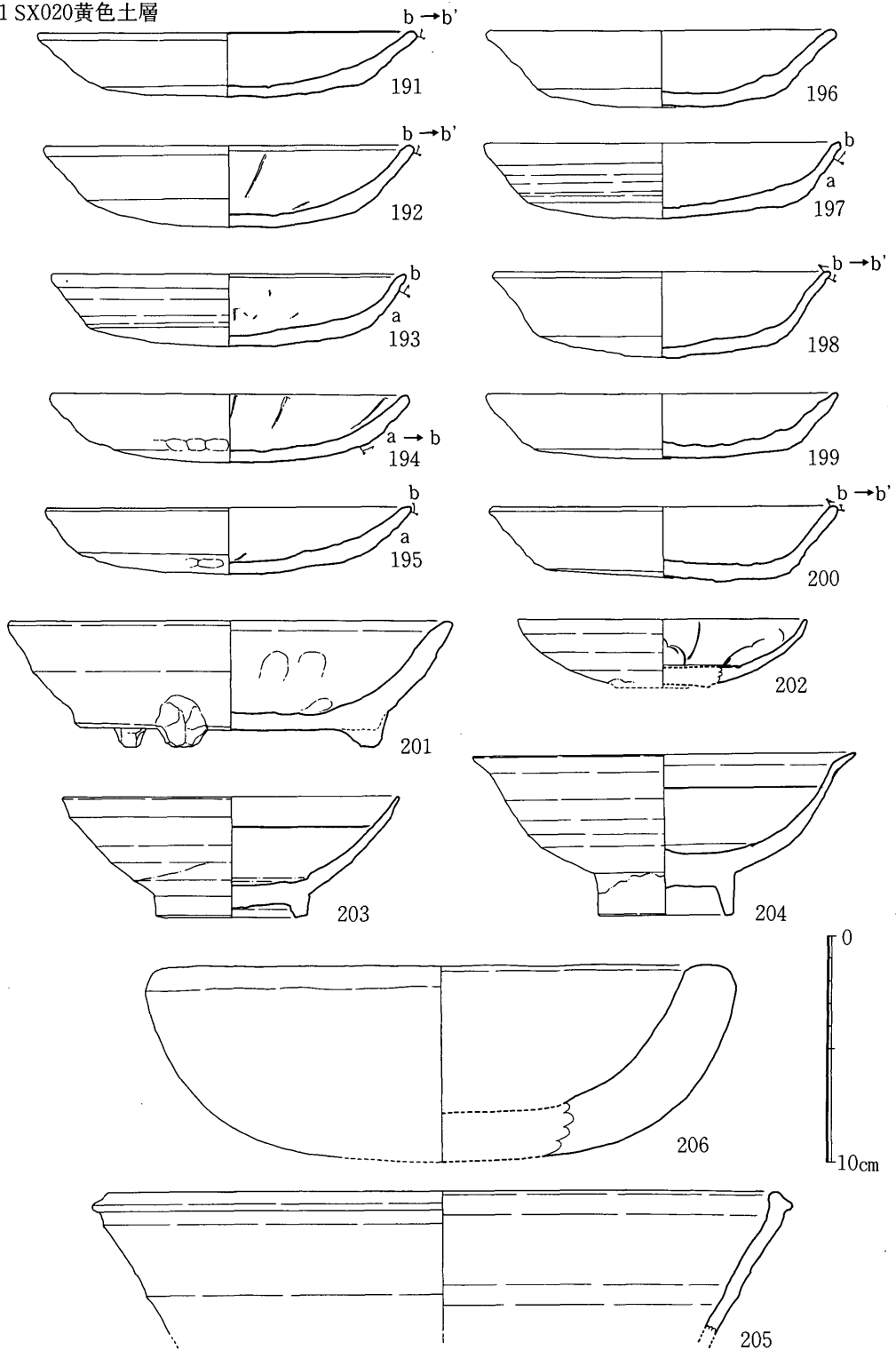


187



第23図 大町遺跡SX出土土器実測図 3 (1/3)

1 SX020黄色土層



第24図 大町遺跡SX出土土器実測図 4 (1/3)

いて、他は全て12.5cm前後に集中する。口縁部に再調整を加えるものが比較的多い。113の体部外面下位には、ネジリ様の跡が残る。115は口縁の一部に油煙が付着する。ⅩⅧ～ⅩⅨ期か。
1 SX010 茶褐色土層出土遺物（第21・22図、Pla 7 - 5 ~ 8）

土師器

小皿 a（117~130） 糸切り。口径6.8~8.6cm、器高0.9~1.35cm。体部は短く直立気味で、口縁端部はつまんだように尖る。ネジリ様の痕跡が残るものが5点ある。123は内面に油煙が付着する。ⅩⅩ期。

小皿 b（131~133） 糸切り。口径7.0~7.6cm、器高1.5~1.85cm。

坏 a（134~141） 糸切り。口径11.0~14.0cm、器高2.4~3.6cm。体部はやや直立気味で、口縁端部を丸くおさめるものと、口縁近くでやや外反し、端部が先細りとなるものがある。136と140の体部外面下位にネジリ様の痕跡がある。141は他のものに比べ、口径が小さく、器高が高い。調整も成形後、体部外面に下位から中位まで、再度強くナデbを加え、やや特殊な器形となっている。ⅩⅩ期。

須恵質土器

鉢（142） 片口。胎土は淡灰色で粗砂を含む。体部はやや短く、内湾気味に開く。口縁部は垂直に立ち、端部は尖る。外面の稜は鋭い。口径25.6cm、器高9.7cm。東播系。

1 SX010 出土遺物（第22図、Pla 8 - 1 ~ 5）

土師器

小皿 a（143~146） 糸切り。口径6.4~8.9cm、器高0.8~1.4cm。体部は短く。口縁部は尖り気味。143と144は底部付近にネジリ様の痕跡がある。ⅩⅨ~ⅩⅩ期か。

小皿 b（147~148） 糸切り。口径7.5~8.8cm、器高1.8~2.0cm。148は外底に墨書が残るが、解釈不明。

小皿 c（149） 底部切り離しは不明。口径8.9cm、器高2.0cm。小皿 a に高台が付いた形態。高台は体部との境よりやや内側に付く。

坏 a（150~158） 糸切り。口径12.0~14.4cm、器高2.2~3.1cm。体部は立ち気味で、直線的なものと、口縁付近で外反するものがある。152~154は体部外面下位にネジリ様の痕跡がある。ⅩⅨ~ⅩⅩ期か。

皿 c（159） 糸切り。底径10.3cm。

石製品（160）

滑石の石鍋のツバの部分を利用したもので、たなびく草葉に菊花が添えられた意匠を持つ。平面は5.5×4.5cm、厚さ2.2cm。土器や鋳物等の工芸品の製作に係わるものか。

1 SX017 出土遺物（第23図）

土師器

小皿 a (161) 糸切り。口径9.0～10.0cm、器高0.7～1.2cm。

坏 a (162) 糸切り。口径12.8～14.6cm、器高2.2～3.5cm。

1 SX020 出土遺物 (第23図)

土師器

小皿 a (163・164) 163はヘラ切り、164は糸切り。糸切りはこの1点のみ。口径9.0～10.0cm、器高1.1～1.3cm。ⅩⅢ期。

坏 a (165・166) ヘラ切り。口径15.8～16.4cm、器高3.05～3.1cm。

丸底坏 a (167) ヘラ切り。口径15.6cm、器高3.0cm。内面にミガキ b を施す。

白磁

皿 (168) Ⅲ－1類。口径10.4cm、器高2.5cm、底径4.4cm。胎土は灰白色で密。釉調は淡灰緑色を呈し、体部外面下位は露胎。見込みの釉を輪状に掻き取る。

1 SX020 灰色粘質土層出土遺物 (第23図、Pla 9－1～3)

土師器

小皿 a (169～174) ヘラ切り。口径9.2～9.8cm、器高1.05～1.6cm。ⅩⅡ～ⅩⅢ期。

丸底坏 a (175～177) ヘラ切り。口径15.3～17.4cm、器高2.7～3.8cm。内面にミガキ b が施され、177は体部外面下位に指頭圧痕が顕著に残る。

坏 a (178・179) ヘラ切り。口径15.7～16.2cm、器高2.8～3.3cm。178は底部を押し出した痕跡はないが、底部が膨らみ気味で、体部内面の底部からの立ち上がりがり丸味をおびる。このタイプのものは図示したもの以外に数点ある。ⅩⅡ～ⅩⅢ期。

共伴した白磁碗Ⅶ類と皿Ⅲ類は過去のデータでは12世紀中頃以降安定して出土しており、本例はそれの先行する形で出土したことになる。

1 SX020 黄灰色土層出土遺物 (第23・24図、Pla 9－4～13)

土師器

小皿 a (180～190) 180～187はヘラ切りで、口径8.7～9.8cm、器高1.2～1.45cm。188～190は糸切りで、口径9.0～9.8cm、器高1.0～1.2cm。ⅩⅢ期。

丸底坏 a (191～195) ヘラ切り。口径15.6～17.6cm、器高2.4～3.55cm。内面にはミガキ b が施される。193・195は体部外面にナデ a が認められる。

坏 a (196～200) 196～198はヘラ切りで、口径15.0～16.2cm、器高2.85～3.75cm。199・200は糸切りで、口径15.0～16.8cm、器高2.85～3.2cm。196～198は底部に膨らみを持つタイプ。このタイプは比較的多く見られる。ⅩⅢ期。

三脚付鉢 (201) 口径19.8cm、器高5.6cm。底部切り離しは、上からナデ調整を加えているため不明。体部との境に小さな脚が三ヶ所付く。体外面にススが付着。

白磁

皿 (202) VI-2 b 類と思われる。口径12.8cm。胎土は淡黄白色。釉調は黄白色を呈し、体部外面下位は露胎。見込みにヘラ描き文を施す。

碗 (203・204) 203はⅧ-2 類。口径15.0cm、器高5.3cm、底径6.8cm。胎土は灰白色で中に細かな黒斑を含む。釉調は淡黄灰色を呈し、見込みの釉を輪状に掻き取る。204はV-2 a 類。口径17.0cm、器高7.1cm、底径6.1cm。胎土は灰白色でやや粗い。釉調は淡灰色を呈する。

須恵質土器

鉢 (205) 口径31.0cm。片口と思われる。胎土は暗灰色で、外面口縁部は黒灰色を呈する。粗砂を少量含み粗い。東播系。

トリベ (206) 口径26.4cm、器高8.5cmの大型品。内面は黒ずんでおり使用した痕跡は認められるが、剥落が著しく、付着物については不明。

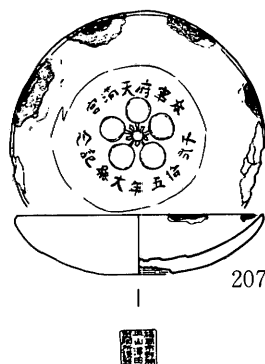
これら紹介した遺物のほか、各層位ごとに取り上げた遺物が数多くあるが、ここでいくつかの遺物について解説しておく。

茶褐色土は遺構面を広く覆う包含層であるが、多量のⅩⅨ期を主体とする遺物を出土している (Pla 8-6・7・8・9)。土師器がほとんどで割合として陶磁器が少ない。瓦質の分銅型の土製品も出土している。法量は6.3×4.5×1.0cm。

表土の黒色土からも中世から近代に至るまでの多種類の遺物を出土している (第25図、Pla 8-10・11)。Pla 8-11は中国の同安窯系の青磁碗である。法量は口径13.4cm、器高3.1cm、底径7.8cm。

Pla 8-10は染め付け磁器の小碗であるが、筑前須恵焼の採集品の中に類似した物があり、須恵焼である可能性がある。法量は口径13.4cm、器高3.1cm、底径7.8cm。

第25図は素焼きの土師皿である。ロクロ成形後内型に当てて内底の文様を浮きだたせ、仕上げにもう一度ナデている。外底は碁笥底で「福岡市皿山澤田製陶所」のスタンプを押す。内底の文様は、中心に太宰府天満宮の梅鉢文を置き、周りに「太宰府天満宮 千式拾五年大祭記念」の文字を配す。口縁にはススが数ヶ所にあり、灯明皿として使用されたと考えられる。千式拾五年の大祭は昭和2 (1927) 年におこなわれた。産地の野間焼については後述する。



第25図 大町遺跡表土出土
遺物実測図 (1/3)

これらの遺物のほか縄文時代後、晩期に該当するフレーク・コアを含む石器と、二枚貝の腹縁で施したと思われるナデを有する土器片が複数の遺構、層位で検出されており、これらの遺物は当該期の文化層こそないものの、新町遺跡3次調査で検出された生活面につながる資料である。

土師器の法量表

○×

○×

〈凡例〉 A. 番号 B. 挿図番号 C. 内底のナデの有無 D. 板状圧痕の有無

㊦. 黒色土器 ㊧. 瓦器

単位cm

茶褐色土層

器 種	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
小皿 a (糸)	R001		7.9	1.2	6.7	○	○
	R002		7.6	0.9	7.1	○	○
	R003		7.5	1.1	6.6	○	○
	R004		7.7	1.1	6.9	○	○
	R005		8.2	1.0	6.5	○	○
	R006		7.5	1.0	6.4	○	○
	R007		7.5	0.8	6.3	○	○
	R008		8.0	1.6	6.5	○	○
	R009		8.2	1.1	7.0	○	○
	R010		8.2	1.1	7.0	○	○
	R011		8.2	1.2	7.5	○	○
	R012		8.6	1.2	6.7	○	○
	R013		8.2	1.0	6.7	○	○
	R014		7.4	1.1	6.8	○	○
	R015		7.3	1.2	6.4	○	○
	R016		8.5	1.1	6.6	○	○
	R033		8.6	1.2	6.6	○	○
	R034		8.4	1.3	7.4	○	○
	R035		8.0	1.0	7.4	○	○
	R036		8.0	1.1	7.0	○	○
	R037		7.4	1.0	6.5	○	○
	R038		8.0	0.95	7.8	○	○
	a 1		7.6	1.0	6.0	○	○
	a 2		7.8	0.9	6.8	○	○
	a 3		7.6	1.0	6.8	○	○
	a 4		8.2	1.1	7.0	?	○
	a 5		9.0	1.6	6.6	○	○
	a 6		8.0	0.8	6.8	○	○
	a 7		8.0	1.1	6.8	○	○
	a 8		8.0	0.9	6.8	○	○
	a 9		8.6	1.2	6.6	○	○
	a 10		8.4	1.1	8.0	—	○
	a 11		9.0	1.1	8.4	○	○
	a 12		8.0	1.1	6.8	○	○
	a 13		8.2	1.0	7.0	○	○
	a 14		9.0	1.0	7.6	○	○
	a 15		8.6	1.0	7.2	○	○
	a 16		8.0	1.2	6.6	○	○
	a 17		8.0	1.0	5.6	○	?
	a 18		8.6	1.2	7.4	○	○
	a 19		8.4	1.1	7.4	○	○
	a 20		7.8	1.0	6.2	○	○
	a 21		7.4	1.3	6.4	○	○
	a 22		8.0	1.1	7.0	○	×
	a 23		8.2	1.0	7.0	○	○
	a 24		8.2	1.2	6.0	○	○
	a 25		8.2	1.0	7.5	○	○
	a 26		8.5	1.05	7.8	○	○
	a 27		8.2	1.1	7.8	○	○
	a 28		8.0	1.25	7.3	○	○
	a 29		8.0	1.05	7.1	○	○
	a 30		7.0	0.95	5.9	○	○
	a 31		7.4	1.05	6.0	○	○
	a 32		8.0	1.1	6.8	○	○
	a 33		8.0	1.4	6.6	○	○
	a 34		8.2	1.15	6.7	○	○
	a 35		8.2	1.3	6.8	○	○

坏 a (糸)	a 36		8.0	1.1	6.9	○	—
	a 37		7.4	1.0	6.7	○	—
	a 38		8.4	1.0	7.2	○	○
	a 39		8.0	1.2	6.4	○	?
	a 40		8.0	1.0	6.6	○	○
	a 41		7.6	0.9	6.6	○	○
	a 42		7.8	1.0	6.4	○	○
	a 43		8.2	0.9	6.2	○	—
	a 44		8.6	1.05	7.8	○	○
	a 45		8.0	1.3	7.0	○	—
	a 46		8.0	1.1	7.0	○	○
	a 47		7.4	1.0	6.6	○	○
	a 48		9.0	0.9	7.7	○	○
	a 49		8.8	1.35	8.4	○	○
	a 50		7.6	1.0	6.7	○	○
	a 51		7.4	1.2	6.0	○	○
	a 52		8.0	0.95	6.8	○	○
	a 53		8.0	1.0	7.2	○	○
	a 54		7.6	0.85	6.6	○	○
	a 55		8.0	1.05	6.9	○	○
	a 56		8.0	1.0	6.9	○	○
	a 57		8.5	1.45	7.4	○	○
	a 58		8.2	1.1	7.4	○	○
	a 59		8.2	1.1	6.5	○	—
	a 60		8.4	1.15	7.0	○	○
	R017		12.8	2.6	9.3	○	○
	R018		12.5	2.8	9.2	○	○
	R019		12.7	2.8	9.1	○	○
	R020		12.2	2.6	10.0	○	○
	R021		12.3	2.4	8.8	○	○
	R022		12.3	2.6	9.5	○	○
	R023		14.0	2.8	10.2	○	○
	R024		12.8	2.6	9.9	○	○
	R025		12.4	2.4	9.6	○	○
	R026		12.4	2.6	9.6	○	○
	R027		13.2	2.9	9.7	○	○
	R028		11.0	2.85	8.2	○	○
	R029		13.4	2.7	9.75	○	○
	R030		12.4	2.5	8.65	○	○
	R031		13.0	2.75	9.8	○	○
	a 1		12.6	2.8	9.2	○	○
	a 2		13.4	2.7	9.0	○	○
	a 3		12.2	2.9	9.0	○	○
	a 4		12.2	2.9	9.6	○	○
	a 5		13.0	3.2	8.8	○	○
	a 6		12.0	2.5	8.8	○	○
	a 7		12.4	3.0	9.4	○	○
	a 8		13.4	2.7	10.2	○	○
	a 9		12.6	2.7	9.0	○	○
	a 10		12.4	2.7	10.0	○	○
	a 11		14.8	2.5	7.8	○	○
坏 b (糸)	R032		12.3	3.0	6.5	○	○
S K005							
器 種	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
小皿 a (ヘラ)	R015	1	9.3	1.5	7.1	○	×
小皿 a (糸)	R010	2	9.2	1.3	7.3	○	×
	R011	6	9.6	1.2	8.3	○	○
	R012	5	9.4	0.9	7.1	○	○

	R013	4	9.9	0.9	8.5	○	○
	R014	3	9.3	0.9	8.2	○	○
	R016	10	11.3	1.1	9.3	○	○
	R017	9	11.8	1.0	10.2	○	○
	R018	8	11.8	1.1	9.6	○	×
	a 1		9.0	0.9	7.0	○	○
	a 2		8.4	1.1	7.0	○	×
	a 3		10.0	1.1	9.0	○	○
	a 4		9.0	0.9	8.0	○	×
	a 5		8.8	0.7	7.2	○	○
	a 6		9.2	1.6	7.0	○	○
	a 7		9.4	0.8	8.0	○	○
	a 8		10.4	1.2	9.0	○	?
	a 9		9.4	0.6	8.0	○	—
	a 10		11.4	1.1	10.0	○	○
小皿 c (糸)	R019	7	9.5	1.8	8.2	○	○
坏 a (ヘラ)	R008	11	15.0	3.1	11.2	○	○
	R009	12	15.0	2.9	9.9	○	○
坏 a (糸)	R001	18	14.9	3.0	9.5	○	?
	R002	13	15.3	2.9	9.3	○	○
	R003	14	15.1	3.0	11.0	○	×
	R004	15	15.0	2.7	10.3	○	○
	R005	16	14.4	2.9	9.5	○	○
	R006	19	14.5	2.6	11.4	○	○
	R007	17	14.8	3.4	10.5	○	○
	a 1		15.6	2.6	10.8	○	○
	a 2		15.4	2.8	10.8	○	?
	a 3		14.6	2.2	11.0	○	—
	a 4		15.0	2.6	11.0	○	○
	a 5		15.0	2.7	10.6	○	—
	a 6		15.6	2.6	10.0	○	—
	a 7		16.4	2.6	11.0	○	○
	a 8		14.0	2.1	10.0	○	—
	a 9		16.6	2.7	11.0	○	—
	a 10		15.6	2.7	12.0	○	—

S X 010

器 種	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
小皿 a (糸)	R001		8.2	1.1	7.4	○	○
	R002		8.3	1.0	7.4	○	○
	R003		8.0	1.2	6.9	○	○
	R004		8.0	1.4	6.1	○	○
	R005	143	7.8	1.1	6.6	○	○
	R006		7.6	1.0	6.3	○	○
	R007		7.5	0.8	6.1	○	○
	R008		7.7	1.1	6.5	○	○
	R011	146	8.9	1.1	7.4	○	○
	R012	145	7.8	1.1	6.4	○	○
	R013	144	8.2	1.2	6.7	○	○
	R014		7.5	0.9	5.8	○	○
	R015		8.4	1.2	6.7	○	○
	R016		6.4	1.3	5.2	○	○
	a 1		7.6	1.0	7.0	○	○
	a 2		7.4	0.9	6.2	○	○
	a 3		8.4	1.1	7.4	○	○
	a 4		8.6	1.1	7.0	○	○
	a 5		8.6	1.3	8.0	○	○
	a 6		8.0	1.1	7.4	○	○
	a 7		8.6	1.0	7.0	○	○
	a 8		8.0	1.0	6.2	○	○
	a 9		7.6	1.3	7.0	○	○
	a 10		—	1.0	—	○	—
	a 11		7.6	1.0	5.4	○	—
	a 12		7.4	0.8	6.2	○	○
	a 13		8.0	1.0	7.4	○	○

	a 14		7.6	1.1	6.0	○	○
小皿 b (糸)	R009	147	7.5	1.8	5.6	○	○
(墨書)	R010	148	7.9	1.9	6.9	○	○
	b 1		8.8 ?	2.0	6.0	○	×
小皿 c	R017	149	8.4	1.3	7.9	○	○
				(2.0)	(6.5)	○	○
坏 a (糸)	R018	156	12.5	3.0	8.8	○	○
	R019	154	12.4	2.6	8.7	○	○
	R020	158	12.6	2.7	9.3	○	○
	R021		12.7	2.5	8.6	○	○
	R022		12.9	2.9	9.3	○	○
	R023	155	12.4	2.7	8.8	○	○
	R024		12.6	2.8	8.8	○	○
	R025	151	12.3	2.7	9.4	○	○
	R026		12.2	3.1	8.8	○	○
	R027	157	13.0	2.4	9.8	○	○
	R028	152	12.6	2.8	8.8	○	○
	R029		12.6	2.4	8.3	○	○
	R030	153	12.7	2.8	9.4	○	○
	R031	150	12.6	2.5	9.7	○	○
	R032		12.0	2.5	9.0	○	○
	a 1		12.6	2.9	12.0	○	○
	a 2		13.0	2.7	9.0	○	○
	a 3		12.8	2.5	9.4	○	○
	a 4		13.0	2.3	10.4	○	—
	a 5		12.6	2.2	9.4	○	○
	a 6		12.4	2.4	10.0	○	○
	a 7		13.0	2.8	10.4	○	○
	a 8		13.0	2.6	9.0	○	○
	a 9		14.4	2.7	11.0	○	○
皿 c	R033	159			10.3	○	○

S K 010茶褐色土層

器 種	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
小皿 a (糸)	R001	129	7.8	1.0	6.2	○	○
	R002	118	7.8	1.2	7.2	○	○
	R003	119	7.6	1.0	7.0	○	○
	R004	127	7.8	1.3	6.5	○	○
	R005	120	7.8	1.0	6.3	○	○
	R006	125	8.3	1.2	6.8	○	○
	R007		7.8	0.95	6.6	○	○
	R008	122	7.6	0.9	5.7	○	○
	R009		7.9	1.1	6.6	○	○
	R010		7.5	0.9	6.8	○	○
	R011	121	7.7	1.0	6.5	○	○
	R012	123	8.0	1.0	6.6	○	○
	R013	124	8.1	1.2	6.4	○	○
	R014	130	8.1	1.35	6.0	○	○
	R015	117	6.8	1.0	6.2	○	○
	R016		7.7	0.9	6.4	○	○
	R017	128	7.6	1.2	6.2	○	○
	R018	126	7.8	1.0	6.3	○	○
	a 1		8.0	1.1	6.0	○	○
	a 2		7.6	0.9	7.0	○	○
	a 3		8.6	1.2	7.0	○	○
	a 4		7.6	1.1	6.4	○	○
	a 5		7.6	1.0	5.6	○	○
	a 6		7.6	1.2	7.0	○	○
	a 7		8.0	1.3	6.0	○	○
	a 8		8.0	0.9	6.0	○	○
	a 9		8.4	1.0	6.4	○	○
	a 10		7.0	1.0	6.0	○	○
	a 11		7.6	1.0	6.4	○	○
	a 12		8.0	1.0	7.0 ?	?	?
	a 13		8.0	1.0	6.6	○	?

	a 14		8.6	0.9	6.8	—	○
	a 15		7.0	1.1	5.6	○	○
	a 16		8.6	1.2	7.0	○	○
小皿 b (糸)	R019	133	7.5	1.6	5.8	○	○
	R020	132	7.0	1.85	4.8	○	?
	R021	131	7.6	1.5	5.3	○	?
坏 a (糸)	R022	140	12.3	2.5	9.0	○	○
	R023	136	12.4	2.7	9.4	○	○
	R024	134	12.4	2.5	9.0	○	○
	R025		12.2	2.4	8.8	○	○
	R026	137	12.0	3.0	9.5	○	○
	R027	139	13.2	2.4	9.8	○	○
	R028	138	12.6	2.5	9.6	○	○
	R029	135	12.9	2.8	8.6	○	○
	R030	141	11.0	3.6	8.6	○	○
	a 1		14.0	2.5	8.8	○	?
	a 2		13.0	2.5	8.4	○	○
	a 3		13.6	2.8	8.0	○	○
	a 4		12.4	2.5	9.0	○	○
	a 5		12.4	2.5	8.8	○	○

S X 010 灰色土層

器 種	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
坏 a (糸)	R001	99	15.3	2.9	10.0	×	—

S X 010 黒灰色土層

器 種	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
小皿 a (糸)	R002	100	8.4	0.8	7.2	○	○
	R003	101	9.0	1.0	7.2	○	—
	R005	102	9.6	1.5	8.0	○	○
小皿 a ₂ (糸)	R004		10.1	1.5	6.8	×	×
坏 a (糸)	R001	103	16.0	2.7	11.3	○	?

S X 010 暗灰色土層

器 種	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
小皿 a (糸)	R001	95	8.6	1.0	6.2	○	○
	R005	94	8.0	1.0	6.0	○	○
	R006	93	7.6	1.0	6.7	○	?
坏 a (糸)	R002	98	13.0	2.5	9.3	○	○
	R003	96	12.6	2.5	9.6	○	○
	R004	97	12.2	2.7	9.0	○	○

S X 015 黒灰色土層

器 種	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
小皿 a (糸)	R001	104	7.8	1.2	6.5	○	○
	R002		8.2	1.25	6.8	○	○
	R003	105	8.4	1.35	6.4	○	○
	R004		9.6	1.25	7.5	○	○
	R007	106	7.7	1.2	6.6	○	○
	a 1		8.6	1.6	7.2	○	○
	a 2		8.2	1.1	7.6	○	○
	a 3		8.6	1.2	7.9	○	○
	a 4		8.6	1.05	8.1	—	○
	a 5		8.4	1.2	7.6	○	○
	a 6		8.6	1.2	6.7	○	—
	a 7		8.6	1.1	7.4	○	○
	a 8		8.2	1.3	7.0	○	—
	a 9		7.8	1.1	6.6	○	?
	a 10		8.6	1.0	7.7	○	—
小皿 c	R005	108	8.0	1.85	5.45	○	○
	R006	107	7.6	1.85	5.25	○	?
坏 a (ヘラ)	R016		16.5	3.3	13.1	○	○
坏 a (糸)	R008	116	12.4	2.75	9.15	○	○
	R009	114	12.6	3.0	8.8	○	○
	R010	115	12.4	2.95	9.7	○	○
	R015	110	12.4	2.8	9.2	○	○
	R011	111	12.2	2.9	9.35	○	○
	R012	113	12.7	2.85	9.55	○	○

	R013	112	12.5	3.0	9.55	○	○
	R014	109	12.5	2.95	9.3	○	○
	a 1		12.4	2.5	8.6	○	○
	a 2		12.4	2.7	9.4	○	○
	a 3		12.6	3.0	9.4	○	○
	a 4		13.2	2.8	10.1	○	○
	a 5		15.0	2.3	11.7	—	—
	a 6		12.2	2.3	8.6	○	○
	a 7		11.8	2.35	8.2	○	○
	a 8		12.6	2.6	9.3	—	—
	a 9		16.0	2.1	12.0	○	○

S X 017

器 種	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
小皿 a (糸)	R003	161	10.2	1.2	8.8	○	○
	a 1		9.0	1.0	7.0	○	?
	a 2		9.8	0.7	9.2	○	—
	a 3		10.2	1.1	7.6	○	—
	a 4		10.5	?	7.4	?	○
坏 a (糸)	R001		14.6	?	2.2	10.0	?
	R002	162	13.4	?	2.4	8.0	?
	a 1		12.8	3.5	9.6	—	—

S K 019

器 種	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
小皿 a (ヘラ)	a 3		9.8	1.2	7.0	—	○
	a 4		9.8	1.1	7.4	—	—
小皿 a (糸)	R003	23	10.0	1.3	7.9	○	○
	R004	22	9.9	1.0	8.1	○	○
	R005	21	9.4	1.3	7.2	○	○
	R006	25	9.0	1.1	7.0	○	○
	R007	24	8.4	1.0	7.0	○	○
	R008	20	9.0	1.2	8.0	○	○
	R009	27	9.6	1.2	7.3	○	○
	R010	26	9.2	1.0	6.4	○	○
	a 1		10.2	0.8	8.8	○	○
	a 2		8.8	0.8	8.0	○	○
小皿 c (ヘラ)	c 1				6.0	○	○
坏 a (糸)	R001	28	15.4	3.0	11.0	○	○
	R002	29	16.4	3.2	11.0	○	○
	a 1		16.8	2.5	12.4	○	○

S X 020

器 種	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
小皿 a (ヘラ)	R001	163	9.5	1.15	7.6	○	○
	a 1		9.0	1.1	7.0	○	×
	a 2		9.2	1.15	7.4	○	○
	a 3		10.0	1.1	7.6	○	○
	a 4		9.4	1.2	7.2	○	○
	a 5		9.6	1.25	7.8	○	×
	a 6		9.2	1.3	7.3	○	○
	a 7		9.0	1.1	6.6	○	○
小皿 a (糸)	R002	164	9.0	1.2	7.2	○	×
坏 a (ヘラ)	R003	165	15.8	3.05	11.9	○	○
	R004	166	16.4	3.1	11.6	○	○
丸底坏 a	R005	167	15.6	3.0	—	×	×
坏 c ?	c 1				6.4	×	×
	c 2				6.6	○	×

S X 020 黄灰色土層

器 種	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
小皿 a (ヘラ)	R002	183	9.4	1.2	7.1	○	○
	R003		9.0	1.3	7.4	○	○
	R004	185	9.2	1.25	6.7	○	○
	R005	180	8.9	1.4	7.1	○	○
	R006	182	8.7	1.35	6.8	○	○
	R007		8.9	1.25	6.7	○	○
	R008	184	9.2	1.3	6.5	○	○

	R010	188	9.5	1.05	6.95	○	○
	R011	189	9.5	1.1	7.05	○	○
	R012		9.5	1.0	8.15	○	○
	R013		9.8	1.03	8.1	○	○
	R027	181	9.8	1.45	7.35	○	○
	R031		9.4	1.3	7.8	○	○
	R032	187	8.8	1.5	6.4	○	○
	R033	186	9.4	1.25	7.7	○	○
	R034		9.4	1.4	7.7	○	×
	R035		9.1	1.25	7.3	○	○
	R036		8.8	1.5	6.75	○	×
	R037		9.1	1.25	7.3	○	○
	R038		10.5	1.6	7.7	○	○
	a 1		9.0	1.15	7.2	○	○
	a 2		9.8	1.2	8.2	○	○
	a 3		9.2	1.1	7.6	○	?
	a 4		9.6	1.0	7.8	○	○
	a 5		9.0	1.1	6.8	○	○
小皿 a (糸)	R009	190	9.1	1.0	7.5	○	○
坏 a (ヘラ)	R014	196	15.6	3.35	11.05	○	○
	R015	197	15.8	3.3	12.0	○	○
	R016		16.0	2.85	11.2	○	?
	R017		15.8	3.3	11.95	○	○
	R018		15.9	2.9	11.8	○	○
	R026		16.2	3.05	11.55	○	○
	R039	198	15.0	3.75	10.95	○	○
	a 2		16.2	3.0	11.2	○	○
	a 3		15.9	3.0	11.8	○	○
坏 a (糸)	R019		15.5	3.2	11.55	○	○
	R020	199	15.6	2.85	11.4	○	○
	R028	200	15.5	3.1	10.85	○	○
	a 1		16.8	2.9	12.0	○	○
丸底坏 a	R021	195	16.3	2.9	—	×	○
	R022	191	16.9	2.8	—	○	○
	R023		16.6	3.3	—	×	○
	R024		16.1	3.05	—	×	○
	R025	193	15.8	3.2	—	×	○
	R029	192	16.4	3.55	—	×	○
	R030		16.0	3.25	—	×	○
	R040		16.2	3.3	—	○	○
	R041		16.4	2.55	—	—	○
	R048	194	16.0	3.0	—	—	○
	a 4		17.6	2.4	—	×	○
	a 5		15.6	3.3	—	×	○
三脚付鉢	R044	201	19.8	5.6	—	—	○
S X 020 灰色粘質土層							
器 種	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
小皿 a (ヘラ)	a 1		9.8	1.05	7.8	○	×
	a 2		9.2	1.1	6.9	○	×
	a 3		9.4	1.1	7.7	○	×
	a 4		9.6	1.3	7.4	○	○
	R001	173	9.2	1.6	7.5	○	○
	R002	172	9.4	1.1	7.5	○	×
	R003	171	9.6	1.4	7.35	○	?
	R004	174	9.7	1.25	8.2	○	×
	R005	169	9.4	1.2	7.05	○	○
	R006	170	9.4	1.6	8.0	○	×
坏 a (ヘラ)	R007		16.2	2.8	11.85	○	×
	R008		15.7	3.25	11.25	○	×
	R014	179	16.2	3.3	11.75	○	○
	R015	178	16.2	3.1	12.1	○	○
丸底坏 a	R009	177	15.5	3.1	12.4	×	×
	R010		16.4	3.3	—	×	○
	R011	175	16.4	3.8	—	×	○

	R012	176	17.4	3.8	—	×	○
	R013		15.3	2.7	11.45	×	○
丸坏×坏 a	a 1		15.0	2.5	—	?	○
S K 022							
器 種	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
④桃 C	R001	30	15.6	5.4	6.75	—	—
S K 027							
器 種	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
小皿 a (糸)	R001		8.8	1.1	6.8	○	○
S K 034							
器 種	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
小皿 a (糸)	R001	32	9.9	1.1	8.0	○	?
	a 1		7.4	0.8	6.0	?	—
	a 2		7.6	0.8	6.6	?	○
	a 3		9.0	1.2	7.0	?	?
小皿 b (糸)	R003	33	7.7	1.4	5.7	○	?
小坏 a (糸)	R002	34	9.0	1.7	5.2	?	?
坏 a (糸)	R004	35	13.1	2.7	9.6	○	—
鉢	R005	37	45.5	10.5	31.4	—	—
S K 034 暗灰色土層							
器 種	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
坏 a (糸)	R001	31	13.2	2.7	8.6	○	×
S K 034 黄灰色土層							
器 種	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
小皿 a (糸)	a 1		9.0	1.2	7.2	—	—
坏 a (糸)	a 1		13.0	2.3	9.0	—	—
S K 037							
器 種	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
小皿 a (糸)	R002	38	9.4	0.8	7.0	○	○
坏 a (糸)	R001	39	15.0	2.5	10.0	○	—
S K 037 淡灰色土層							
器 種	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
小皿 a (糸)	R003	40	8.0	1.0 + a	7.2	○	—
坏 a (糸)	R001	42	15.6	3.3	10.5	○	○
	R002	41	15.5	3.1	11.3	○	○
	a 1		16.4	3.3	11.4	○	○
S K 037 黑灰色土層							
器 種	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
小皿 a (糸)	R006	44	9.4	1.0	7.2	○	○
	R007	45	9.4	0.9	7.2	×	—
	a 1		9.6	1.0	8.6	○	○
坏 a (糸)	R001	48	15.9	2.7	10.4	○	○
	R002		15.7	2.7	11.2	○	○
	R003	47	15.8	3.1	11.0	○	?
	R004	46	16.0	3.3	11.4	○	○
	R005	49	15.5	3.2	11.2	○	○
	a 1		16.6	2.5 +	—	—	—
S K 038							
器 種	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
坏 a (糸)	R001	50	15.8	2.9	10.8	○	○

遺構一覧表

(凡例)

- この表は基本的に現場調査時に作成したものである。
- 遺構番号は本文に使用したものと同一である。
- 地区は遺構の所属する任意の調査グリットの意で、グリット南東の記号に代表される。本文第10図参照。

S-番号	遺構番号	種別	切り合い	地区	時期
2	SX002	溝状	2→4	1ライン	古代末
3	SD003	溝状		2ライン	江戸後期
4		Pit 群	2→4	C1	
5	SK005	土坑		B3	中世
6		Pit 群		C2	
7		Pit 群		B1	
8	SK008	土坑	8→20	G2	江戸後期
9		土坑(電柱アンカー)		G2	現代
10	SX010	溜まり状		F4	古代末～中世
11	SK011	土坑		G3	〃
12		Pit 群		G2	
13		Pit 群		F2	
14		Pit		G2	
15	SX015	溜まり状(SX010の一部か)		H4	中世
16		土坑		F3	現代
17	SX017	溜まり状		Bライン	中世
18		Pit		G2	〃
19	SK019	土坑		F3	中世
20	SX020	溜まり状	20→15	2ライン	中世
21		Pit		G2	
22	SK022	Pit		C3	古代
23	SD023	溝		F2	現代
24		Pit 群		C3	古代末～中世
26		Pit		C4	近世～現代
27	SK027	土坑		H3	〃
28		土坑		D3	〃
29		土坑		D3	古代末
31		土坑(電柱アンカー)		E2	現代
32	SK032	土坑		E2	古代末
33		土坑		D3	〃
34	SK034	土坑		E3	中世
36		土坑		D3	古代末
37	SK037	土坑		E3	中世
38	SK038	土坑		F3	〃
39		土坑	39→15	H4	〃
41		土坑	41→15	G3	〃
42		土坑	10→42	G4	〃
43		土坑		H2	近世～現代
44		Pit 群		H3	〃
46	SK046	土坑		H4	近世
47		土坑		E4	古代
48		土坑		E3	
49		溜まり状		H3	近世～現代
51		土坑		H2	〃
52	SE052	井戸(石井)		D2	近代

出土遺物一覧表

凡例

- ()の中の数字は破片数を示す。
- Ⅳ×ⅤはⅣまたはⅤ類の意。
- Ⅳ～ⅦはⅣ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ類のうちのどれかの意。
- 同一個体で別々の遺構から出土している場合はそのまま両方の遺構に点数をカウントしている。
- Obは黒曜石、Andは安山岩、Fはフレークの意。
- 陶磁器分類は「大宰府条坊跡」Ⅱ1983年太宰府市教育委員会の分類に基づく。

茶褐土

須 恵 器	甕(2)		
土 師 器	坏a(糸),小皿a(糸),坏b(1),甕		
黒色土器B	碗片		
青 磁	龍泉	碗	I(2),I2×3(1),I2-4(1),I3(1),I5(1),I5b(3)
			片(1)
	同安	碗	III1b(1),Ib(1),I?(1)
		その他	高麗
金 属 製 品	鉄滓(2),銭(2),かんざし(1)		
土 製 品	分銅形		
白 磁	碗	II(1),V?(1),V2(1),V4c(1),VIII(1),VIII2?(1),鉢I5(1)	
	皿	V2?(1),VI×VII(1),VIIa(1)	
		壺 片(2), 他 片(2)	
青 白 磁	合子蓋(1)		
須恵質土器	鉢片 東播?(2)		
陶 器	無釉 鉢I2a(1),片B'ab(3),常滑甕?(1),黄釉 洗I(1),A'a(1),A'b(1)		
瓦 類	片,文字瓦「安楽寺」		
石 製 品	滑石片		
そ の 他	縄文 深鉢片(1)		

表土

土 師 器	丸坏a,小皿a,近代?壺(1),皿「野間」スタンプ有		
青 磁	龍泉	碗	I(1),I2(1),I2a(1),I4b(1),I5a(1),I5b(1), II,II2a(1),片(5)
金属製品	鉄滓(2)		
白 磁	碗	IV(4),IV1a(5),V(1),V4b(1),VIII1(1), VIII2(1),VIII2×3(1)	
	皿	VIIb(1),IX1b(1)	
土師質土器	七輪(1),		
陶 器	肥前磁器	皿(3)「泉惣」の墨書、 碗E類(1)	
	ワラ灰釉	碗(1) 近世陶片	
瓦 類	片,軒平(1)(梅鉢文あり)		
石 製 品	滑石製品(1)(穿孔有り)		
そ の 他	ビー玉		

黒色土

土 師 器	坏a,丸坏a,小皿a,近代燈火具		
青 磁	龍泉	碗	I1× III(1),I2(1),I2-4(1)
	同安	碗	I1b(1)
土 製 品	把手		
白 磁	碗	II3(1),IV(8),IVb(1),IV-VIII(2),V?(1),V2(1),V3(2),V1b(1),VIII(2),VIII1?(4),XI?(タテヘラ)(1),近代	
	皿	III1(1),IV(1),VI(3),VI?(1)	
		壺II系(1)	
青 白 磁	碗(1)		
須恵質土器	鉢		
陶 器	唐津 灰釉 肥前磁器 I(1),XI(1), 黄釉	刷毛目皿(1),備前 近世坏(内底蛇の目軸ハギ), E類(1),灰釉 壺A'b(2),無釉 壺E'ab(1),	酒坏(梅鉢文入り)素焼, (2), 鉢 近代陶磁 片
石 製 品	滑石(3)		
そ の 他	インク瓶「SIMCO」		

S-02

土 師 器	坏a(糸),小皿a(糸)		
青 磁	龍泉	碗	I5b(1)

S-03

土 師 器	小皿a(へら)
陶 器	肥前陶器 丸碗(2),碗(1),碗蓋(1), 鉄釉 甕(2),播鉢(1),燈火具(1),土瓶(1), 鉛釉 土瓶(2)
瓦 類	片,丸片,平片(1)

S-04

土師器	坏a(糸)
瓦質土器	鉢片
瓦類	平片

S-05

須 恵 器	甕(4)		
土 師 器	坏a(糸),小皿a(糸),小皿a(糸)(やや口径大),小皿c(1)		
青 磁	龍泉	碗	I2
	同安	碗	Ib(1)
	その他	高麗	碗II(1),片(1)
白 磁	碗	IV(2),V2b(1),VIII2×VIII3(1),VIII2×VI	
	皿	VI(5),VIIa(1),VI?(1),片(1)	
		片(4)	
須恵質土器	鉢片	東播(1), 朝鮮?(1)	
陶 器	高麗	碗II(1),	
	黄釉無釉褐常滑	盤II(1),水注X×鉢(1),朝鮮甕(1),Cb,重I(1)	
石 製 品	石ナベ片(1),滑石片(1)		

S-05 灰色土

須 恵 器	片(1)	
土 師 器	坏a(糸),ナベ?(1)	
黒色土器B	碗片	
金属製品	鉄滓(1),鉄釘(1)	
白 磁	碗	V3a(1)

S-06

土師器	小皿a(ヘラ)
黒色土器B	碗片

S-07

土 師 器	丸坏a(ヘラ),小皿a(ヘラ)
黒色土器B	碗片
そ の 他	縄文土器片

S-08

須 恵 器	甕	
土 師 器	丸坏a,坏a,小皿a	
白 磁	碗	II(3),II1(1),IV(5),IV1a(1),IV2(1),IX(1),V×VIII(2),VIII(2),VIII2(1),VII1a(1)
	皿	VII1a(1)
	片	
瓦 質 土 器	火鉢A(1)	
須恵質土器	鉢 東播(1)	
陶 器	肥前磁器	碗A(2),碗B(1),紅皿(2),鉢(蛸唐草)(1),唐津 刷毛目碗(1),皿?(1),灰釉坏(1),近世緑釉 坏(2),近世褐釉 甕(1),近世鉄釉 指鉢(1),近世灰釉 坏(1),灰釉 壺IV1×2(1),褐釉 片(1),壺?(1),黄釉 盤E(1)
	瓦 類	平,丸,(量多い)軒平(1)

S-09

白 磁	碗	IV(2),近代もの(1)
陶 器	軟陶	酒杯(2),急須蓋(1),陶磁 各々

S-10

須 恵 器	甕(2)	
土 師 器	小坏a(糸),坏a,皿c,小皿a(糸)(墨書有り 1),小皿b,小皿c	
青 磁	龍泉	碗 I2(1),I5(2)
		皿 I(1)
	その他 碗 片(1)	
金属製品	鉄滓(8+),鉄釘(3)	
白 磁	碗	V3(1),V4×VIII(1),VIII?(2),IX(1)
	片(2)	
陶 器	褐釉 鉢III(1),四耳壺III(1),C'ab(四耳壺XII?)(1),常滑?(1)	
瓦 類	片	
石 製 品	滑石スタンプ(1),赤間石?の硯	

S-10 暗灰土

土 師 器	丸坏a(ヘラ),坏a(糸),小皿a(糸),鉢(1)		
瓦 器	片		
青 磁	龍泉	碗	I2×3(3)
			小壺15b(1)
白 磁	碗	II(1),IV-VIII(5),VIII2?(2)	
		皿	IV(1),V×VI×VII(2)
須恵質土器	朝鮮甕?(1),鉢 東播(1)		
陶 器	無釉 灰釉	鉢I2a(1), 壺A'b(1),A(1)	
瓦 類	片		
石 製 品	And-サイドスレド(1)		
そ の 他	縄文 粗製鉢(二枚貝ハケ有)(2)		

S-10 黒灰土

土 師 器	坏a(糸),小皿a(糸),小皿a2(1)(混入?),小皿b	
青 磁	龍泉	碗 IIb(1)
		片(2)
	同安	皿 I(1)
	その他	高麗 碗片(1)?,皿片(1)
白 磁	碗	IV(2),V(1),V1(1),VII(1),IX(1)
	皿	V1b(1),V2(1)
		片(3)
瓦 質 土 器	火舍(巴文)(1)	
須恵質土器	鉢 東播	
陶 器	常滑	甕(2)(S-3 4 と同一か?)
	無釉	鉢(1),坏(1),甕?(2)
瓦 類	片	

S-10 灰色土

土 師 器	坏a(糸),小皿a(糸),丸坏a(ヘラ)
瓦 器	碗(1)
瓦 質 土 器	鉢?(2)
陶 器	常滑 (2)

S-10 茶褐土

須 恵 器	甕(2),朝鮮甕?(1)		
土 師 器	坏a(糸),小皿a(糸),小皿b		
青 磁	越州	碗	I1(1)
	龍泉	碗	I1(1),I5a(2),I5b(1),I2-4(2),III(1)
		皿	I(1)
	同安	皿	I(1),I2(1),片(1)
	その他	碗	片(3),水注×壺(1)
金 属 製 品	鉄釘(4)		
土 製 品	円形須恵質(1)硯?		
白 磁	碗	IV(2),III×IV2(1),V2×VI 輪花(1), V1a(1),V2(2),V3a(1),V3×VIII3(1), 白V(2)	
	皿	VII1(1),VIII(1)	
		片(13)	
青 白 磁	片(1),合子(1)		
瓦質土器	擂鉢(イブシかき目有)(1)		
須恵質土器	鉢 東播(4),甕(格子叩き)(1)		
陶 器	無釉 天目	鉢I2a(1), (1)	
瓦 類	片		

S-11

土 師 器	坏a(糸),小皿a(糸),	
白 磁	碗	VIII1(1)
		片(1)
土師質土器	近世 七輪片	
須恵質土器	鉢(1)	
瓦 類	片 近世	

S-12

土 師 器	坏a(1),小皿a(1)
白 磁	皿 VII1b(1)(墨書「上」or「正」)

S-12 淡灰土

土 師 器	坏a(糸),小皿a(糸),c片
瓦 器	碗片

S-13

土 師 器	坏a(糸)片
白 磁	碗 V(1)
瓦 類	近世 片

S-14

土 師 器	片
瓦 器	碗片
青 磁	片(1)
白 磁	碗 VIII1(1)
瓦 類	片

S-15 黒灰土

須 恵 器	甕(1)
土 師 器	丸坏a,坏a(糸),小皿a(糸),小皿c,坏a(ヘラ)
瓦 器	皿
青 磁	龍泉 碗 IIb(2),片(1)
	その他 高麗? (1),他 皿 (1)
金属製品	釘(1),鉄塊(1)
白 磁	碗 IV(1),V(1),VI(1),VII(2),V-VIII(1),
	皿 VIIb(1)
	壺(1)
瓦質土器	鉢(1)
須恵質土器	鉢
陶 器	無釉 鉢(1),坏(1),甕(2) 常滑 甕(2)
瓦 類	片
石 製 品	滑石ナベ片(2)

S-16

土 師 器	坏a(糸),小皿a(糸),燈火具
金属製品	鉄滓(1)
陶 器	黄釉 盤(1), 褐釉 壺(1)
瓦 類	片(新しい)

S-17

須 恵 器	甕(3)
土 師 器	坏a(糸),小皿a(糸)
瓦 器	碗片
青 磁	龍泉 碗 I4(2),I5b(1) 片
	同安 碗 IIb(1)
白 磁	碗 IV(1)
	皿 IX(1),IX1(1)
	壺 片(2)(水注?), 片(1)
瓦質土器	火舎(1)(巴文)
須恵質土器	鉢 東播(1)
陶 器	褐釉 壺IV(1), 鉄釉 鉢II? (近世混入?), 壺片Cb(1), 常滑 (1)
瓦 類	平片

S-18

土 師 器	坏a(糸),小皿a(糸),坏c
瓦 器	碗片
金属製品	鉄滓(1)
白 磁	碗 片(1)

S-19

須 恵 器	甕(1)
土 師 器	小皿a(糸),坏a(糸),坏c × 小皿c
青 磁	龍泉 碗 I2(1),I2×I3(1)
白 磁	碗 IV(2)
	皿 VII(2)
	片(2)
須恵質土器	鉢(1)
瓦 類	平
そ の 他	鉾石(1)

S-19 暗灰土

土 師 器	片
瓦 器	碗片

S-20

須 恵 器	甕片(4)
土 師 器	丸坏a(ヘラ),小皿a(ヘラ),小皿a(糸),坏a,坏c
瓦 器	碗(1)
青 磁	同安 碗 片(1)
	その他 高麗(初期)III×龍I
白 磁	碗 II(2),IIa(2),IV1a(2),IV(2),VI(1), V4b(1),XIII1b(1),IVV(1),IV-VIII(5),
	皿 II1a(1),III(1),VI(1),VI1a(2),II×III(1), V×VI(1),VI×VII(1),V×VI×VII(1)
	壺II(1),壺III?(1)
青 白 磁	碗(1),皿(1)
須恵質土器	鉢 東播(2)
陶 器	無釉 壺(中国製)ab(1)
瓦 類	文字瓦 平「安楽寺」(1)
石 製 品	滑石片,And-F(1)
	近世の混入遺物複数有り

S-20 灰色土

土 師 器	坏a(ヘラ),小皿a(ヘラ),鉢?(1)(縄文浅鉢?)
黒色土器B	片
白 磁	碗 VIII2×VIII3(1)
	皿 VIIb?(1)

S-20 灰粘土

須 恵 器	甕(1),朝鮮壺?(1)
土 師 器	丸坏a(ヘラ),坏a(ヘラ),小皿a(ヘラ),坏a(糸),鉢(2)
黒色土器B	碗片
白 磁	碗 II(3),IV(2),V?(1),V2?(2),IV-VIII(1), V×VIII(1),V×VIII2(1),VIII2(1), VIII2×VIII3
	皿 III1(1)
	片(1)
須恵質土器	鉢 東播?(2),他(1)
陶 器	黄釉 E類系壺(1)
瓦 類	平片

S-20 黄灰土

須 恵 器	鉢(3)
土 師 器	丸坏a(ヘラ),坏a(ヘラ),坏a(糸),小皿a(糸),脚付鉢(2),
瓦 器	片 碗c(1)
青 磁	龍泉 片(1)
金属製品	片,鉄釘
土 製 品	ルツボ(1)
白 磁	碗 II?(1),II1(1),II(3),IV(6),IV1a(2),V(2),V2(4), VIII(1),VIII2(3),IV-VIII(12), V1×2(1),V2×VII×VIII(1),片(1)
	皿 III1(1),VI(3),VI1a(2),VI1b(2),V2× IV(1),VI2b(1),XI(1)
青 白 磁	片(2)
緑 釉	皿?(1)(須恵質京都)
陶 器	天目 碗(1)混入?, 褐釉 鉢VI(1), 灰釉? (1) 緑釉 皿(1)
青 花	近世(1)混入
瓦 類	平「安楽寺」(1)斜格子,平(1)小縄目
石 製 品	滑石容器片,And-F(1)
そ の 他	ガラス小玉(1)
	近世混入多少あり

S-21

瓦 類	片 近世
-----	------

S-22

土 師 器	坏a(糸)片,小皿a(糸)片
瓦 器	碗(畿内)
黒色土器B	片

S-23

土 師 器	大甕片
青 磁	龍泉 碗 III(1) 片
陶 器	無釉 甕(1), 肥前磁器 碗(1)
瓦 類	片

S-24

土 師 器	丸坏a(ヘラ),小皿a(ヘラ),坏a(糸),坏c(糸)
陶 器	黄釉 片(1)

S-26

土 師 器	碗片
瓦 類	平(平安)

S-27

土 師 器	坏a(糸),小皿a(糸)
瓦 器	碗片
白 磁	碗 V(クシ)?(1),IV1a(1),IV(1),VIII2(1) 皿 VIII1b(1) 片(2)
瓦質土器	鉢(1)
須恵質土器	鉢 東播(1)
陶 器	褐釉 四耳壺V(1)
瓦 類	平片(近世)
そ の 他	鉾澤(1)

S-28

土 師 器	丸坏a片
白 磁	碗 V(1) 片(1)
瓦 類	片(近世)

S-29

土 師 器	丸坏(1),小皿a(2)
-------	--------------

S-31

土 師 器	坏片(中世)
瓦 器	片
陶 器	近代染付碗,近代陶磁
瓦 類	片

S-32

須 恵 器	甕(1)
土 師 器	坏a(糸)(中世),小皿a
青 磁	龍泉 碗 I5a(1) 皿 片?(1)
金属製品	鉄滓(1)
土 製 品	フイゴ(1)
白 磁	碗 IV(2),IV1a(1),V(1),片(2) 皿 VII(1) 水注II(1),壺?(1)
土師質土器	七輪(2)
陶 器	肥前磁器 丸碗(1),皿(1), 鉄釉 鉢(2),甕?(2),摺鉢(1), 唐津(刷毛目) 皿(3)(内底釉ハギ),行平?(1),
石 製 品	砥石(1)

S-33

土 師 器	坏a(ヘラ),小皿a(ヘラ)
白 磁	碗 II(2)

S-34

須 恵 器	坏蓋(1)
土 師 器	坏a(糸),小皿a(糸),小坏a?,小皿b?
青 磁	龍泉 碗 I5b(1) 同安 碗 片(1) 皿 II(1)
白 磁	碗 VIII(1),V1b×VII(1),片(2)
緑釉	片(1)
土師質土器	火舎
陶 器	常滑 甕(1)(S-10と同一か?) 備前

S-34 暗灰土

土 師 器	坏a(糸),小皿a(糸)
青 磁	龍泉 碗 II-4(1)
白 磁	碗 II(1)
青 白 磁	片(1)
土師質土器	火舎(1)(S-34黄灰土と同一)
陶 器	褐釉 壺A'b(1),壺×鉢?B'ab

S-34 黄灰土

土 師 器	坏a(糸),小皿a(糸)
黒色土器B	片(1)
青 磁	龍泉 碗 片(1)
白 磁	碗 IV2(1)
土師質土器	火舎(1)(暗灰土に接合)
陶 器	常滑 甕(2), 褐釉 壺(2), 黄釉 盤(1)

S-36

須 恵 器	甕(1)
土 師 器	丸坏a(ヘラ),坏a(ヘラ),小皿a(ヘラ)
黒色土器B	小皿(1)

S-37

土 師 器	小皿a(糸),坏a(糸),(ヘラ少量混)
白 磁	碗 片(2),IV(1),II?(1) 壺(1),片(1)
陶 器	褐釉 壺(1),
瓦 類	片

S-37 黒灰土

須 恵 器	甕(1)
土 師 器	坏a(糸),小皿a(糸),器台(1),ナベ片(1),
瓦 器	碗(1)
青 磁	龍泉 碗 I3(1)
白 磁	碗 II(1),V4b(1),白IV(2),白VIII(1) 皿 VI(1),VIIa(1) 片(1)
須恵質土器	片(1)
陶 器	鉢IV
瓦 類	平片(縄)

S-37 淡灰土

土 師 器	坏a(糸),小皿a(糸),ナベ(1)
白 磁	碗 片(1) 片(1)
陶 器	鉢VI(1)
瓦 類	

S-38

土 師 器	坏a(糸)
白 磁	皿 片(1)

S-39 黒色土

土 師 器	坏a(糸),小皿a(糸)
-------	--------------

S-41

土 師 器	坏a(糸)
土 製 品	焼土塊(スサ入り)(1)

S-42

土 師 器	坏a(糸),小皿a(糸),小皿a(へラ)少ない,
瓦 器	碗c片
黒色土器A	碗片
青 磁	龍泉 碗 II(1)
白 磁	碗 VIII(1),V4b(1)
	皿 VI1b(1)
	壺片(4)
須恵質土器	鉢(2)
陶 器	常滑 甕?(1), 無釉 片(1)

S-43

須 恵 器	甕
土 師 器	丸坏a,小皿a,(へラは多いが混入品)
青 磁	龍泉 皿 I(1)
陶 器	褐釉 甕(1), 肥前 碗(褐色,透明釉)(1)

S-44

土 師 器	坏a(糸),小皿a(糸),近代土師片
陶 器	近代陶 花瓶
瓦 類	片

S-46

土 師 器	坏a(糸),小皿a(糸),坏c
青 磁	龍泉 碗 II-IV(1)
白 磁	碗 V4b×VI1b
	壺III(1),片(1)
瓦質土器	風炉
須恵質土器	備前甕?(1)
陶 器	常滑 甕(1) 近代陶、磁片、近世染付片(1)
石 製 品	滑石ナベ片

S-47

土 師 器	坏a(糸),小皿a
黒色土器E	碗片

S-48

須 恵 器	坏?(1)
土 師 器	小皿a片
瓦 器	片
白 磁	碗 片(1)
	皿 VI×VII(1)

S-49

土 師 器	坏a(糸),小皿a(糸),(中世)
青 白 磁	皿(1)
陶 器	黄釉 甕B'
瓦 類	平片,丸片

S-51

土 師 器	小皿a(糸)(中世),坏a
青 磁	龍泉 碗 I5b(1),II(1),片(1)
白 磁	碗 V(1),V3a(1)
	壺III?(1),片(1)
陶 器	褐釉 四耳壺XII(1)(中世),A(1), 高取 水さし(1)(アメ釉), 肥前磁器 ソバチヨコF(1),E類(1),皿
瓦 類	片

S-52

陶 器	茶碗,湯飲茶碗,鉢,平鉢,向付,大皿,小皿, 仏飯具(2),コーヒーカップ,酒瓶,割山椒,土管
素 焼	七輪(2),ロウソク立(1),ままごと道具(2)
瓦	丸瓦
ガラス	コップ,皿
金属製品	キセル(1)
そ の 他	「サクラ」ビール瓶

大宰府の土器型式と年代

(森田・横田) 年代観		①大 森田 横田 1978	③南 前川 1980	③森田 1983 大宰府	④森田・横田に 伴う年代の動 く可能性	⑤条 山本 1986 北部九州		
大85SD2340 734「天平6」	700	(98SX2480)		A			I	A
	725	(85・87・90 SD2340)		B	1 2		II	B
	750	45SK1280・1285					III	
	43SE1081	IV						
	825	18SE400		I	1		A	C
850	70SK1800	B	D			VI		
900	35SK678	2	A		E	VII		
927	34SK674		B		F	VIII		
950	65-2SE1558	C	G		IX			
1000	43SE1083	3	A		H	X		
1050	38SK802		B			X I		
1100	46SD1330		C			X II	A B	
1150	45SK1204		D			X III		
大74SD205A 927「延長5」	1200	43SK1085			1		1150 1200	X IV
	1225	33SK 38SK835		2	X V			
	1250	601		3	X VI			
	1300	38SK830		4	X VII			
	1330	45SX1200 新		5 A	X VIII			
大109、111SD3200 1304「嘉元2」 大45SX1200 1330「元徳2」 1350	1350	(33SK624)	II	5 B			X IX	
				6			X X	
大70SD1805 1501「文亀元年」	1500	70SD1805						

①大宰府史跡関係

②南条坊関係

③森川勉「大宰府の出土品③土器、陶磁器」
「仏教芸術」1983

()は後日追加された標式遺構

()は②で前川氏が比定した遺構

*①大74SD205AはⅧとⅨを含む

*②大33SD605はⅩⅥとⅩⅦを含む

*③大45SX1200はⅩⅨとⅩⅩを含む

*④大85SD2340はⅡとⅢを含む。Ⅲは少ない

4. 小結

遺構

調査区の設定が狭い面積に留まったため、性格不明の遺構になってしまったものが有り、大局的な概説はできない。今回報告した大町遺跡で検出された遺構は生活に関連したもので、時期的には平安時代後半の11世紀後半から12世紀、鎌倉時代後半の13世紀後半から14世紀前半、江戸時代後半の18世紀後半の3時期にピークがある。このピークは1章で解説した周辺遺跡の動向に合致している。すなわち条坊制の本格施工と安楽寺の増大化、南北朝時の中世都市太宰府の再編、「宰府まいり」の流行に伴う宿駅街としての発展などがそれぞれのピークの背景にあったと思われる。

遺物

(1) 中世土器について

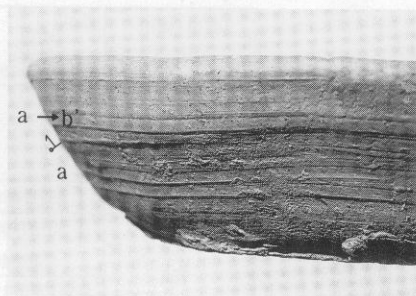
今回の調査で出土した土師器、特に小皿 a、坏 a、丸底坏 a は時期的には X II 期から X X 期（11世紀後半から14世紀中頃）に相当するものと考えられるが、製作手法上の特徴から、以下の様に大きく三つの時期にまとめてみる。SX020に代表される X II・X III 期（A 期とする）、SK005、SK019に代表される X IV・X V 期（B 期とする）、SX010に代表される X VII から X X 期（C 期とする）である。

以下、個条書きでそれぞれの特徴を述べる。

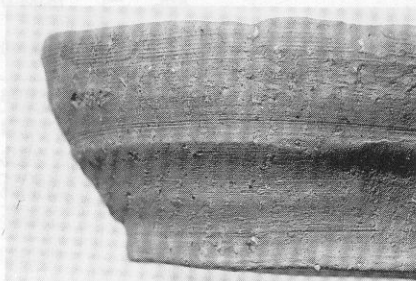
A 期

小皿 a、坏 a とともに、体部はほぼまっすぐ外上方に開き、口縁端部を丸く収めるものがほとんどである。

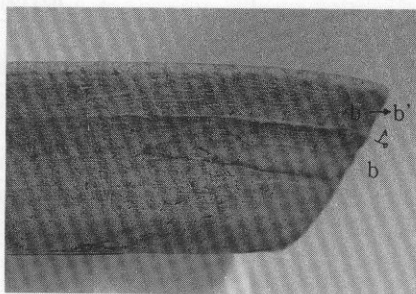
坏 a には底部が膨らみ、丸底坏 a の形態に近いものがやや多い。ただしこの坏 a には内面にミガキ b、外



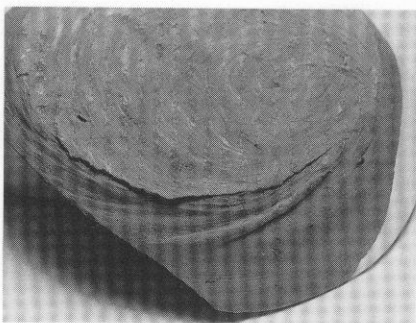
1 ナデ a



2 ナデ b



3 ナデ b'



4 ネジリ様痕跡

面に指頭圧痕はない。

坏 a、丸底坏 aの中には体部外面にナデ a の痕跡が認められるものがある。

B 期

器形上は A 期と比べるとほとんど変化はないが、小皿 a の中に口径 11.0～12.0cm の大型品が少量ある。

坏 a の中には体部外面にナデ a の痕跡を残すものがある。

C 期

小皿 a は体部が直立気味で、口縁端部がつまんだ様に尖ったものが多い。坏 a についても A・B 期のものと比べると、体部が直立気味である。

体部外面にはナデ a の痕跡が残るものはほとんどない。

坏 a の体部外面最下位にネジリ様の痕跡が残るものが比較的に目立つ。以上の点から若干の考察を加えてみる。

三つの時期の特徴をみると、B 期と C 期の間に器形上、調整上の違いがあることに気付く。まず、ナデ a の痕跡を持つ坏 a について見ると、A・B 期ではその数が坏 a の全体数の中で半数近くの割合を占めていたものが、C 期に入るとその痕跡を残すものは皆無となっている。このナデ a の痕跡が認められる土師器は、いずれもナデ a の上からナデ b を加えており（この時、ナデ b を体部最下位から加えるものと中位から加えるものがある）、「成形—ナデ a—ナデ b—底部切り離し」という製作工程順となっている。これは、C 期に入ると「（成形—）ナデ b—底部切り離し」（註 1）という、一工程簡略化された製作工程へと変化している。つまり製作工程上ヘラ状工具によって器面調整をする段階から、ロクロナデ調整だけで製品化する段階への変換が B 期と C 期の間、つまり 13 世紀中頃から 14 世期にあったと推察される。

次に、C 期に見られるネジリ様の痕跡について見ると、ロクロの回転方向が判断可能な資料に限っては、ネジリの方向がすべてロクロの回転方向に一致している。このことから、この痕跡は粘土紐積み上げによってできた粗形から、回転を利用して形を作り上げる際にできた「引き上げ」の痕跡と思われる。（註 2）さらにこれらの資料では、この痕跡を消そうと、体部上半にナデ b による再調整を加えている。この製作工程を推定すると「粘土紐積み上げによる素形作り—ナデ b による器面調整—底部切り離し」となる。ネジリ様の痕跡が認められるのは、ナデ a を行わずにナデ b のみによる再調整の結果、引き上げの痕跡が十分消えなかったのであろう。器形的にもこの時期を境に変化が見られ、製作手法とあわせて製作技術の変化を推察できる。

これら製作技術上の簡略化は、巻き上げ成形—ロクロ水引き成形への移行現象を示す可能性を持つ。これらの問題解決には、製作技術と器面に残る調整痕との相関性について、実験による検証が必要である。また、こうした特徴は他の遺跡出土の土師器にも、普遍化できるか否か

検証を要す。今回は当遺跡で押えられた土師器の特徴（調整痕の時間的相異）と、製作技術の変化が各地で援用しうるかを今後の課題としておきたい。（註3）

註1 ここで成形に（ ）を付けているのは、C期に残るナデbの痕跡が、ロクロ水引き成形の結果、あるいはロクロナデ調整の結果ついたものかが、現段階では不明確なためである。C期出土の坏a、小皿aともすべてに内底のナデ調整が施されており、すべてが水引き成形のみによるものとは考え難い。

2 ネジリ様の痕跡の生成原因については観察者間でも異論がある。

3 今回完形品の個体数が充分でないため詳しく検討できなかったが、前述のC期の坏の中でSX010の坏に、数点口縁部までナデbが連続していると思われるものが確認され（第22図151・152・156・158）、これが口縁部の再調整を省略、或いは省略を可能にした条件ができた結果なのかは、今後の課題である。

（2）近世土器について

大町遺跡1 SK008、1 SK032と1 SD003から出土した遺物群は、同一規格の瓦など共通遺物を含み、近い時期に位置づけできるものである。肥前系の磁器には鉢の文様に「蛸唐草」が見られ、碗は「端反り」や「広東碗」を含まず、18世紀後半の時期が想定できる。陶器の構成は硬質のものに碗、坏、茶瓶、鉢、播鉢があり、軟質のものには燈火具に関連する壺、油指しなどがある。これら陶器の他に瓦質土器を含む素焼系統の深鉢、七輪などがある。これらの遺物群と近い土器群が福岡市藤崎A遺跡第19次調査 SK01（註1）で出土しているが、こちらは量も器種も多いが、陶器、素焼系土器の構成は似通っている。また、博多遺跡第30次 SK19は19世紀前半から中頃（いわゆる幕末期）の遺物群を持つと報告されているが（註2）、器種の構成の概様はあまり変化していないようである。

江戸時代後半期の博多周辺の生活跡での土器相は、他国産（主に肥前産）の磁器と自国産主体の硬質陶器、軟質陶器（生地が素焼質で鉛などの低火度溶融性の釉がかかるもの）と素焼系（瓦質を含む）土器で構成される。硬軟質陶器の意匠は、京都や大阪といった「上方」で出土する同時期の物と近似もしくは同一のものが多く、過去、博多などで出土したものが関西系遺物として報告されていたが、近年の小石原焼での当該期の窯の調査や（註3）、文献の再検討によって福岡藩主導のもとでこれら製品が自国で生産されていたことがわかってきた。（註4）この現象はこの時期に書かれた「広益国産考」（1844年）巻6の「先づ我住める国に出来ずして、他国より買入その代金を出す事をふせぐやうするを第一とし、我国に多く産じて、他国より金銀を取り入れるやうにする事ならんか。」の言に見られるところに指向性の原点があり、江戸後半期に起きた都市部を中心とした凡日本的な陶磁器多量消費の流行に対し、筑前では藩主導の下に既存の生産地でのこいれと新たな窯場を起こすことによって、磁器では肥前物の、

陶器では信楽焼などの上方新商品のコピーを生産し、これに答えようとした。このような動向は民間にも見られ、特に素焼人形、現在に続く博多人形の生産開始も初期段階では京都伏見産のもののコピーに始まる。(註5) 隣国筑後の久留米藩でも慶応元年に現在の久留米市東中野の東野亭にて陶器製造をおこない山水土瓶や行平を生産している。(註6)

陶磁器にしろ瓦にしろ、近世のこの時期に各地方の中小規模窯業によって作りだされた製品の凡日本的な意匠の均一性は、貨幣経済の急進展と港湾、海路の整備による回船業者間の量、スピード競争による一商品に対する市場の急速拡大、その結果起こる商品の絶対量の不足や消費側の生活様式の強い「江戸・上方」指向によって現れたもので、独立採算性をとらざるを得なかった幕藩体制下での、各藩でおこなわれた陶器生産をはじめとする殖産興業には、地方事情や採算を無視した投資事業的な性格が強く、維新後に継続しなかったものも多い。大正、昭和初期に起こった柳宗悦を中心とする民芸運動で取り上げられた「民陶」の多くも、こうした時代に出現し明治期に急速に変容、衰退していた大衆向けの陶器生産地であった。(註7)

註

- 1 「藤崎遺跡7」1991年 福岡市教育委員会
- 2 「博多9」1987年 福岡市教育委員会
- 3 「中野上の原古窯跡」1988 小石原村教育委員会
- 4 本誌「筑前野間焼について」参照
- 5 「博多出土の素焼人形 近世末の博多に於ける一手工業種の研究1」1988年 (「九州考古学」第62号) 山村信榮
- 6 「筑後陶器考」 1978年 鶴久二郎
「田中幸夫寄贈品目録」1982年 九州歴史資料館
- 7 「現在の日本民窯」1937年 柳宗悦 編ほか

筑前野間焼について

筑前野間焼は福岡県福岡市南区皿山2丁目にあり、現在では岡本光山氏経営の岡本窯1軒が操業を続けている。ここでは採集された野間焼の紹介を含め江戸時代後半期に起きた一手工業としての歴史的推移に触れてみたい。(註1)

文献資料

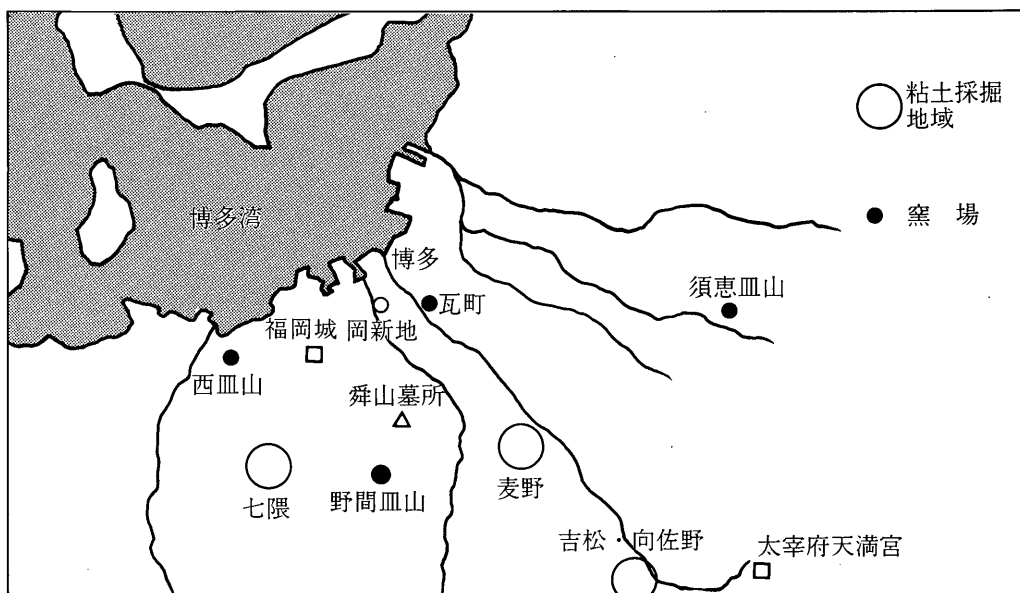
(1)「福岡藩民政誌略」高取焼及西皿山焼、博多素焼物の起源(註2)

「瓦町焼は瓦缶の類にて、神前に献る土まりを始め、雅人の用うる風爐、連甕及び日用の火爐糞缶等なり。中にもヒチリンと称するは、聖福寺子院虚白院の智首座が思得しより、始めて製せしものなり。今は戸毎に日々煮爰の用とする。他邦にも発売する事少なからず、此瓦缸の起源をしるせし書を見ざれども、瓦工の播磨より黒田氏に従い来し者を、博多の南辺に居らしめ、慶長六年築城の日、瓦を作らしめられしより、その居所を瓦町と名づく。その製瓦より他器をも発明せしと聞こえて、宗七と称せし良工も、播磨より来りし瓦工にて、正木氏なり。今は瓦町に隣れる祇園町、上新川端町にも、同製の瓦缸を成す。よりておもへば、二百年前後に起こりしならん。白焼と称するは、瓦町の(ママ)と称する者、文政、天保の頃、野間、高宮の白土を以て、始めて製す。又同地にて製する土偶人は文政の頃、肥後熊吉というもの来たりて、著色までも教えしに起こる。

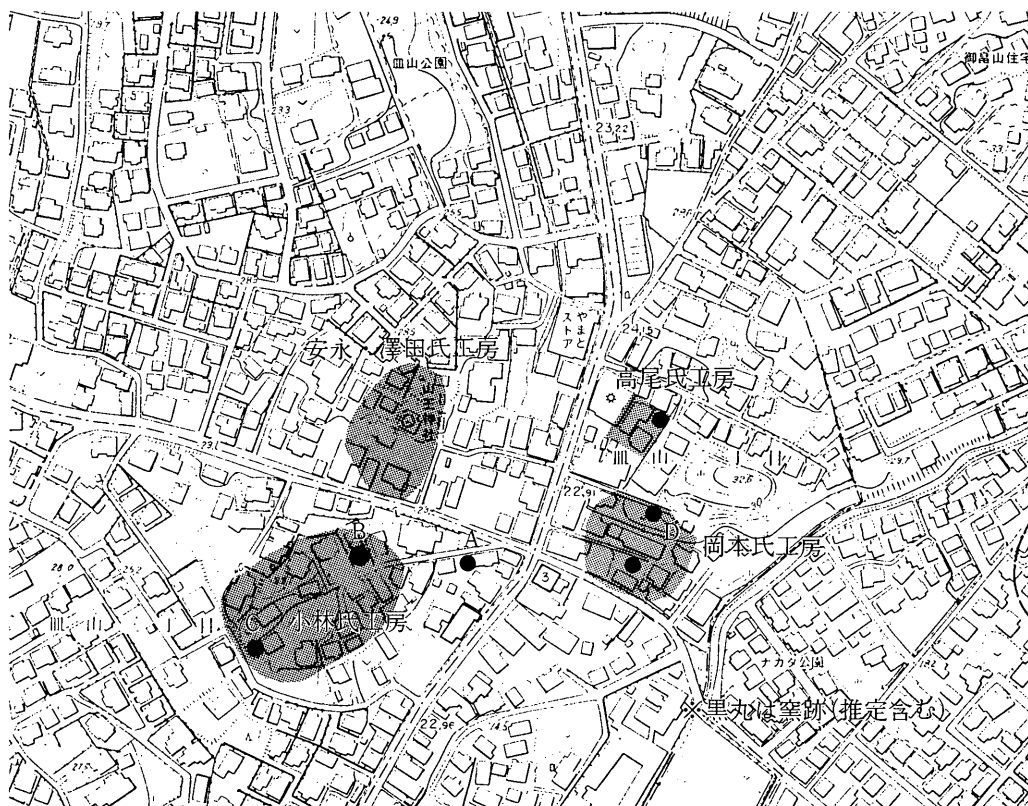
小石原焼と称するは、(ママ)人天和中上座郡小石原村の支邑中野に來り、肥前の瓷器に倣ひて製造す。故に中野焼共称す。貞享中は皿山奉行を設て、藩用とし、頗る盛なりしに、享保の末より、改めて水瓶、酒徳利等を製す。工なれども僻遠の運送便ならざる地なれば、其近村の民に便りするのみ。寛政年は陶工八戸、窯3区ありしと聞ゆ。

西皿山焼は享保三年小石原に居し陶工数人を、早良郡麓原村に移らしめられる。元の如く民用の播盆、水缶、井垣、夜壺の類を製す。寛政中は陶人二十七戸、窯を三処に設けたり。藩より陶戸に本錢を貸して、その成せし器を収む。奉行を置きて、その事業を掌しめ、士庶の乞う者には、廉価を以てうりいだしむ。有司その利至微なるを以て、廃せんと議せしかども、日用闕べからざる器なるに、国製なくば他邦の高価なるを求めずば叶ふべからずして、諸人の憂とならんとて、その言を用いずして、今に至れり。(中略)

野間焼は那珂郡野間村の字柳河内にて製する日用下品の茶瓶等也。文政中国産会所を置かれし時、博多瓦町に陶窯を築き、須恵村の陶人を招き、野間の土を採り、麓品の瓷器を製せしめけれ共、幾程もなく廃しければ、国主の命にて、安政三年六月より、別に柳河内にて製することとなれり。」



第26図 江戸～明治の筑前窯業関連跡位置図



第27図 福岡市野間焼工房、窯位置図(1/4,000)

(2)「福岡市史」第1巻明治編 第四編産業第二章工業（註3）

「物名 陶器（土瓶、茶碗、ユキヒラ、井鉢、瓶、搦盆、井樋、植木鉢、素焼類は七輪、火鉢、火掻、炮轆等なり。）

産地名 那珂郡博多上新川端町、瓦町、社家町、下祇園町、同郡野間村の内柳河内、早原郡麓原村の内西皿山、粕屋郡須恵村等にて焼出す。

産額数量 明治十一年の産額は博多素焼七輪、火鉢、火掻、土瓶、炮轆の類七万八千七百十個、その価二千八百三十三円五十六銭とす。野間焼は土瓶、ユキヒラ、茶碗の類四万四千個にしてその価一千二百十円なり。須恵焼は土瓶、茶碗、井鉢の類十八万個、その価二千四百円なり。西皿山は瓶、搦盆、井樋、植木鉢の類二万五千個にして、その価二千円なり。総数三十二万七千七百十個にして、総価額金八千四百四十三円五十六銭なり。

性質功用 博多の素焼七輪、火鉢、土瓶、西皿山の瓶、搦鉢等は粗品なりと雖も、人家日用のものにてその需要頗る多し。野間焼は京焼に擬せしものなり。

産地面積広 陶器製那珂郡博多十七戸、窯所一所に付凡そ十坪、同郡柳河内三戸、窯所二所共に横三間縦八十五間、粕屋郡須恵村窯所三百九十坪、早良郡西皿山窯所三所、内一所は九畝五歩、一所は一反二十七歩、一所は六畝歩なり。

自国消費 野間焼、須恵焼は悉く自国消費とす。博多の陶器生産額の二部、西皿山焼産額の八分は自国消費と見做す可きなり。

内国輸出 博多の陶器は大阪、馬関、越前、越中、越後、阿波、安芸、長門、豊前、豊後、筑後、肥前、長崎、唐津、肥後、壱岐、対馬等の諸国へ輸出す。その数は産額の八分と見做す可きなり。早良郡西皿山の陶器は馬関、肥前長崎等へ輸出す。その数は産額の二分とす。概して八分と見做すときはその価額六千七百五十円余なり。

外国輸出 なし。

費用賃金標準 費用賃金区々なるを以て詳かにせず。

事業人当標準 事業人当同右

沿革景況 早良郡西皿山は享保三年旧藩主の命にて設置す。明治の頃梢や衰微に及びしをまた、藩命を以て興起し、爾後格別盛大に到らざれども、連続して現今も猶焼出す。粕屋郡須恵焼は宝暦年中設置逐年繁盛せしが、その後梢や衰微すれども現今の景況尚依然たり。又博多瓦町、祇園町は近世陶器製数戸となり、即今の景況最も隆盛なりとす。那珂郡野間焼は安政三年は又旧藩主の命にて興起するなり。現今の景況資金に乏しくして盛なるに至らず。野間焼の如き京焼に類して需要広し。蓋し資金を入れて拡張せば、将来盛大に至るべきと想像するなり。

(3)「市窯業研究所」（昭和4（1929）年3月27日 福岡日々新聞の記事）（註4）

「堅粕にあって、本市の持産品である高取焼、野間焼および博多人形を始め、各種窯業の改善発達を図る目的を以て、昭和四年三月設立を見た。同所は窯業に関し各種原料の品質試験、

輸出向硬質人形の製作試験およびタイル製作試験等を行う外、諸種の講習会又は講話会を催し、これら特産品の品質向上のため、不断の研究を続け、指導奨励に努めた。(中略) 近時欧米諸国に新販路を求めている博多人形を始め、駅売茶瓶を一手に製造する野間皿山焼並びに封建時代より有名なる高取焼をそれぞれ改善発達せしめて、現在の生産額総計約六十万円を更に大いに増加すべく、福岡市は市立窯業研究所を市内中の島に建設し、昨二十六日午後一時前記三種の生産団体肝入りで、火入式を兼ね研究所落成式を挙行し、市長、産業課長、市参事会員等列席した。

因に同研究所昭和四年度経費予算は九千八百八十八円である。」

(4) 「野間焼」(註5)

「那珂郡野間村の陶器は、安政三年、藩庁より京都の陶工佐々木與三を招きて、陶業を起こすに創まる。明治十二年、與三の帰京に際し、同村澤田舜山が其工場を購ひ、日用雑器を製して、今に継続す。原土を同村柳河内に取り、釉薬は天草深江、其他五島のもの、及び本村近傍多尾村(註6)の地より買取すといふ。(明治十八年の調査による、)。

(イ) なほ参照するに、野間焼は安政三年六月、当藩主の命により、佐々木與三、横田與七の兩人が那珂郡野間村の字柳河内に於て創製せり。京焼の類にして、土瓶、急須、茶碗等を製出す。近年来、其需要頗る多しという。

(ロ) 当窯は、安政四年、黒田家の御用にて開きしが、廃藩の際に止めり。かくて其時、従事せる京工佐々木與七の兩人にて、之を継続したり。澤田舜山も栗田陶工にて、先に当国須恵村の製磁業のため、当藩主に招かれしが、廃藩後は須恵焼を自営せり。然るに明治十年、右佐々木與三兵衛の帰京に際し、其跡を引受て之に入れたり。(年代及び人名に小差を見るも、姑く略す。)

(5) 「行平」(註7)

「窯は福岡県筑前国高宮野間皿山。福岡や博多の裏通りの唐津屋によると、きっとこの行平を棚の上に見いだすであろう。今も盛んに作る。販路はもとより北九州一帯で熊本あたりでも見かける。この窯のことは本文に記載するのを洩らしたから、ここで短く語らう。福岡市内だが謂は郊外である。静かな陶郷で、仕事は三箇所に分れる。山の麓の一軒が石炭窯で汽車土瓶を焼くが、奥の二軒が行平だとか土瓶だとかの雑器を焼く。土瓶は二種類あって、一つは明らかに信楽系統の山水絵の土瓶で、一つは、「いっちゃん描き」である。郷土色の濃い雑器である。ここに掲げた「行平」は後者の手法で、蓋にも胴にも横に黒の線を入れ、縦に白のいっちゃんを引く。もともと行平は土鍋であるが、この野間の皿山のものは最も特色あるものとして省みられていい。把手の作り工合も他では見かけない。寸法丈四寸八分、胴布五寸。ごく小型のも作る。」

(6) 澤田舜山墓碑銘文(註8)

「翁姓澤田称舜山若州野多江之人也及成童就京師水剂家中村某陶工安田某極両道之蘊奥有出藍之譽矣會鍋島公求水剂家中村師鷹翁在七年有大功又應」（以上左面）

「其末家氏之聘傳其両道先是以有黒田公之聘來於筑前則全両公之意黒田公以五口米給翁辞而不受焉如肥前伊勢屋丁筑前須恵陶場係翁之創業云後住野間垂休光於両道実可謂偉也矣是以藩賞不可勝数明治二十七年九月三十日卒年七十七諡秋月院」（以上裏面）

「釋善教居士銘日 道傳肥筑 釉窯是全 善哉称舜 功垂萬年 浦田重道撰并言」（以上右側面）

（7）「野間焼 のまやき」（註9）

福岡市南区皿山の焼き物。1856年（安政3）福岡藩が京都の陶工佐々木与三、横田与七を招き、那珂郡野間村の字柳河内に製陶させたのがはじまりといわれ、製品は京焼の類で土瓶、急須茶碗などを産したという。別説には1861年（文久元）須恵皿山役所の管理のもとに野間の人安永与十を棟梁として八幡境内の山ろくに開窯したといわれ、製品は須恵焼と同様の磁器を産したという。ようやく発展しかけたころ、維新の変革にあい、1870年（明治3）廃窯となった。1860年（万延元）京都から須恵にきて製陶に従し名工といわれた沢田舜山は1875年（明治8）野間に移住し野間焼の復興につとめ精良品を産した。しかし努力も空しく廃窯のやむなきに至り、そこで陶器窯に改めて京都の門人小川平七郎に行平、茶瓶、土鍋、土釜、植木鉢などを製作させてその継続を図った。太平洋戦争直後まで数軒あった皿山も現在は岡本光山の一軒をのこすだけである。

（8）「従二位黒田長博公伝」（註10）

「公は追々藩士を長崎に派遣し、蘭人に就て、諸種の工事製造等の術を伝習せしめ、弘化年間博多中島に精練所を設置し、反射炉を設けて、磁物の試験、及び硝子製造、青貝塗、綿布、染粉等の工業を 始し、又た京都より陶器師を招き、須恵、野間に於て陶器を製造せしめられしに、肥前の伊万里焼にも遜せぬ良品を製出せり。」

（9）「福岡県地理全誌」野間村（註11）

「野間村 （中略）皿山。七戸。安政年中ヨリ此所ニテ瓷器ヲ製ス。故ニ名ク。佐々木與三ナル者良工ナリ。土ハ当村ノ内柳河内ヨリ出ツ。今窯二所ニアリ。（中略）戸数六十二戸（中略）職分 工男五人、女六人（中略） 物産（中略）土瓶壺万式千八百 佐々木與三 横田與七製 此代金三百貳拾円」

註1、「博多出土の素焼人形 近世末の博多に於ける一手工業種の研究1」1988年（九州考古学第62号）にて同様の試みを博多人形についてもおこなっている。

2、「福岡藩民政誌略」明治20（1887）年長野誠（「福岡県史資料」第1号に収容）

3、「福岡市史」第郡卷明治編 昭和34（1959）年 福岡市役所

- 4、「福岡市史」第4巻昭和前編（下）昭和41（1966）年 福岡市役所に収容
- 5、「日本近世黨業史」1921年（「日本黨業史総説」1991年柏書房 第5巻 収容）
- 6、長尾村の誤りか。
- 7、「現在の日本民黨」昭和十七（1932）年 柳 宗悦編 昭和書房
- 8、福岡市南区野間二丁目13番地の集團墓地の中にある。1992年2月山村調。岡本光山氏によると同業者によって建てられたもので、顕彰碑的性格のあるものという。
- 9、「福岡県百科辞典」1982年 西日本新聞社
- 10、「従二位黒田溥公伝（上）」明治29年 江島茂逸（「黒田家譜」第6巻上 1983年文献出版に収容）
- 11、「福岡県地理全誌」巻119那珂郡之6 明治15年

考古資料

現在、野間皿山で窯業関連の遺物が散布しているのは皿山2丁目と3丁目にまたがる4つの地点、第27図中のA、B、C、Dで確認され、中でもAとB、Cには窯体の残骸が見られ、Dは現在も操業中である。

(1) A地点の遺物(第33図1・2)

A地点は皿山3丁目1番地にあり現在駐車場として利用されている。後述のB地点のある丘の裾部にある。

遺物はレンガ様の窯体の残骸に混じって行平の把手、灯明皿、電力用高圧碍子が見られるが、概して破片が小さい。碍子には企業のロゴらしい菱形のマーク、「JAPAN」、「250V」など青色でプリントされている。この碍子がここで生産されたものか否かは不明。

(2) B地点の遺物(第28図、第29図、第32図1・2、第34図1・2・3)

B地点はA地点より南西に30メートルほどいった丘の中腹あたりで北側に小さな祠がある。1991年夏頃から家屋の建て替えに伴って多くの遺物が出土している。聞き取り調査によると戦後しばらくここで小林姓の窯元があったという。

遺物の種類は把手の型(1、2)、燈火具(4、5)、染め付け磁器の小皿(6)、陶器の蓋(8、9、10)、行平(11)、把手、窯道具のサヤ(12)、用途不明のもの(13)などがある。第28図3の把手は太宰府市水城跡第18次調査で出土したもので「小林製」の浮き彫りがあり、参考品として掲げた。

把手の型は素焼製で、2枚合わせのもので、この型から打ち出される把手の長さは6.5cmほど(焼成後は1～2割小さくなると思われる)。一つには「豆」の字が浮き彫りされる。把手の先端部が開いており、芯棒を入れたものか型抜きの際の篋を当てるための隙間であろうと思われる。製品の先端も穴が開いているものが多い。

燈火具はワイングラス型で硬質陶器(第28図4)と素焼状態(第28図5、第34図1・2)の二者がある。後者は未製品か。

染め付け磁器の小皿は、山水風の図柄を持ち3箇所以上にハリの目跡がある。搬入品か現地産かは不明。

蓋の類はつまみが乳頭状、環状、付け紐状の3タイプが見られる。茶瓶(第28図7・9、うち7は素焼のまま)と行平(8・10)の2種に分けられるのであろう。釉は全体に薄く青味がかった透明釉が、縞、斑点状に茶色味を帯びた黒色の薬が施され、その上から放射状に白色土を用いた「イッチン描き」が施されている。

行平も装飾については蓋と同じで、口縁端部の内側だけ釉がふき取られている。胴部内側にはロクロ目が残ったままである。復元口径は14.3cm。伝世品を見ると口縁下に穴を穿ち注ぎ口

が取付き、口と90度の位置に把手が取り付け。底はゆるやかな平底で釉はかからない。

窯道具には大型のサヤ（第29図12）と小型の円環状のもの（第34図3）、用途不明の延べ板状のもの（第29図13）があり、大型のサヤは複数出土している。このサヤは楕円の箱型で長さ30cm、幅18cm、高さ15cmほどの法量を持ち、口縁に2箇所半円形の削り込みを施す。体部外面に口の字のヘラ描きが入る。胎土はごく目の荒い土が用いられる。

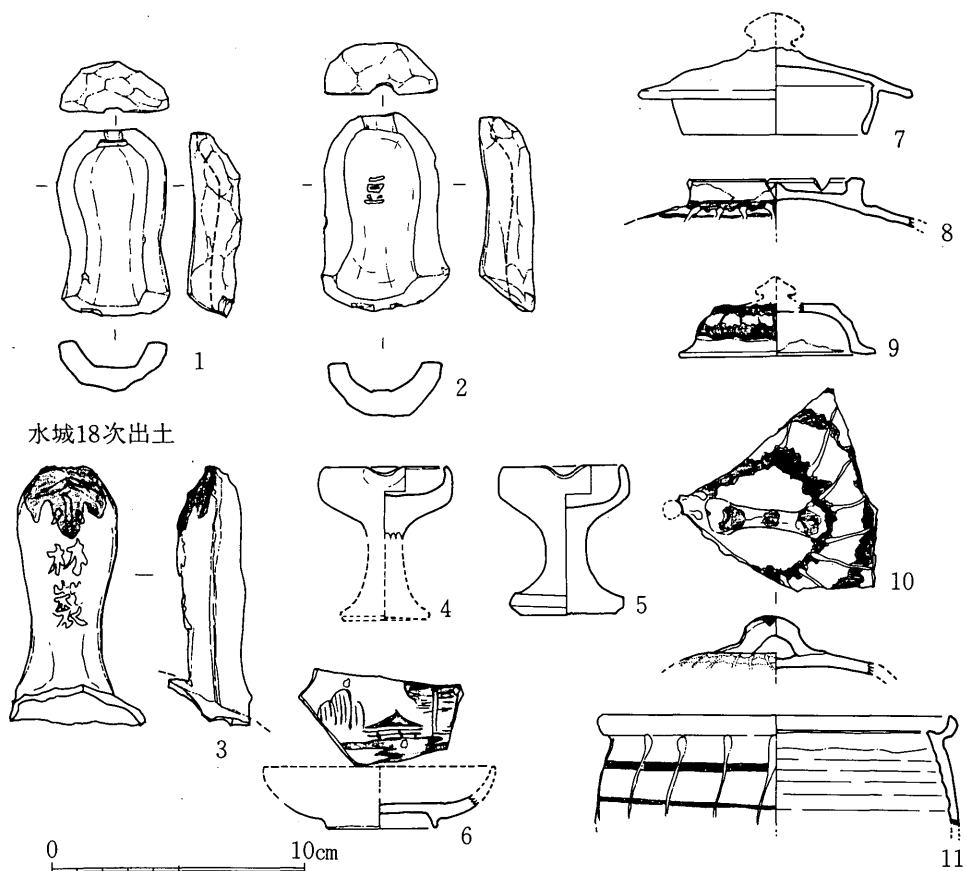
（3）C地点の遺物

C地点は皿山3丁目2番地、B地点のさらに南西の丘の反対斜面側にあり（第27・35図）、現在もレンガで組まれた窯体の一部が残っている。

出土遺物は細片ばかりで図化していないが、素焼製品がほとんどで人形も含まれている。

（4）西花畑公民館収蔵品（第35図）

皿山1丁目山王神社の境内にある公民館には主に、岡本家で製作された大正期以降の製品が収蔵されている。解説には伊賀土瓶（2種）、鉄道茶瓶（大正2年以降）、ミニチアままごと用台所道具、白焼（土師器）のお神酒指しなどがある。中でも鉄道茶瓶は徳利形を呈すもので、



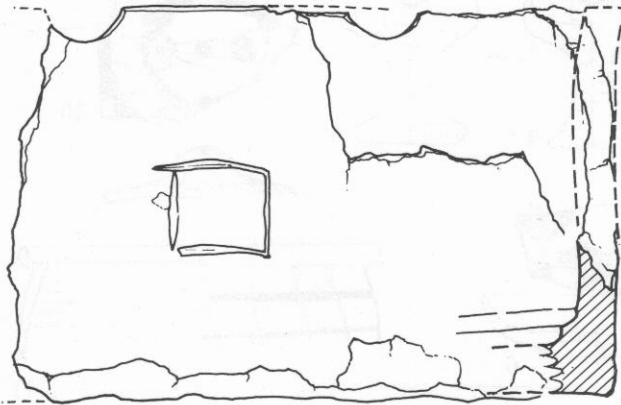
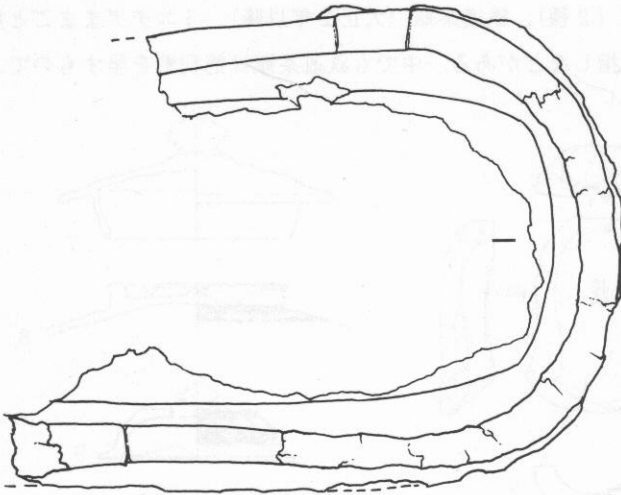
第28図 福岡市野間皿山B地点出土遺物実測図(1/3)



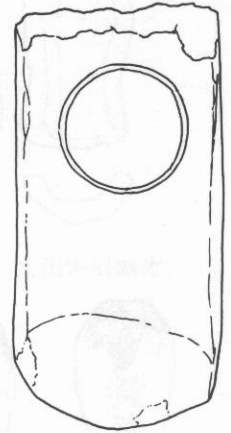
12



13

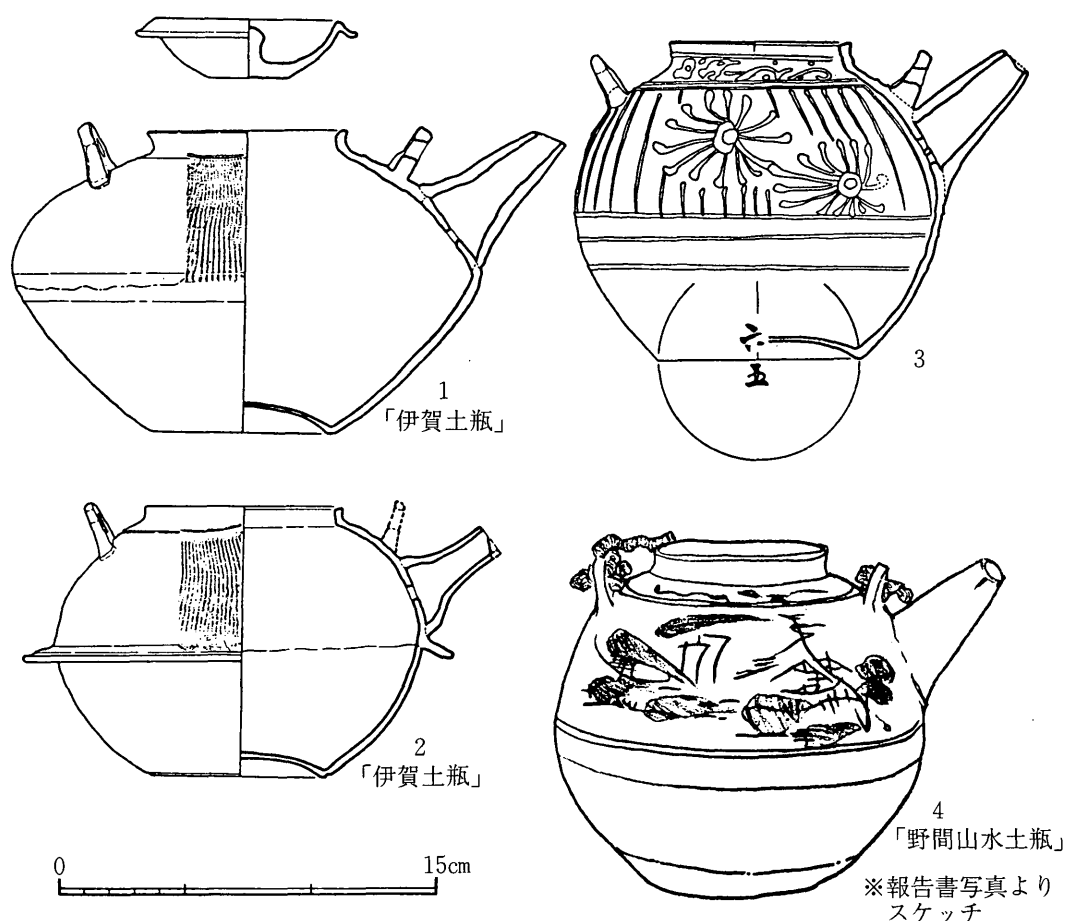


12



13

第29図 福岡市野間皿山B地点窯道具実測図(1/3)



第30図 春日市門田遺跡近世近代墓地出土の野間焼土瓶類

同種のものの中でも古期のものであろう。

(5) 春日市門田遺跡集団墓出土遺物 (第30図)

山陽新幹線の車両基地建設に伴って福岡県教育委員会によって調査された明治期の墳墓を含む「近世墓」地で、出土した野間焼製品と思われる物は7個体、4種類の土瓶である。これらは後産埋納容器として埋められたと解釈されている。

第30図1は算盤玉形の胴部の上半に跳びカンナが入る「伊賀土瓶」と呼ばれている土瓶、2は胴部中央にツバが付くもの、3は「イチチン描き」の圈線と花文様を入れるもの。4は黒、茶、緑で船、小屋、松などを描く「野間山水」と呼ばれる土瓶である。

いずれも遺跡の状況から明治時代のものである可能性が高い。

「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書」第9集 1978年 福岡県教育委員会に収容。

資料の総括

野間焼の草創については文献資料の中で異同が見られ、当地野間で操業する以前に文政もし

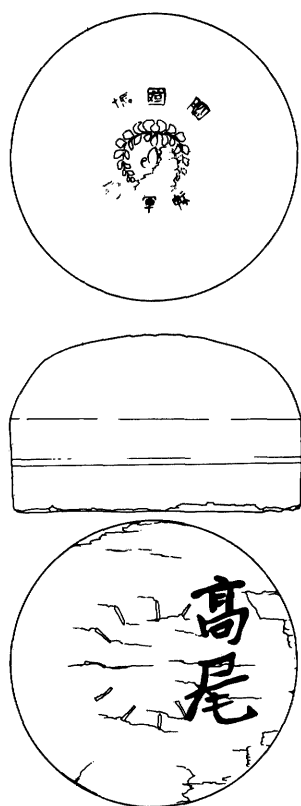
くは弘化年中に、福岡藩が博多中嶋町（岡新地）に設置した国産会所（精練所）と共に新たに博多瓦町に陶窯を築き、須恵焼の工人を招請して、野間の土を用いて肥前写しの手物の磁器を生産した（文献1．8）。その後の安政3年に野間に窯を移し、京都の陶工佐々木與三、横田與七が藩によって招請され、京焼に似た土瓶、急須、茶碗などの日用雑器を主体的に生産した（文献1．4．7）とする説。まったくの別説として文久元年に須恵皿山役所管理の元、地元の安永与十が文久元年に磁器を生産したことが挙げられる（文献9）。ともかく野間焼の創業は福岡藩が幕末におこなった殖産興業政策に基づくもので、磁気を生産していた須恵焼を母体とし、一方で京の陶工を招請することで京焼の陶器生産技術（生産そのもの）を移入した。幕末の博多での京焼の土瓶、行平などの陶器の需要は大きく、「博多店運上帳」（註1）によれば博多綱場町に京焼を専らに扱う小売店まであった。明治時代になると複数の窯場が開かれ生産も拡大した。この時期の製品が春日市門田遺跡の遺物であろう（考古資料5）。

また、大町遺跡表土出土の土師器に見られるように、博多瓦町でおこなわれていた素焼物の生産も取り込んでいた。

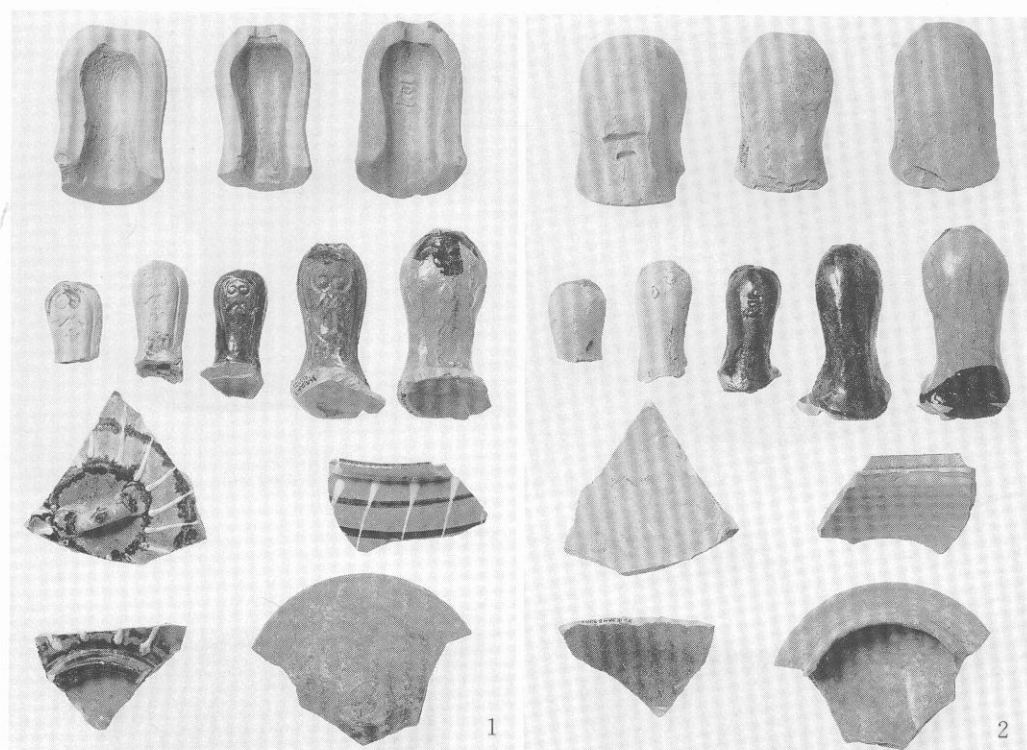
このことは都市消費のための窯業生産を都市の中で賄うという中、近世的な生産体制から脱する方向で野間焼の窯場が設定されたことを示唆している。（博多瓦町の瓦生産はすでに江戸中期頃から近郊の粕屋、今宿、麓原、宰府などに拡散しつつあった。註2）

大正から昭和初期にかけては駅売茶瓶が多く生産され（文献3．5）、その製品が西花畑公民館に残されている（考古資料4及び第35図）。野間皿山の鉄道茶瓶は門司鉄道管理局管内を一手に賄っていたといわれ、再度回収して焼き直して再出荷もしていた（岡本氏談）。なお、鉄道茶瓶は西新藤崎窯でも生産されていたようである（註3）。この時期の皿山は40軒近くが陶器生産に従事していたという（岡本氏談）。昭和8（1933）年には福岡、博多に通じる幅員8mほどの道路が敷設され、製品搬出が飛躍的に楽になった。（註4）また、地元行政（福岡市）が胎土や釉薬の研究、新商品の開発をおこなう窯業研究所を造り、博多人形や野間、高取焼の保護育成に乗り出したが、世界大戦に向け企業統制、物資統制が進む中十分な成果を出さぬまま消滅してしまう（文献3）。

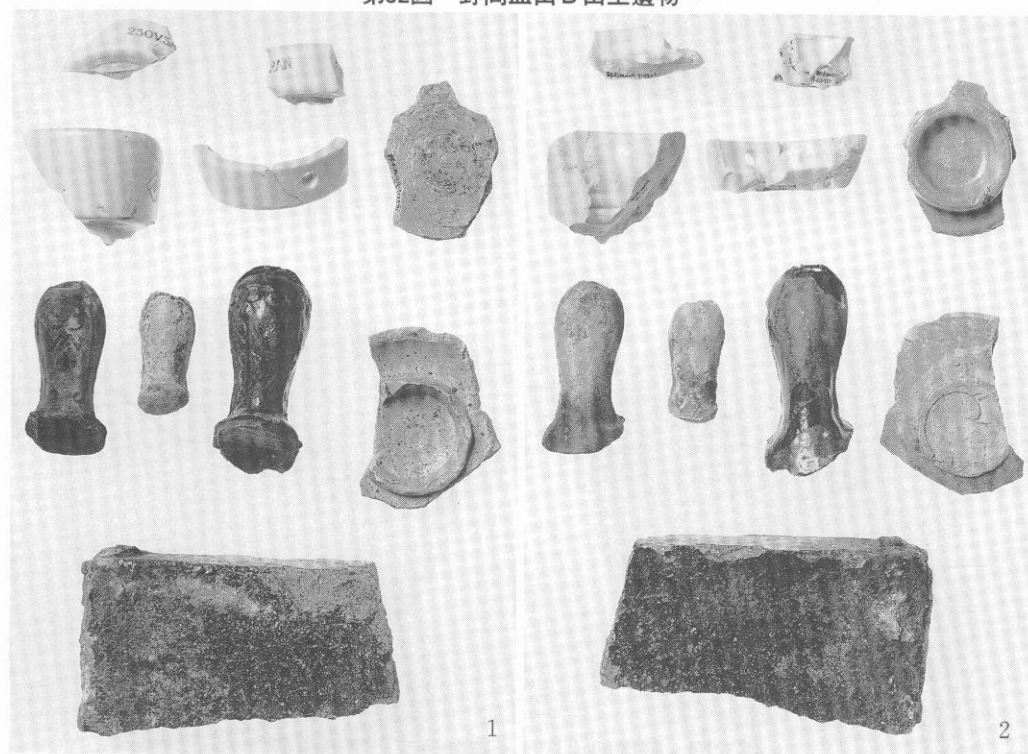
戦後の野間焼は野間焼を伝承する岡本光男氏の話によれば、復興に合わせて徐々に生産量を



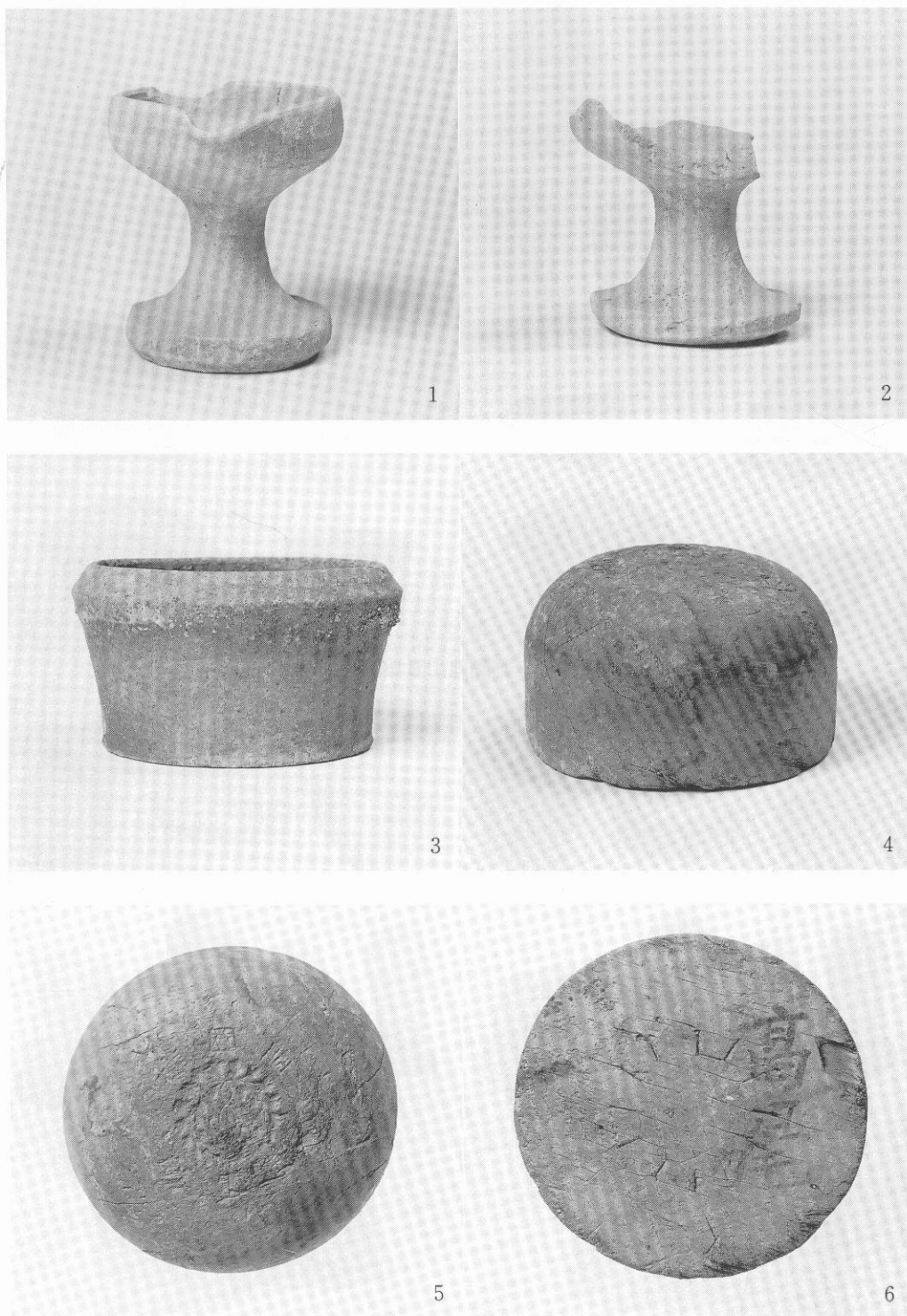
第31図 土師器皿造り
木製内型実測図(1/3)



第32図 野間皿山B出土遺物



第33図 野間皿山A出土遺物



第34図 野間皿山B出土遺物及び土師器内型

回復していったが、農地開放で職業を変える者も多く、七輪の消失、ガスコンロ、ポリ製品の普及という生活様式の変化に伴い、野間焼の主力商品である土瓶や行平、駅売土瓶はシェアを失っていった。その頃、昭和20年代後半頃から、分業化し生産を拡大しつつあった博多人形の工房（生地屋を主体とする）が新たに進出し、本業の陶器生産も民芸運動の復興によって生活雑貨としての民陶が見直され、観光客が窯元を訪れるようになったが、生活様式の欧米化は更に進み、周辺も公共道路の整備に伴い徐々に宅地化が進行し原土採取もままならぬ状況にまで追い込まれ（現在は筑豊田川の土を使用）、沢田（陶器、磁器＝戦前に高压電気用碍子生産、素焼）、小林、安永、木下（以上陶器）、高尾（素焼）家などに5、6箇所あった登り窯、空吹き窯も取り壊され、現在は岡本氏1軒になったという。

現在、岡本氏の工房には土瓶を形成するためのロクロと石膏の外・内型や土師器の木彫りの内型（第31図註5）などが残されているが、ほとんど使用していないという。

江戸時代後半の土器消費様式の変化によって成立した一手工業種が、その後の消費様式の変化に伴って商品を開発し、引き続いて生産を継続してゆくことは並大抵のことではない。野間焼の歴史のなかには磁器から京焼や素焼物、京焼土瓶から鉄道茶瓶、博多人形と、次世代の主力商品を産み、また、受け入れる土壌があった。今は後継者も無く、産業そのものがなくなりつつある。

（山村信榮）

註1 「博多店運上帳」（「九州経済史論集」1958年福岡商工会議所）

2 「筑前国続風土記付録」土産考、「長政公御入国より二百年家由緒記」参照。

3 「藤崎遺跡Ⅴ」1990福岡市教育委員会藤崎遺跡第14次調査包含層出土遺物P 69参照。

4 福岡市南区皿山2丁目1に道路施工時の顕彰碑が残っている。

5 博多で和菓子のラクガンの型などを彫っていた職人が、土師皿の内型を造っていたという（岡本氏談）。



博多仲間町の下沢商店（明治初期）
野間の道路敷設にも出資している。



▲野間皿山 A、B 地点



▲岡本光山工房 (D 地点)



▲野間皿山 C 地点



▲上工房内



▲西花畑公民館収蔵資料(中央 2 つが
鉄道茶瓶)



▲伊賀土瓶と石コウの「型」



◀ 澤田舜山墓碑

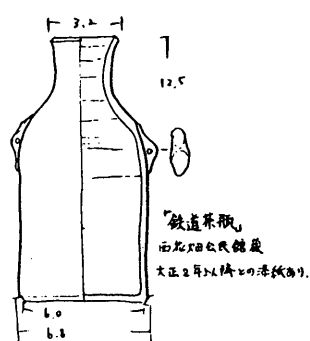


▶ ロクロ台と「内型」「外型」



第35図 福岡市野間皿山関連写真

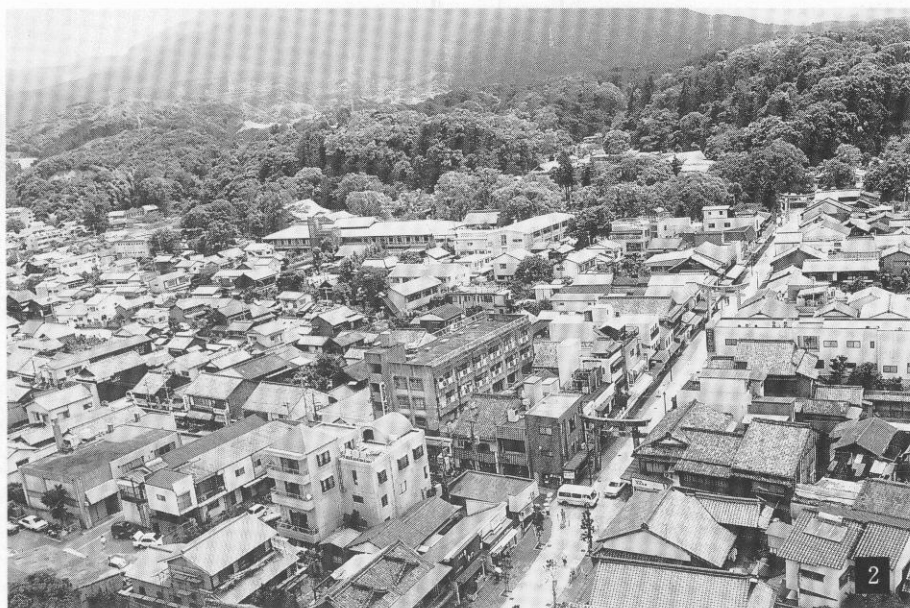
図 版
(plate)



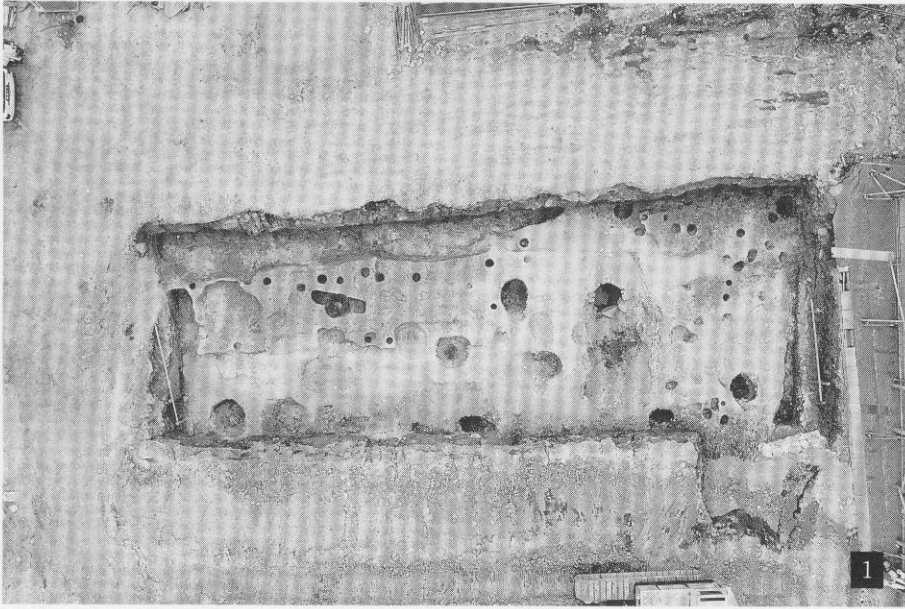
Pla 1



西鉄太宰府駅より南を望む



駅上空より太宰府天満宮を望む

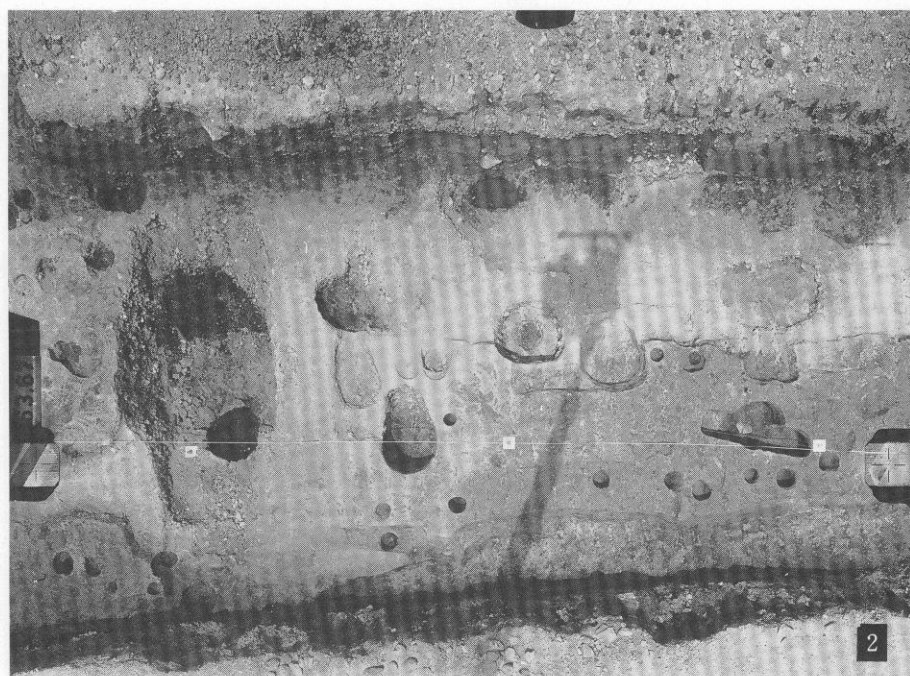
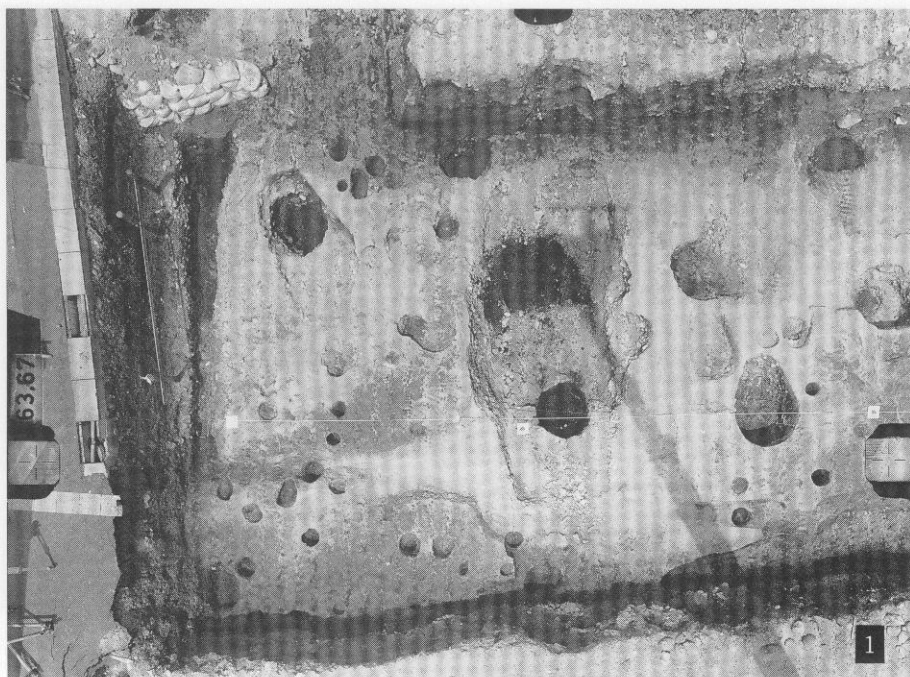


大町遺跡調査区全体図



大町遺跡調査区東側壁面土層図

Pla 3

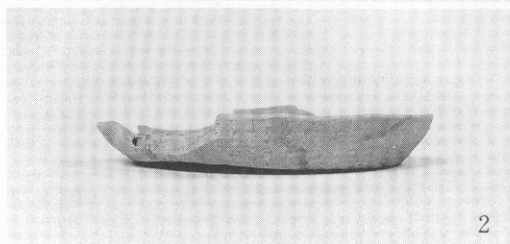




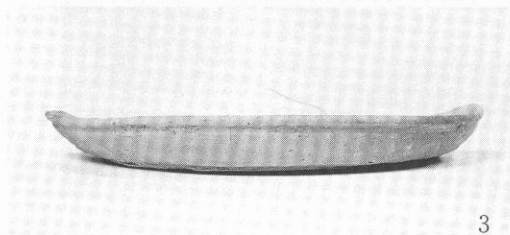
Plat 5



1



2



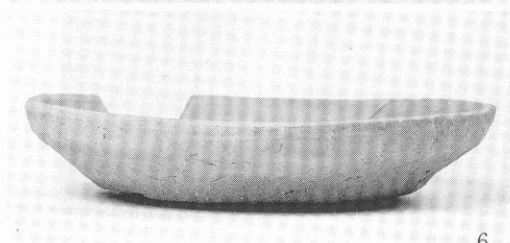
3



4



5



6

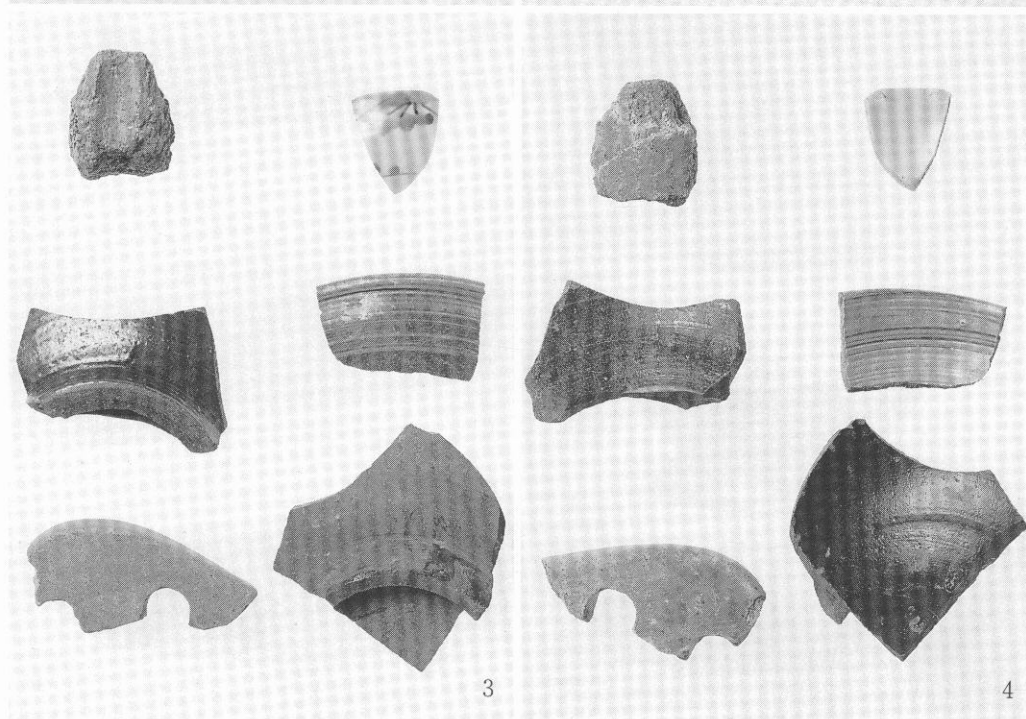
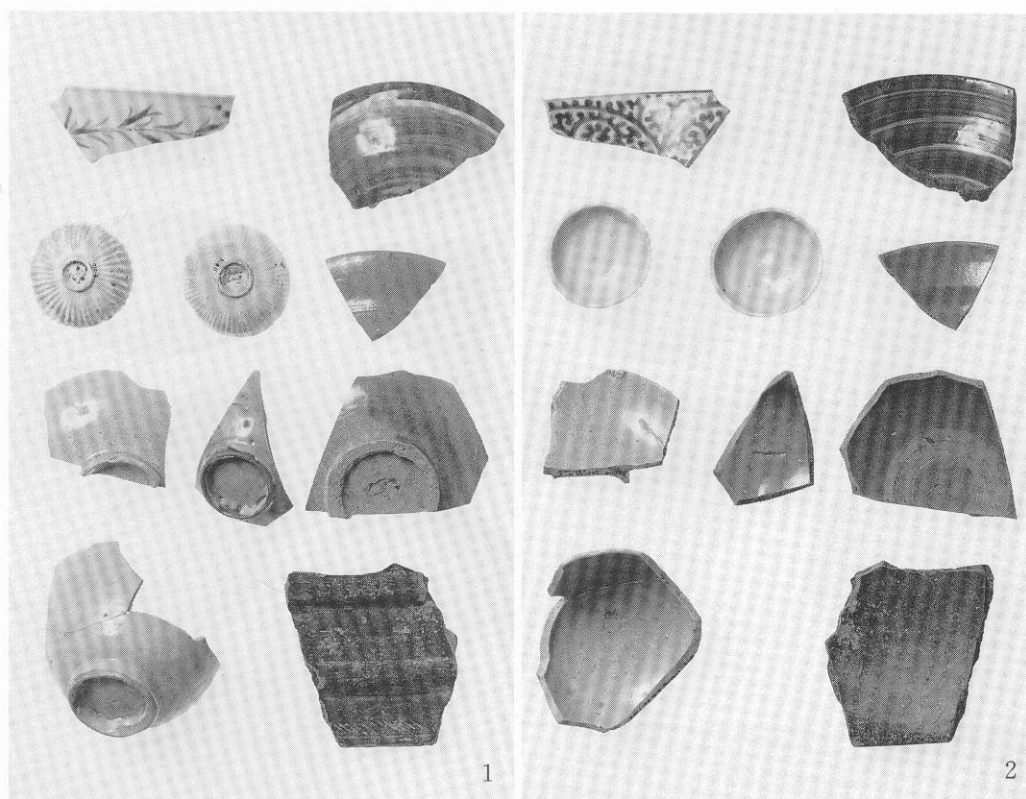


7

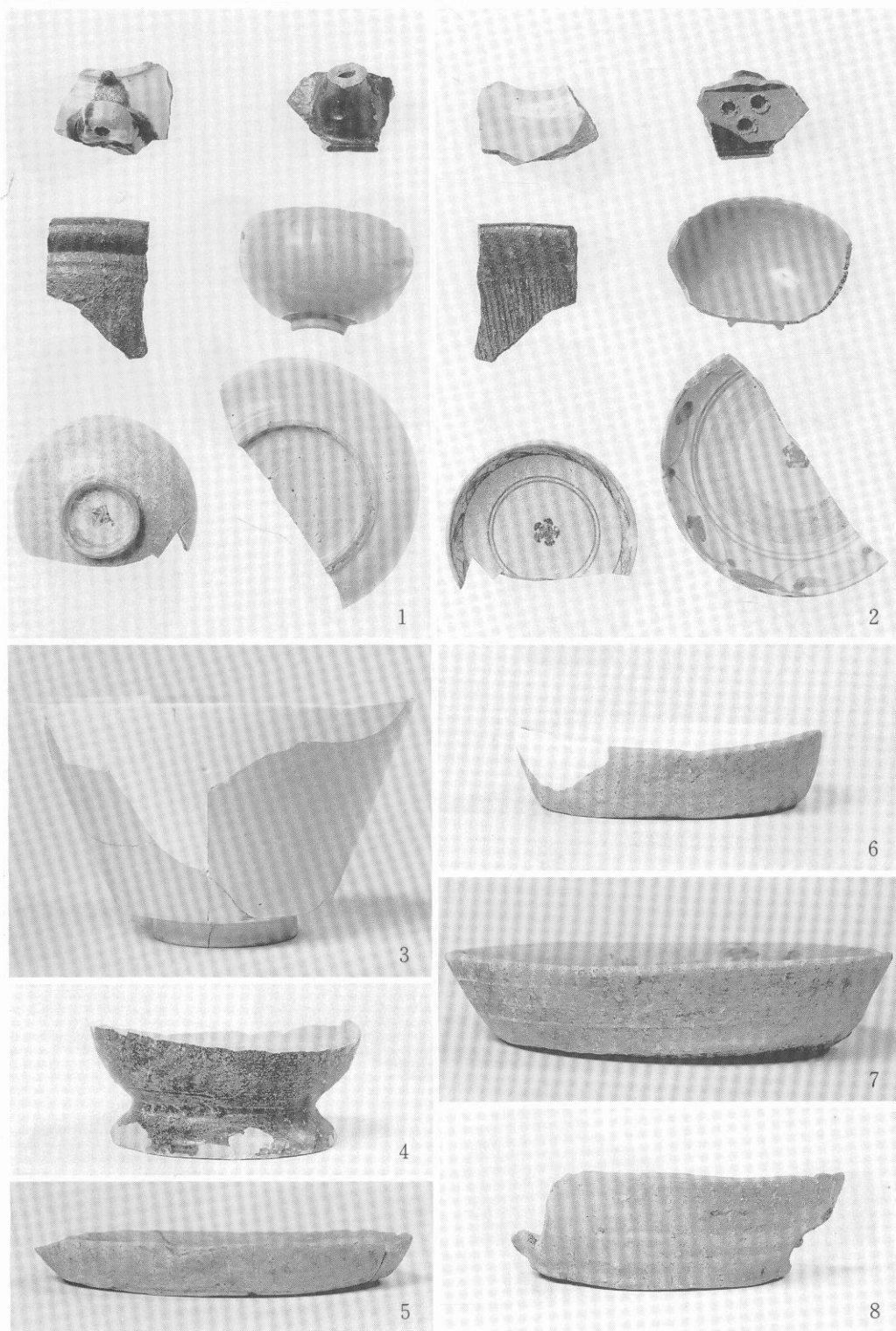


8

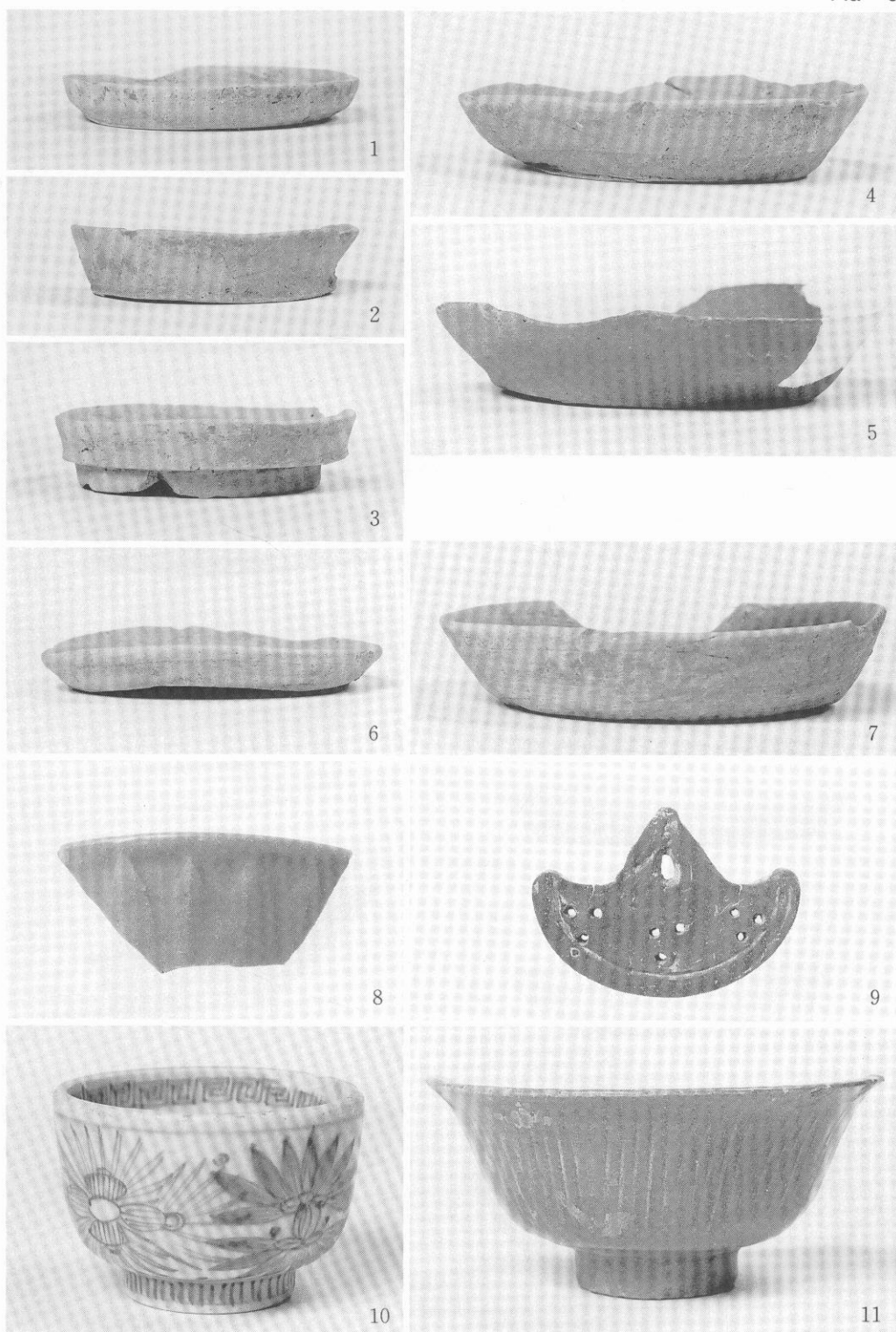
S K 005 · S K 022 · S K 034出土遺物



S K 008 · S K 032出土遺物

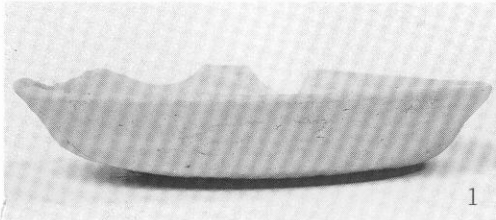


S D 003 · S X 010出土遺物

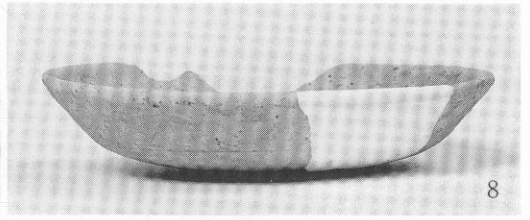


S X 010・表土出土遺物

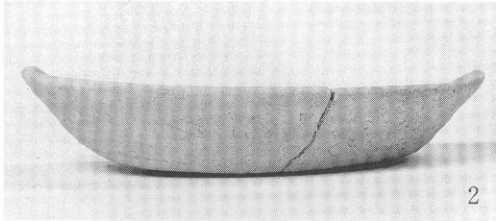
Pla 9



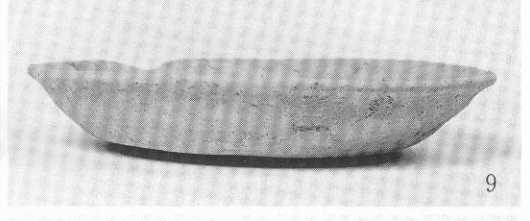
1



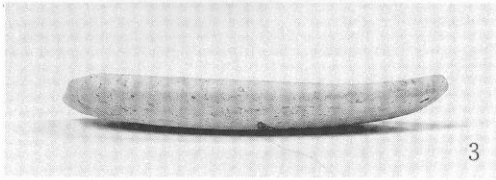
8



2



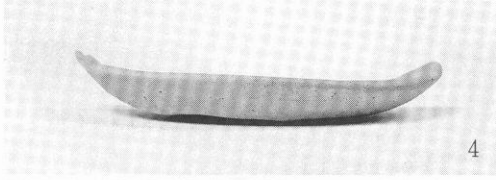
9



3



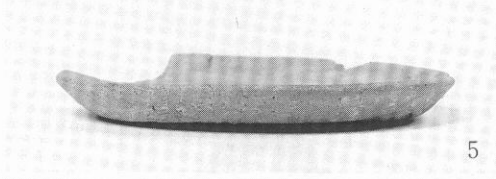
10



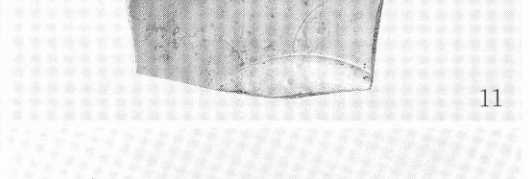
4



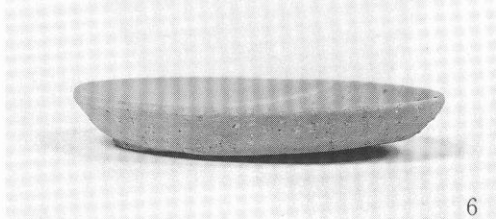
11



5



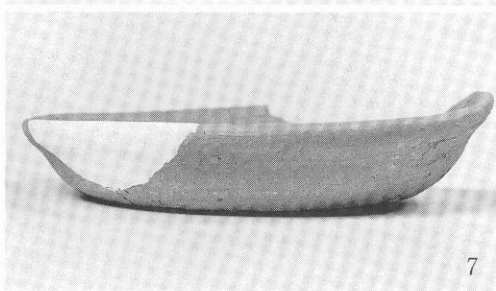
12



6

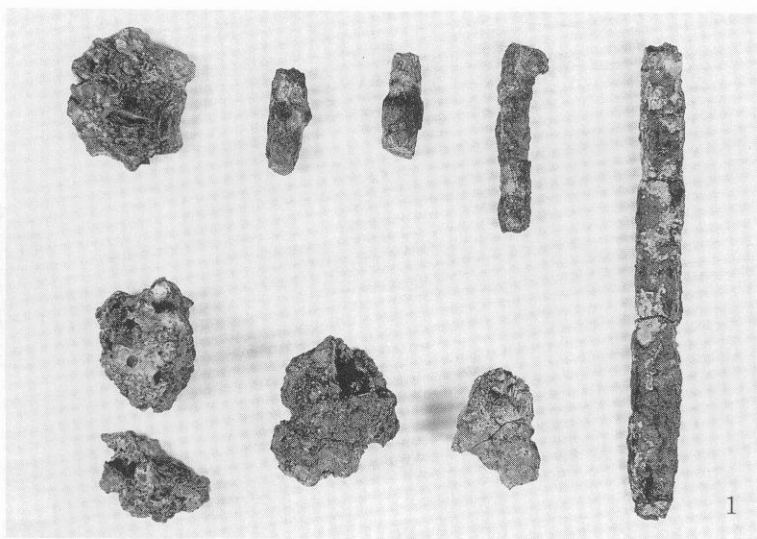


13

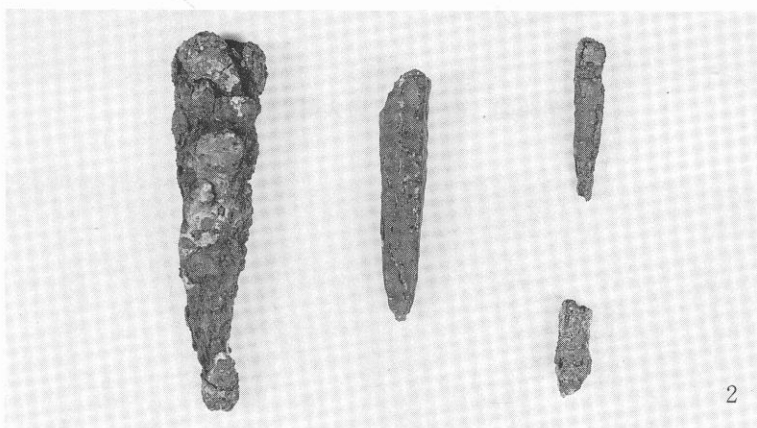


7

S X 020出土遺物



S X 010出土鉄製品



S X 020出土鉄製品



S X 020出土鉄製品

太宰府天滿宮鐫華表鑄立日記

『太宰府天満宮鍔華表鑄立日記』

はじめに

ここに掲載する「太宰府天満宮鍔華表鑄立日記」は、天明元（一七八二）年に現在の天満宮参道の入口部分（松屋の前）に建立された銅製の鳥居について、願主である常安九右衛門が発願から建立までの顛末をつづったものである。

常安氏は肥前唐津の捕鯨を業とする網元であったという。

また、この鳥居は太平洋戦争の最中の昭和十八年八月十二日に太宰府天満宮から政府に金属供出され、姿を消した。大町の地名がこの鳥居に由来する「大鳥居町」であったとする説があり、まさに地域に根付いた建造物であった。

文書の所有は近藤典二氏（福岡市南区筑紫丘二丁目在）であり、読み下しは池畑祐樹氏（福岡県地方史研究所）、校正は太宰府市教育委員会がおこなった。御協力いただいた方々に心よりお礼申し上げます。

太宰府天満宮鍔華表鑄立日記

一、筑前太宰府天満宮は某若年の砌^①信厚の御宮にて、某三十四歳に相成候^{（安永二年）}巳の冬、佐嘉表銀取引^②付大難出来あ^③たし候節、以御神慮大難吉事と相成、其後御神慮弥増にて若年より不束の身分^{（当所御上佐嘉御上）}御双方之奉蒙御恵を仮て被下、斯迄相成候儀、偏に御神慮と徹心取悉、夫より天満宮に何そ一際^④の御益に相成候寄附仕度存立、宿坊満盛院^江相伺候^⑤候処、御神前^江御聞上られ被下候得^⑥者、石の燈籠か鍔華表かと御聞^⑦に在之候故、両品之内^⑧寄附致候様^⑨と有之候。鍔華表と申候てハ大造成儀にて身分不相応にハ相心得候得^⑩共、我念力を以何様成就為仕可申と三十八歳に相成候酉^{（安永六年）}の年存立、大坂^江も数度承^{（マ）}繕^{（マ）}佐嘉筑前其外近国所々にて承合候へ^⑪何分他所にて請負之鑄立不定に相聞へ候。依之某引受鑄立申より外無之趣に相決候故、夫ハ鍔華表鑄立の心配茲之。

一、天明元年丑六月十六日、大坂嶋之内道人町池田屋七右衛門と申仁、某^{（鐘カ）}鍔華表鑄立之趣及承御世話申度旨にて新蔵と申者兩人罷下り候処、某佐嘉逗留中にて同十八日佐嘉旅宿へ兩人共^⑫罷越右之趣申聞候。同廿六日致面談鍔華表鑄立の一件委く承知致候^⑬候、七右衛門申方甚尤に相聞へ、凡千兩位之入用にて鑄立可相成趣申聞候。

左候得^き所々積り、前とハ過分下直にて鑄立成就相成候儀と相心得、艮日^ふ建立存立、天明元年丑七月八日^ふ七右衛門新藏一所に佐嘉出立致太宰府^江趣、同九日満盛院へ着仕、鍔華表鑄立候^ニ付、可相成ハ幸府にて鑄立仕度満盛院寺領其外所々致見分候へ^共、湿深く有之候。其上炭払底にて鑄立不相成候儀相決、依之七月十日博多^江出浮鑄立場所之儀石見屋仁右衛門杯及相談、其外釜師五次兵衛両三人、西川屋長兵衛方^江相見へ十一日ハ終日及相談候得^共、博多にても何分鑄立不相成趣^ニ付同十二日七右衛門一所に致帰宿候。何れ当所^ニ而鑄立申より外無之趣に相決候故、大坂^ふ功者成鑄物師両三人も相雇罷下り候様、猶又鑄立^ニ付入用之品々鉛白味其外鑄立入用之諸道具不残買下し候儀委細申談、七月十八日七右衛門新藏当所致出立候。

一、丑八月下旬^ふ名古屋休右衛門大坂^江差為登、諸買入之品相求、猶又鑄物師棟梁眼流平兵衛と申仁、池田屋七右衛門^ふ相頼、外^ニ安兵衛と申者相雇、鉛白味古銅并万力か、苧鑄立道具諸入用之品不残相求、御手船自在丸^ふ池田屋七右衛門眼流平兵衛堀田安兵衛休右衛門一所に丑十一月四日致下着候へ^共、某佐嘉逗留中にて同六月右三人并休右衛門一所に佐嘉へ打越候故佐嘉表にて諸事申談、同十日佐嘉^ふ四人共^ニ唐津へ差戻、某ハ佐嘉致逗留候て、鑄立場所見立候様^ニ申遣候處、西の浜初數ヶ所致見分候由之所一丈五尺

五寸堀申候て水出不申所ならで鑄立場所に不相成候故、木綿町懸ヶ屋數^ふ外には場所所有之間敷と申聞候^ニ付、佐嘉表^ふ内分相願、猶又木わた町定役初町内^江も申談、十一月廿三日願書差出、同廿八日木わた町^江た、ら相立鑄立候ても不苦趣被仰付候。

一、木綿町掛屋敷夫^ふ普請等いたし、た、ら一挺相立、庭^ニ一丈五尺五寸穴掘候^ニハ勢子板を以口一丈五尺底八尺深サ一丈五尺五寸堀立候處、不思儀哉聊水出不申一丈六尺と成候へ^者、嚴敷水勢に相成候得^共五寸の事にて一向水氣無之、一丈六寸之柱鑄立相成候様穴成就致候。

一、柱鑄立候形拵^ニ桶師本町仁兵衛其外大勢相掛形之下地十二月初^ふ正月末迄桶師大工數百工相懸候て柱形之下地致出来候。夫^ふ眼流平兵衛初佐嘉^ふ谷口安左衛門同清左衛門当所釜屋庄兵衛猶又庄兵衛釜屋之番子不残相懸ヶ、二月廿日過迄に形拵千工余掛り候て致出来、夫^ふ焼立、二月廿九日迄に出来致候^ニ付柱四本之内壹本二月晦日鑄立に相極^候る。

一、天明二年寅二月晦日朝五ツ時^ふた、ら相立候て鉛白味共^ニ地金高三千三百斤七ツ比迄に漸吹仕廻に相成候。仍鍋釜之湯口明け戸樋^ふ鑄形に入候得^共餘り手間取候故か湯加減甚惡敷一斗程と見^江候。湯形^ニ入り候て跡ハ出不申候。其節某ハ勿論平兵衛も甚仰天其外數百人の見物行を流寔^ニ無念の有様無申と候。無是悲^ハ其日ハ其候

にて相仕廻候。

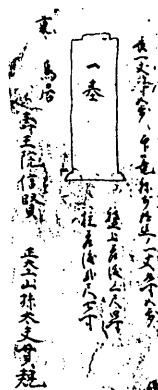
一、翌三月朔日千工余入候。鑄形打崩堀上見候処、右の柱盤上より式尺六寸程も出来致文字も明らかに鑄立致出来候得共、文字之居り場所甚不宜。縦湯加減宜敷候て柱壺本無難に致出来候共、後年迄之心障に相成候故能も鑄損し候者哉と存候へハ、是又御神慮と難有奉存、却後にハ悦候。尤此節鑄損の不益安からず候へ共斯迄致懸り候儀此上ハ最早何ヶ年懸り候共、是悲一度ハ成就致させ可申と弥差部^{はま}り心配いたし候。

一、た、ら一挺にてハ三千斤余の地金涌立不申候故、何れた、らハ式挺相立可然旨細屋与次兵衛同所棟梁藤四郎も申聞候に依て、俄にた、ら一挺相増細屋与次兵衛方掛^ニリ、棟梁藤四郎其外番子中不残相諾形拵にも此節相懸ケ候。尤釜屋庄兵衛并番子中是ハ平兵衛仕立候。最初之た、らに不残相掛置候。

一、両釜屋棟梁并番子中佐嘉谷清左衛門、谷口安左衛門其外手人共ニ都合三拾七人眼流平兵衛差図を以日々形拵致候処、三月廿八日迄に形拵致出来、夫々形焼立、同廿七日迄相済、翌廿八日鑄立に相極候。

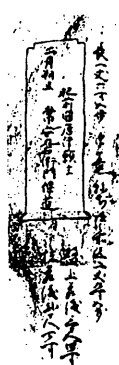
一、天明二年寅三月廿八日明六ツ前分た、ら式挺相立吹立候処、白味鉛共三千五百斤之地金四ツ半比迄に吹仕廻候。尤此節ハ俊成坊戸川民部前日ハ之祈禱にてた、ら之場所ハ勿論所々注連張格別

清メ諸事ニ念入候て、鍋釜之湯口一番た、ら平兵衛口切二番細屋棟梁藤四郎口切候て両方一所ニ式ツの戸樋を鑄形に入候処、九ツ前に入仕廻候。今度ハ出来致候様ニ相見^見候故、安堵の思ひをなし跡仕廻夜五ツ比迄に相済候。翌廿九日内外の形崩し万力を以釣上ケ相改候処、無難に致出来、文字の居り所聊申分も無之、則左之通ニ柱壺本致成就候。



一、其後も右人数にて形拵いたし候処、四月廿三日ニ形拵出来、此節ハ湯加減もしれ候故、地金餘と吹立餘り湯にて楔式ツ貫之繼壺ツ鑄立候筈にて同廿四日ハ形焼掛り廿八日の鑄立に相極候。

一、天明二年寅四月廿八日明七ツ比ハ式挺のた、ら相立吹掛り候処、五ツ半過^ニ白味鉛共三千八百斤の地金吹仕廻候故、平兵衛藤四郎鍋釜之湯口を切戸樋を鑄形^ニ入候処、別^別火勢厳敷候へ共無難に柱形に入仕廻、其後楔式ツ貫の繼壺^ニ鑄形に入済候て日暮此迄に跡仕廻相済候。翌廿四日内外の形取崩し万力にて釣上ケ相改候処、別^別宜敷出来文字も能居り左之通り柱壺本出来并楔壺ツ貫之繼壺ツ是又能出来。





一、此度ハ上之柱鑄立候ニ付内形盤上共ニ下地替り候故餘程手間入候得
 共右人数にて形拵いたし候処、五月廿六日迄ニ形拵致出来、夫々焼
 立、同廿八日鑄立ニ相極候。

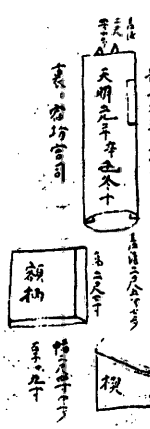
一、天明二年寅五月廿八日明ヶ七ツ時合た、ら式挺相立鉛白味迄ニ三
 千八百斤之地金四ツ時前に吹仕舞、平兵衛藤四郎鍋釜之湯口を切、
 式挺之戸樋合鑄形に入候処、無難に入洩候。夫々額柄杓ツ楔杓ツ
 餘り湯にて鑄形に入候て暮比迄に跡仕舞相洩候。翌廿九日内外之
 形取崩し万力にて釣上ヶ改候処、無難ニ左之通柱出来、尤額柄ハ
 鑄損楔杓ツ致出来候。



一、此後ハ上之柱杓本鑄立候得者柱之分四本成就相成候故、最早大願
 成就と某も落付候故、棟梁平兵衛初諸職人番子并家来共正も夏物
 并褒美等惣人数正差遣候て最早成就に近寄候間、随分致出情呉候
 様ニ申候処、何レも致出情候故六月十八日迄ニ鑄形致出来、夫々焼
 立、廿二日鑄立ニ相極候。

一、天明二年寅六月廿二日昼九ツ時合た、ら式挺相立吹掛候処、鉛白

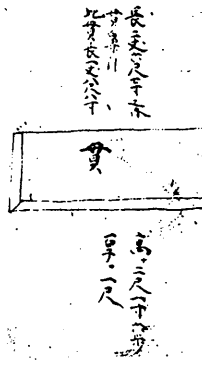
味共三千八百斤之地金八ツ時吹仕廻ニ相成、鍋釜之両湯口を明、
 例之通二挺之戸樋合鑄形ニ入候処、無難に出来候様相見へ、猶又
 餘り湯にて額柄杓ツ楔杓ツ鑄立候。何れも無難に出来相見正、五
 ツ半比迄に跡仕廻相洩候。翌廿三日内外之形崩し万力にて釣上相
 改候処、聊申所もなく立派に致出来候。是にて四本之柱鑄立成就
 に相成安堵ゐたし候。此度之鑄立之柱之通。



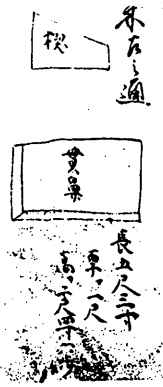
一、柱ハ四本共に吹仕廻今度ハ貫鑄立申答にて、貫長サ式丈六尺七寸
 貫鼻五尺にて柱の内にて継候て継無しと見へ候様に、此度之貫長
 サ一丈八尺八寸程にて是迄の穴埋候て横式間長サ四間程深サ八尺
 に堀り替勢子板にて土せき留メ穴も手入多く其上貫形別而手入故、
 九月朔日迄七十日目にて漸貫形出来いたし、同二日合焼立、九月五
 日之鑄立ニ相極。

一、天明二年寅九月五日ニ相成候処、北風強く大風同前にて何分た、
 ら相立かたく、然れ共一日も延候而ハ形にしめり入候故、又候形焼
 直し不申候而ハ不叶候故、甚心遣ひいたし大風ながらも無掣た、
 ら相立候様に致一決隣家の屋根にハ水手桶或ハねこたを懸け、廿
 人程も家根に上げ置候て火の子を防き候様に手配いたし、九ツ

此より吹懸り候処既に^(マ)家根裏に三度程燃付候得共不思議哉、大風^ニも火外^ニもれず消候。四千式百斤之地金八ツ半比吹仕廻、此度ハ長き物故式挺にてハ湯廻り悪敷、式挺相増四挺之戸樋にて四ヶ所今貫形に入候処、無難に入済致安心跡仕廻夜四ツ過迄に相済候。翌六日内外之形取崩し相改候処、是又無難に別^面見事に致出来候。貫形左之通。



- 一、柱四本額柄楔三ツ貫鼻も沓ツ出来候故、残之品貫鼻沓ツ楔沓ツ也。此二品形拵も致出来、廿五日迄焼立相済、九月廿六日鑄立^ニ相極。
- 一、天明二年寅九月廿六日貫鼻沓ツ楔沓ツた、ら沓挺相立鑄立候。翌廿七日相改候処何もよく出来、左之通。



- 一、華表も追々出来いたし候へハ最はや笠木嶋木とに相成候得共、笠木嶋木ハ別^面大造成鑄立にて形拵餘程手を込、急にハ出来不致候故、最はや年内ハ相止メ申筈に相決候。尤此序に英彦山へ鐙燈籠一對鑄立候て寄附いたし候筈に存立候。但燈籠高サ一丈六尺五寸、

石之地輪高サ沓尺にて惣高サ一丈七尺五寸也。別紙絵図あり。是より燈籠之形拵に懸り候。尤眼流平兵衛ハ燈籠之形拵差図にて笠木・島木之形下地拵にかゝり居^候。

- 一、十月廿六日右燈籠之笠同笠受之式ツ鑄立候。
- 一、同晦日笠沓ツ笠受沓ツ鑄立候処、笠ハ鑄損し笠受沓ツ出来いたし候。
- 一、十一月九日笠沓ツ鑄立候。
- 一、十一月十日火袋沓ツぎほふし沓ツ鑄立候。
- 一、同十七日受蓮花沓ツ鑄立候。
- 一、同十九日伏七蓮花一ツ伏七舛式ソ花式ソ鑄立候。
- 一、十二月三日火袋吹候処、別^面見事^ニ出来。
- 一、同十七日受蓮花沓ツ扉式ソ鑄立候。
- 一、同廿五行燈受鑄候処、至^面見事^ニ出来。最早年内無餘日候故、年内ハ形拵と^ニたゝら小吹共^ニ相止メ候。
- 一、天明三年卯正月五日より細工相始。
- 一、正月十七日行燈受鑄立候。
- 一、同廿一日燈籠竿沓本鑄立候処、見事^ニ出来。尤此竿にハ奉寄進燈籠^{肥前唐津}沓対^{願主常安九右衛門保道}。
- 一、同廿七日竿沓本鑄立候。此竿之文字

天明二年^寅十二月吉日^{裏二宿坊}惣嚴坊^{与記}

一、二月四日地盤鑄立候。

一、同九月右同断。

右之通にて燈籠ハ皆済吹仕廻ニ相成大慶致し候。是ハ笠木嶋木鑄立候筈にて右形拵に不殘懸り候処、二月十三日迄ニ形拵出来致候故、十四日ハ焼立十七日鑄立に相極候。

一、天明三年卯二月十七日昼九ツ時分た、ら式挺相立吹立候処、七ツ前に鉛白味迄ハ四千弍百斤之地金吹仕廻候故、鍋釜之湯口を切、平兵衛藤四郎笠木嶋木の鑄形に四挺之戸樋にて四ヶ所ハ入候処、地金不殘入済候^而もせきに満不申、甚以心遣ひ致候得^共、其俣にて其夜四ツ時迄ニ跡仕廻致し候。翌十八日内外之形崩し改候処、笠木嶋木厚五分之鑄形□出候て式寸之厚サに相成、笠木嶋木漸半分餘出来致居候て鑄損し殘念此事ニ候。併幾度^{ニ而}も鑄直し可申趣眼流平兵衛に申聞候処、笠木嶋木ハ別^而大造成物にて候得^者鑄立^{ニ而}ハ出来致間敷候故鑄延板に鑄立候^而取合可申由申候。然^共笠木嶋木と合せ物に致候儀口惜く年数相懸り候^共迎之儀何卒鑄立に可致旨様々評儀致候へ^共何分鑄立不相成趣申候故、無是悲延板にて笠木嶋木之形りに二月十九日ハ廿三日迄十四五度鑄立申候得^共出来致不申。平兵衛も様々致工夫候て鑄形を仕替或ハ五分之厚サ八分にも致見候得^共出来致不申故、最早笠木嶋木としてハ鑄立之仕法無之由申候。依無是悲^{（キ）}笠木嶋木ハ下地木^{ニ而}拵銅延板^{ニ而}包申筈^ニ相決

候。

一、笠木嶋木之形拵^江ハ船大工可被置迎八百屋半助所^江居候船大工数人相願、笠木嶋木之底ハ桶板厚サ三寸^ニ藍に土台石三挺切入候て重りに致、脇上柄何レ^キ老寸五歩之杉板にて鉛釘^ノ^{（想）}懸^ニ躰上下脇共^ニ黒塗ちやん懸^{（想）}ニ^{（想）}三月廿五日迄に致出来候。

一、上に包申候銅延板下り合無之候故、俄に大坂^江嘉右衛門安兵衛兩人二月廿五日ハ調に登せ申候処、三月廿五日相調下り申候。廿六日ハ大工新吉友左衛門文六其外大勢包^ニ掛り申候故、四月朔日迄^ニ延板包出来致候。右之通^而華表成就^ニ相成候故木綿町掛ケ屋敷^ニ組立候筈^ニ相極、四月朔日ハ建掛り同三日迄^ニ笠木嶋木上ケ仕舞候処、至^而恰好よろしく相建安心いたし候。并英彦山燈籠式本、是又一所に北側に建候。猶又天満宮御神前^江鑄大香爐を一ツ寄進仕候筈^ニ出来致居候を華表下^ニ飾り置華表の四方ハ注連を張り諸人見物差支不申候様に致置候。同五日ハ老若男女貴賤之見物人近在ハ勿論遠郷嶋^{（キ）}ハ数千人之群集無限其節之散^{（想）}淺^{（想）}不殘太宰府^江上ケ候。

一、右華表組建置候間ハ見物ハ不尽候へ^共、八月御祭礼前^ニ宰府^江建済不申候^而ハ不叶候^ニ付四月廿一日ハ解か、り同廿三日迄に解仕廻候。夫ハ右華表物数八箇荷拵に致か、り候。柱之分ハ下地七嶋上包莚^{ニ而}相済候得^共貫笠木嶋木ハ右之通下包致其上を簍拵にて荷拵甚手込候得^共昼夜多人数相懸り候故、英彦山燈籠荷拵迄四月廿九日^ニ相

済候。

一、右華表人足^二ハ步行持不相成候故、眼流平兵衛工夫を以京都御車風に大車四挺拵候。

一、宰府^江華表建候。入用之諸道具不殘此元^ハ持越候^二付^前ハ土台石長柱車勢子板其外材木等迄不殘西之浜^ハ船積いたし候^二付右之車四ツ^二前^二廿七日^ハ廿九日迄三日之間余斗之諸道具皆以西の浜^江出し候^前都合能船積いたし候。

一、天明三年卯五月晦日華表幾に相極候。依之惣町^ハも加勢差出可申由^二付断も申かたく受申候。扱又当町^ハ惣出^二前^二最初柱式本^二車^二乗貫鼻式本額柄楔四ツ英彦山燈籠一對共^二二車^二乗せ都合四車数百人懸りて引立申候。尤俊成坊戸川民部先立^二前^二前後左右ハ当町^ハ才領人数多付添、四ツの車^二ハ四神の旗を立、大旗四本にハ太宰府天満宮寄附之華表と相記木綿町より西之浜迄八人之者先頭^二前^二引出候殊勝也。其日の見物大群集にて賑い申候。二度目にハ柱式本笠木式本同様にて引立、弥増之群集也。西の浜にて江川町之子供車に敷れ候得^共不思儀哉、怪我もなく西ノ浜船場迄四ツの車兩度返りにて燈籠迄も暮比迄に引済候。

一、惣町加勢人賄所ハ西の浜に縦屋建酒食共^二差支不申候様に用意いたし候処、在々^ハ之見物数千人赤飯ハ御供^与申酒ハ御造酒と申立頂載致度申候て取懸ヶ候故中々賄も行届不申候得^共、俄に可致様

も無之尤何程用意置申候^前も際限ハ無之様子に相見へ候。其中^二ハ給酔候者も相見^江候。

一、卯五月朔日^二ハ華表八箇并燈籠も船積可致候処、北風強く船積不相成候故西之浜縦屋^二番付置申候。五月五日漸和波に相成候故、懸り船迄之所材木にて筏を組、ろくろにて巻込候様に船積之用意いたし候。尤積船ハ筑前石積天満五艘讀岐屋伝右衛門鮪細だん平式艘水嶋半次郎船一艘ノ八艘^二華表并燈籠其外華表建道具材木土台石兵糧米世帶道具迄八艘に七日迄積仕廻候処、翌八日順風^二相成明ヶ方八艘共に大嶋出帆いたし候処、至^前之順風にて博多^江昼過入津。其節ハ博多之浜^ハ数艘漕船迎に出甚賑々敷無難に博多^江着致候。某事ハ八日昼立^二前^二深江泊り、九日昼博多^江致着、夫^ハ華表燈籠共^二博多洲崎浜へ揚、夜分ハ燈籠灯シ候。扱又石見屋隣屋敷^二ハ英彦山寄附之燈籠組建置候処、博多福岡^ハ華表并燈籠之見物人昼夜無限候。

一、華表建諸道具并世帶入用之品々宰府へ遣候物過分之儀、博多^ハ宰府迄五月十一日^ハ一日^二一車^二二車宛手人にて引候得^共、過分之諸道具極暑之砌、急にはかゆき不申、六月廿一日迄凡四十日程か、り候^前宰府肥前屋惣助所迄運び済候。尤肥前屋惣助所手狭に候て多人数逗留不相成候故、早春^ハ裏座敷普請致し宿^二相極。

一、卯六月廿六日華表引に相定候処、博多福岡并近在^ハも華表引^二罷

出度由_ニ候。加勢受候得_者却_而心遣ひも多く候故、願ハ請負_ニ引_而引_而度候へ_共天満宮へ之志断も申かたく無_レ加勢受候筈_ニ相極メ候。

一、天明三年卯六月廿六日博多洲崎_ハ宰府へ華表引候節、四ツの車へ柱四本額柄楔乗せ四方_ニハ四神の旗を立、并太宰府天満宮寄附之大旗立注連張り四ツの車博多洲崎より辻ノ堂口へ音頭にて引出候_ニ躰、賑々敷中_ニも甚殊勝也。博多福岡近在々之見物群集無_レ候。

尤鯛町_ハ石見屋問屋故別_ニ加勢人多く、別_ニ車老挺仕立貫鼻_ニ乗せ千疋猿之飾り物某_ニも樽大熨と之進物右車_ニ乗せ、宰府迄はやしに致華表之車一所に來候。其日の群集前代未聞と風聞致候。

一、雜掌限におゐて昼食にハ赤飯串指者染白片木盛_ニ酒ハ樽の鐘明け茶碗_ニ柄杓添置凡五百人前用意致申候_ニ、追々宰府_江申來候_ニも車引五百人位之儀_ニハ無_レ之由申候_ニ付、俄_ニ不足之分相増候得_共不任心底所全行届可申様_ハ無_レ之候。宰府_江ハ猶以人数相増候_ニ付肥前屋ハ勿論大町_ニ手広き所数ヶ所貸り候て賄漸に相仕廻、大混雜_ニ有_レ之候。柱四本額柄貫鼻楔乗せ候て四車共に無滞宰府へ当前に引付申候。

一、華表引残り候分七月三日と相定四ツの車に笠木嶋木貫其外燈籠之類乗せ前度之通博多洲崎_ハ辻ノ堂口へ引出候_ニ、此度ハ別_ニ評判太く相成博多市中之子供数百人立派_ニ衣装を拵車之網に細引付候て、其砌瘡瘡流行候最中_ニ、瘡瘡輕き様に宰府迄幼年之子供も引

來殊勝成事無限候。扱又今度之加勢大人数と相聞_江候ゆへ、千人程_ニも届候様に雜掌限宰府_所江赤飯串指にしめ白片木盛_ニ酒ハ樽の鏡明け茶碗柄杓相添最初之通用意致し置候_ニ、四車に取付居候人、中々千人位之儀_ニハ無_レ之趣追々申來候得_共、雜掌限迎も可致様も無_レ之、宰府ハ肥前屋惣助方ハ勿論其外大町_ニ廣き所九ヶ所借り候て致賄候へ_共、半分程ハ休所も無_レ之賄方行届可申様も無_レ之_ニ付何方_ニ成_共銘々凌飢_ニ及不申様支度有_レ之候ハ、後日手前_ハ公方ハ可致旨申談候て漸夜五ツ比迄に相済申候。寔に大群集故前代未聞之心遣ひも致候得_共、聊何障なく兩度之華表引無難に相済候。

一、華表建候杓石ハ宰府町端_レより二ツ共に切出候。尤引出候節、夫しゆらに乗せ手人之外ハ宰府大町より七十人程宛兩日加勢有_レ之候故、二ツ共に兩日_ニ引出申候。尤賄ハ肥前屋惣助所にて兩日共に致候。

一、杓石に相懸り候石工宰府吉郎次博多仁右衛門当所よりハ文七清助殿之輔德兵衛其外ハ博多石工七人相雇都合拾貳人相懸_ニ、卯五月_ハ七月十日迄に杓石切立致出來候。

一、杓石切立之間ハ大町若松屋へ石工中相分ヶ候。地突_ハ華表建済候迄ハ若松屋へ不殘毎日相詰取と候。

一、卯七月十一日_ハ地突致懸り申候_ニ、近辺へ差支有_レ之暫相止メ候。十七日_ハ又々相始地突致候。手人之外ハ毎日宰府_ハ三四十宛之加

勢有之候故、七月廿三日迄に日数十二日にて地突出来候。尤華表建候場所地之内水強く出候所にて水留り不輕候故、沓石之脇に水道接候て地の内に水流候様に致置候。地突も致出来沓石^茂二ツ共に居り候^ニ付、卯八月三日^ハ華表建懸り同十二日迄に日数十日にて建済候。尤華表柱之内ハ貫下迄小石白土合^ニ而詰置末々迄聊狂ひ不申様に念入建済致成就候。依八月十六日棟上ケ之規式相懸候筈に相極メ候。尤同日大鳥居延寿王院満盛院其外十ヶ寺程御通り初在之由申来候。

一、華表棟上ケ之節宰府御社中ハ勿論、町之近在車引道筋宿々其外世話に相成候所へ不殘配候餅并華表下に蒔餅之分、幸屋^ニ而日搗候。

一、八月十六日華表棟上ケ之規式通り初^ニ相極り候儀専ら風聞在之候故、兼々御重恩之上^ニ大造成御樽肴拝領被仰付候。其外宰府御社中ハ御一ヶ所も無殘御樽昆布扇子并佐嘉懇意中馬場森永堤鍵山森田其外多人数被相越樽肴猶又大嶋台銘々^ハ之進物^ニ而博多ハ石見屋初其外問屋中数ヶ所^ハ之樽肴嶋台等来候。当町ハ惣町無殘宰府ハ町々近座或ハ華表引候道筋休所之宿々^ハも樽肴致到来候処、四斗樽十七挺一斗樽^ハ式升樽迄百式拾七大嶋台七ツ白木折五十六扇子昆布載候台も数多之儀^ニ而置所無之不殘華表之脇に積立置候。

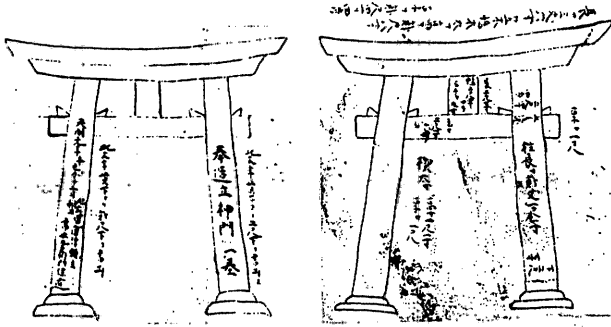
一、天明三年卯八月十六日朝六ツ時^ハ棟上ケ之御規式御勤始り候処四ツ比相済候。夫^ハ大鳥居小鳥居満盛院其外十ヶ寺程御通初相済候

て某事ハ三間後れ通り候様^ニと也。倅共ハ夫^ハ式間後レ弟共ハ又壹間後れ夫^ハ佐嘉筑前唐津伊万里呼子所々^ハ其節相越居候懇意の人々并惣職人華表に相掛り候人数不殘参詣致候様^ニと也。右之通^ニ而御通初済候^而御社^江致参詣候処稀成寄進と申儀^ニ而、某^江ハ満盛院^ハ造酒被下其外^ハ御番僧^ハ参詣之人数不殘造酒被下頂載相済候後音楽始り、御勤凡一時程之間御神前^ニ而奉拝罷在候内、某若年之昔を相考候へハ不如意之身分^ニ而右之燈籠一本之寄進も相成不申候。

某不思儀^ニも斯迄成立候て初癸池田屋七右衛門千兩位之人用^ニ而成就相成候趣申候^ニ付所々積高とハ格別下直^ニ而成就いたし候趣^ニ付、何卒我念力を以て成就為致可申と其日^ハ寄附存立申候処、七右衛門申候。其倍余入用之高^ニ相成候得^共華表入用何方^江も不納不致成就いたし候義全某^ハ寄進にあらず、天満尊神鐙之華表御為好被為遊候て我を御取立にて斯成就致候也。我ハ則支配に相立候哉^与存付候得^者難有サ弥増にて前後を忘落涙無限候。夫^ハ御勒相済候て御神前引取華表之元^ニ而規式飾り在之候。其下^ニ三間^ハ八間之仮屋建幕打有之候所にて拝領之御樽肴并所々^ハ之樽肴嶋台^ヲ以、佐嘉筑前所々懇意之仁^ニ棟上之規式^ニ相越候。人数宰府も世話^ニ相成候所ハ不殘惣職人共^ハ数百人華表成就之祝儀相懇候。尤佐嘉馬場長兵衛方^ハ華表之左右^ニ七尺^ハ九尺之大燈籠一對寄進有之。其外宰府町々筑前懇意中^ハ寄附之燈籠十五日^ハ十六日夜迄夥敷灯し候て夜

半過比迄ニ無滞相濟候。翌十七日跡仕廻ニ懸り卯八月廿七日諸職人迄も不殘宰府致出立武藏湯町迄相越、夫々英彦山寄附之鐙燈籠荷作りニ懸り二日市々英彦山迄人足ニ差送り、卯九月十日迄に燈籠も建仕廻候而九月十六日百日余り之日数にて連越候。惣人数一所ニ目出度帰宿致し候。

一、右華表鑄立候。懸屋敷其後致普請夫土藏を解、其跡ニ天満宮御社建立致聖持院勸請^{ニ而}華表天満宮と号す。天明七年未八月廿五日御遷宮致候処、市守之飾りもの燈籠前代未聞大造成儀^{ニ而}参詣無限候。此外華表一件ハ委く別帳に有之候得^共、三ヶ年之日記あらまし記置候也。



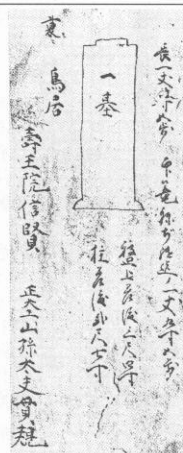


図 1



図 2



図 3



図 4

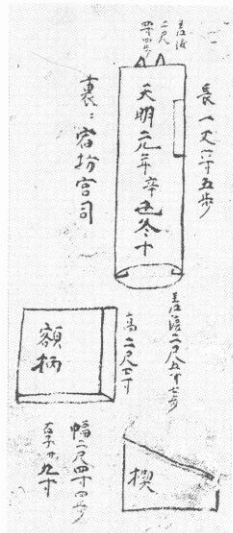


図 5

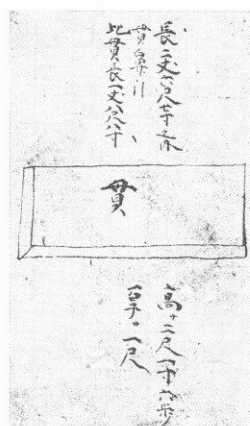


図 6



図 7

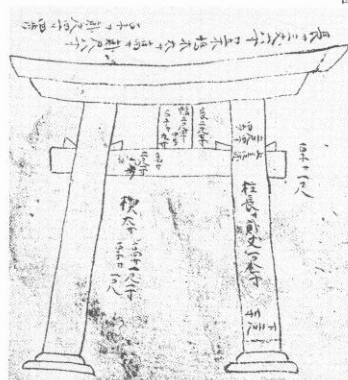


図 8

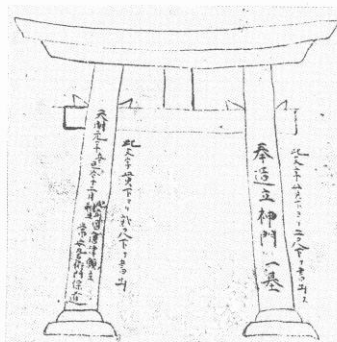


図 9

第35図 「太宰府天満宮鐫華表鑄立日記」挿図



第36図 ありし日の大町の銅鳥居



第37図 「日記」冒頭部分

大町遺跡

太宰府市の文化財第18集

発行 財団法人 古都大宰府を守る会
太宰府市大字観世音寺544-3
(大宰府展示館内)

印刷 瞬報社写真印刷株式会社
福岡市中央区天神5丁目4番16号

太宰府教育委員会の了解を
得て財団法人 古都大宰府
を守る会が増刷、頒布する
ものである